もうひとつの半月（パンダル）の詩

日韓教会交流史

日本聖公会東京教区
宣教委員会日韓交流プロジェクト編

序———

東京教区の日韓交流プロジェクトが、『日韓交流史』を発刊され、大変嬉しく思っています。

日本聖公会にとって、その宣教の使命を遂行するために、韓国との関わりを常に振り返り、またこの関わりを保ち続けることは必須の事柄です。日韓関係の歴史には、日本聖公会が、「悔い改め」、「謝罪」、「赦し」、「和解」という、救いの恵みに与かる道を進む福音の根本的要素が含まれているからです。

方承熹氏の『韓日聖公会交流史に関する考察』の結びの言葉の中で両教会が「献身を土台」としていかなければならないことを書いておられます。この〔神の派遣〕（宣教）の業への献身は、特に日本聖公会にとって求められていることであると思います。本書が東京教区にとって、この課題に取り組む手がかりになることを期待します。

主教　竹田　眞

Photo Gallery

―交流史の理解のために―

1）ハングル

韓国の地に足を踏み入れた時、誰でも驚かされるのは韓国文字、ハングルの洪水ではないだろうか。人の顔や自然の風景は日本とよく似ているのに、漢字やローマ字がほとんど見つからないくらい街の中の看板、広告、道路標識等、文字という文字はハングルで満たされている。

この文字は1446年に李朝の第四代国王である世宗（セジョン）によって制定された。この時はハングルという呼び名でなく、「訓民正音」（民に教えるに正しい音）という名であったようだ。

ハングル文字の創始者世宗（セジョン）大王

この文字は言語学者によってその構造上の精巧さと科学性が他のどの民族の文字に比べても優るとも劣らぬ、優秀な文字とされている。だが、ハングルの歴史は500年以上もあるのに、実際には婦女子や常民の間でわずかに使われたに過ぎなかった。近世に至ってハングルが朝鮮の近代化・発展のために注目されるようになる。1945年8月15日、日本の敗戦により朝鮮は南北に分断されたが、民族意識の高揚と共に南北共全面的にハングルが用いられるようになった。しかし南と北で綴字法や発音に多少の差違をもちながら使用されている。

2）安重根（アンジュングン）

日本帝国主義に朝鮮が併合される前夜の最後の義挙は、安重根による伊藤統監の銃殺だった。1909年10月、伊藤は安重根（アンジュングン）が放った銃弾三発で、ハルピン駅頭で即死した。その後、安重根（アンジュングン）も死刑に処せられることになる。

安重根（アンジュングン）と伊藤博文を対比してみると、伊藤が「帝国日本」の膨張主義者でしかなかったのに対して、安重根（アンジュングン）は、「東洋平和論」の確信にみるように、死を前にした法廷においても、朝・日・中三国の連帯とその意議を滔々と説いた「義」の人だったと言われている。

安重根（アンジュングン）記念館　中庭の石碑

安重根（アンジュングン）記念館の内部

3）三・一独立運動

「日韓併合」のあと、つもり積もった恨（はん）とみなぎる独立への意思により、1919年3月1日、民族代表33人による「独立宣言」が発表されたが、この運動は燎原の火のように朝鮮全土に燃え広がっていった。

その犠牲者もおびただしい数にぼり、3月1日から3ヶ月の間に、少なく見積もっても7,509名が殺され、負傷者は15,961名、検挙者も約47,000名にのぼり、またその死者の多くは虐殺されたということである。

東洋のジャンヌ・ダルク　三一独立運動の柳寛順（ユ カンスン）

三一独立運動のレリーフ

4）松山教会

東京教区聖職者短期研修で訪問した江華島にある教会。

北朝鮮とは指呼の間にある。

統一を願って建てられたソウル教区最北端の松山（ソンサン）教会

松山（ソンサン）教会の内部

5）江華（カンファ）教会

建立100年の江華（カンファ）教会

江華（カンファ）教会は江華（カンファ）島の小高い丘の上に建てられているが、去年でちょうど建立100周年に当たる。

日本の奈良キリスト教会、長野の聖ミカエル教会と同じように、いやそれよりももっと徹底して土着化を計ったようである。入口に掲げてある「三位一體、天主萬有」の文字も、慶州の仏国寺等で見たスタイルと全く同じである。

この教会に見られる古来から伝わっている固有文化との融合は、今もなお、大韓聖公会の中にも息づいているように思われる。

江華（カンファ）教会の内部

6）ソウル教区大聖堂

ソウル大聖堂は1926年に建築され、一部が未完のままであったが、当時の設計図によって拡張され1996年に完成した。この韓国建築技法によるロマネスク様式建築は、その美しさにより他の多くの教会建築のモデルとなりソウル市地方文化財の指定を受けている。

ソウル大聖堂は大韓聖公会の全ての宣教活動の中心をなしており、日韓交流においても常に重要な役割を果たしてきた。

大聖堂正面

拡張工事後

祭壇

拡張工事記念紋章

もうひとつの半月（パンダル）の詩　目次

序 ---------- 1

Photo Gallery　交流史の理解のために ---------- 2

概説　ナショナリズムを越える視点を求めて ---------- 11

日韓交流回顧 ---------- 18

BTプロジェクト ---------- 56

聖職者短期研修報告 ---------- 72

留学体験と日韓交流について ---------- 80

間石教会 ---------- 83

日韓セミナーから21世紀宣教大会まで ---------- 86

21世紀宣教大会について ---------- 99

韓国には心があった ---------- 104

日・韓のはざまに立ちて ---------- 112

新しい和解の文化の創造　李天煥主教インタビュー ---------- 124

東アジアの神学を　李天煥主教説教 ---------- 132

年　表 ---------- 139

あとがき ---------- 155

コラム

タイトル「もうひとつの半月（パンダル）の詩」にちなんで ---------- 10

久保田発言 ---------- 19

宣教のスピリットとは ---------- 62

BTプロジェクトこぼれ話 ---------- 66

「日韓交流史」を導いたもの ---------- 88

『知らない』ことは恐ろしい「慰安婦問題」は糾弾ではない ---------- 106

（表紙カット　高津寿江）

タイトル 「もうひとつの半月(パンダル)の詩」 にちなんで

「半月(パンダル)の詩(うた)」という呼び方で韓国の多くの人々に愛唱されている有名な童謡がある。これは1920年代の初めに尹克栄(ユン グ キョン)によって作曲されたが、日本の植民地統治に圧迫され、苦しむ韓国人の心の灯台となった歌である。

月にあるという月桂樹一本とうさぎ一匹だけ乗せて、白い半月の小舟が西の国をめざしている。帆もなく、櫓もないが、明けの明星だけを頼りに舟は渡っていく。西の国は解放と自由の象徴である。そこには奪われた祖国への熱い思いが見事に表現されている。

尹克栄(ユン グ キョン)は他にも沢山の優れた童謡を作ったが、音楽家を夢見て東京音楽学校予科に入学した。「半月(パンダル)」は関東大震災の朝鮮人虐殺に遭遇して故国に戻った直後に作曲された。

この歌が作られてから60年近く経過するが今もなお白い小さな舟は韓国人のさまざまな思いをのせて西の国をめざしているように思われる。

日韓教会交流史のタイトルとして「もう一つの半月(パンダル)の詩」としたのは教会はこの世の荒波に浮かぶ小舟であり、解放と自由の国をめざして渡っていくという意味を込めている。

なお、表紙イラストは浅草聖ヨハネ教会の高津芳江姉にデザインして頂いた。感謝をもってここに記す。

―半(パン)　月(ダル)―

1　青いお空の天の川
　白い小舟に
　月桂樹一本
　うさぎが一匹
　帆もかけず舵もなく
　それでも行くよ
　西の国

2　天の川こえて
　西の国へ
　雲の橋渡り
　どこ行くの
　遠くキラキラ光るのは
　明けの明星
　道しるべ

概説　ナショナリズムを越える視点を求めて―――

司祭　長谷川　正昭

一人の詩人の思い出から語りたい。1975年、私は生まれて初めて韓国の地を踏んだ。大阪経由釜山行きの空路である。31歳の時であった。朴政権の軍事独裁政治がもっとも猖獗を極めていた頃である。BTプロジェクト（三か月交代で四人の司祭が一年間、釜山教区の蔚山教会に住み込み、牧会・伝道にあたるというもの）の二番手として現地入りし、河野司祭と引継ぎをし、言葉と文化の異なる外国での生活が始まった。

蔚山教会で開いた日本語教室にやって来た生徒の一人であるアガシ（未婚の女性の総称）から韓国の抵抗詩人尹東柱（ユントンジュ）の名前を教えてもらった。尹東柱は日帝時代に日本に留学し、立教大学と同志社大学に学んだが、反日運動の嫌疑で逮捕され、福岡刑務所で毒殺された。彼の代表作「ひとかけらの恥なきを」は朴政権に反対する民主化闘争で投獄された同志を救援するためにハンケチに木版刷りされて売られ、広く韓国の人々に知られるようになった。次のような詩である。

死ぬ時まで
空を仰いで
ひとかけらの恥なきを
木の葉を揺らす風にも
わたしは苦しんだ
星を歌う心で
すべて死にゆくものを愛せねば
そしてわたしに与えられた道を
歩いていくつもりだ
今宵も星が
風に吹かれる

一見すると女学生好みのセンチメンタルな詩のように思われるかもしれない。しかし、この研ぎ澄まされた繊細さは只事ではない。獄中死を予知した作品と読むことも出来る。この夭折した叙情詩人の存在は日本ではまだほとんど知られていない。私も韓国で働かなかったら一生知る機会はなかった。人間の出

会いというのはそういうものである。

蔚山からバスで一時間ばかりのところに古都慶州がある。新羅時代の都であり、町全体が文化財のような場所である。指定地域のホテル以外は高層建築が禁止され、昔ながらの鄙びた雰囲気を残している。日本で言えば奈良のような観光地である。そこに仏国寺という大きな古刹がある。その案内板を読むと、もともと現在の十倍程の規模であったが壬辰倭乱の時に焼失したと書かれている。壬辰倭乱とは日本史の命名で言えば文禄慶長の役のことである。つまり、秀吉の朝鮮侵略を指している。これだけでも身が縮む思いがするのに、この仏国寺を訪れる日本人観光客の振る舞いを間近で見るのは極めて辛い経験だった。今でこそ家族連れの観光客が沢山訪れるようになったが、当時はキーセン観光目当ての男性客ばかりで、声高に喋りまくり、札束をみせびらかすような大きな態度は品位のかけらもない。ガイドの韓国人女性をからかったり、みやげもの屋の中で傍若無人に振る舞っている。心ない連中だなと内心思い、同胞として穴があったら入りたい位だった。

慶州仏国寺の山門

私はそれまで海外に出た経験がなく、日本人と日本の国を外側から見るという視点を持っていなかったが、この時ほど日本人であることを恥ずかしいと感じたことはなかった。

今から25年前のことである。その当時から考えると隔世の感があるが、日本人の意識はその頃からあまり変わっていないように思われる。明治以来の脱亜入欧のスローガンはいまだに日本人のアジア観を呪縛しているし、中国、韓国、東南アジアの人々を一段低く見る態度は続いている。

BTプロジェクトの第二弾として、私は77年から78年にかけて、一年間再び蔚山教会に赴いた。帰国してから書

いた拙文があるので少し長いが、それを引用してみたい。

「帰国して十日ばかりたった或る日のこと、しばらくぶりで運転するハンドルの感触を楽しみながら都内を走り、皇居前を通りがかった時のことである。季節は丁度、春たけなわの花見時分だった。皇居の堀の向こう側に満開に花を咲かせている桜の、薄桃色のベールを被ったようになっているその下、暗い石垣の色と、そこにしなだれかかっている桜の枝々の色の対照にショックを受けた。それは日本以外の何処にも見ることの出来ない光景であった。

皇居前の堀とその周囲の近代的な建築群のコントラストは伝統的なものと新しさが渾然一体となっている東京の代表的な場所であるが、その時の私は皇居の石垣と満開の桜を見て、美しいと思ったのか、醜いと思ったのか判然としないのである。ただ、はっきりと覚えているのは、ああ、これでやっと日本に帰って来たんだなという包まれたような安堵感と、それをどうにも居心地悪く感じているもう一人の自分であった。」

外側から日本を見てしまった私はナショナリズムに安住することが出来なくなり、日本文化の伝統に寄りかかることにも疑いを抱くようになった。

○

1997年にソウル郊外の楊平（ヤンピョン）で「ソウル・東京21世紀宣教大会」が開かれた。その際、説教する光栄に浴した。

説教のタイトルは「安重根と田中正造」である。安重根は言うまでもなく、ハルピン駅で伊藤博文を暗殺した韓国の志士である。韓国では救国の英雄として尊敬され、ソウルの記念館を訪れる人々がひきも切らない。安重根がカトリック信徒であった事実はあまり知られていない。彼は伊藤博文を狙撃する銃弾に十字形を彫り込んでいたと

安重根の立像

言われている。安重根は断指同盟というグループに属していたが、伊藤博文暗殺は単独犯であった。彼の孤独な心情は誰にも理解出来ないであろう。韓国併合の前年であるが、すでに外交権を奪われ、実質的には亡国の民と言ってよかった。

日韓関係の原点ともいうべき人物が安重根である。私は韓国に関心を持つにつれ、次第に安重根にのめり込んでいくようになった。日本人である私が安重根に共感するのを奇異に感ずる人もいるかも知れないが、これは愛国心とは別の話である。そして、田中正造という日本人に対する関心が関連して湧いてきたのである。名前は前から知っていたし、足尾銅山事件も有名である。この二人はお互いにまったく交遊も行き来もない。当然である。韓国人と日本人で、田中は海外に出たことはない。年令もかなり離れている。

しかし、伊藤博文暗殺事件と足尾銅山事件は同時代の出来事である。足尾銅山襲撃が起こったのが1907年、伊藤の暗殺は1909年、韓国併合が1910年である。

しかも私が注目するのはこの二人が35年後の日本の敗戦を期せずして預言していたことである。安重根が晩年著した「東洋平和論」の序文に次のような言葉がある。「同種の隣邦を迫害する者は必ず独夫の患をまぬがれることは出来ない」と。田中正造も地域住民を切り捨てる権力は必ず自滅の道を辿る他ないという意味のことを言っている。安重根はカトリック信徒であったが、田中正造も未洗礼ながら、キリスト教に傾倒し、いつも信玄袋にマタイ福音書を入れていたという。

私が言いたいことは二人共、ナショナリズムを越える視点を持っていたということである。安重根を狂信的な愛国者と見る人も多いがそれは間違いだと思う。彼はもっと広い視野と国際的な感覚を持っていた。田中正造は農民出身の国会議員だったが、富国強兵という国策に反対して最後は議員の職を賭して天皇に直訴した。このようなナショナリズムを越える視点をもたらしたものこそがキリスト教信仰であったと思われるのである。

○

日韓交流プロジェクトではミレニアムの年を記念して21世紀の日韓の関係を展望するためにこれまでの日韓交流の歴史を振り返ろうとした。戦後の日韓

の教会交流は1965年の日韓条約を境に活発となった。それまでは交流したくても往来が自由に出来なかったのである。初期の頃から最も深く関わってこられた竹内謙太郎司祭には談話の形で長時間お話を伺うことが出来た。また、ソウル教区の初代韓国人主教李天煥師にはソウルでインタヴューを取ることが出来た。お二人には心から感謝申し上げたいと思う。また、BTプロジェクトに関わった司祭たちにも原稿をお願いした。BTプロジェクトが契機となって日本聖公会全体に韓国に対する関心が高まり、各教区が韓国聖公会と姉妹関係を結び、多くの交流が行われるようになった。管区レベルの日韓セミナー、その流れから生まれた日韓青年キャンプは現在も開催地を交換しながら継続されている。この間の事情については前の日韓交流プロジェクトのリーダー前田良彦司祭に書いて戴いた。

先に触れたように東京教区では3年前に「ソウル・東京21世紀宣教大会」を開催した。この宣教大会は21世紀の日韓交流の在り方に多くの示唆を与えるものであったが、それについては大畑喜道司祭にお願いした。また、60年代からの日韓交流の中でユニークなものとして立教中学のバスケット部の韓国訪問交流試合がある。これについては当時の立教中学教諭であられた保田孝先生がお書きになられた文章を御本人の御了解を得て再録させていただいた。また、練馬聖ガブリエル教会が姉妹関係を結んでいるソウル教区間石教会との交流については当時の牧師（現九州教区主教）五十嵐正司師と現牧師の佐々木庸司祭に書いて頂いた。

このようにこれまでの交流を振り返ってみるとなかなか多彩で豊かな往来が行われて来たという印象を受ける。

「宣教大会」では、通訳として活躍された呉光現氏（生野センター主事）が言われた言葉が印象的であった。「こういうセミナーに通訳として駆り出されるのはいつも植民地時代に日本語教育を受けた韓国人か、私のような在日韓国人に限られているが、このような言語的不公平をそろそろ解消したい」と。その意味で韓国に3年間留学し、韓国語をマスターした香山洋人司祭の存在は貴重である。同司祭には留学体験と日韓交流というテーマで一文を寄せて頂いた。

なお、竹田眞主教の着座式の際の李天煥主教の説教をも再録させていた

だいた。この説教は「東アジアの神学を」というタイトルであるが、12年経過した今も新鮮で色褪せない内容を持っている―と言うよりも21世紀になってますます必要とされる視点を提供しているように思われる。

聖公会の日韓交流史を振り返る時に、今村秀子姉（元聖アンデレ教会信徒）のお名前を逸することはできない。現在、93歳で熱海のケア・マンションに御壮健であられるが、横浜教区の婦人会研修で講演されたものを再録させていただいた。今村姉は日韓交流の初期にさまざま御苦労をされた方である。御長寿をお祈りしたい。

歴史を振り返るのは大変しんどい作業である。事実関係の確認もさることながら、どのような歴史観に立ち、どのような視点で歴史を見るかということが問われるからである。過去の歴史を現在の価値観や判断で裁断することは愚かなことであるという意見もある。しかし、歴史は現代に生きる者がこれからの生き方を学ぶためにこそあるのである。博物館や考古学の彼方に押し込めるためにあるのではなく、生きた素材とするのが歴史である。そのために歴史を改竄したり、捏造することは許されない。

ここで、日韓の教会交流史をもう一度、概観してみると東京教区ではBTプロジェクト、また管区レベルでは日韓セミナーが果たした役割が非常に大きかったということが出来る。日韓の問題に関心を深める意味で日本聖公会全体に与えた影響は測り知れないと思う。95年に清里で行われた「日本聖公会宣教協議会」における罪責告白は参加者の主体的な意思の結集によってなされたのであるが、戦後50年経過してやっと教会人が自らの歴史を振り返り、その罪責を公けにしたのである。

これからの日韓の関係はこの罪責告白を踏まえ、アジアに対する責任という視点のもとに日本聖公会と韓国聖公会が宣教のパートナーとして交流していくことが求められていると思う。中国、北朝鮮、東南アジア等の教会に対して、日韓の教会が協力して宣教の務めを果たしていくのである。

2000年は朝鮮半島の緊張緩和をもたらす南北首脳会談が行われた年として長く記憶されるであろう。シドニー・オリンピックでは統一旗を掲げた南北の選手団が一緒に入場行進をして盛んな拍手を浴びていた。日本から拉致され、殺されかけた金大中大統領が長い間

暖めていたヴイジョンが実現し、世界中の人々に認知された瞬間であった。しかし、歴史はこうして一部の指導者の手によって動いているかのように見えるが、じつはそうではないと思う。シドニー・オリンピックの例を再び取れば、聖火ランナーの最終走者はアボリジニーの女性だった。彼女は競技においても大活躍し、金メダルを獲得した時、オーストラリアの国旗とアボリジニーの旗を両方掲げてヴィクトリー・ランをした。少数民族の存在を無視できないことはこれまでのアボリジニーの人々の粘り強いアピールと闘いがあって始めてオーストラリア政府を動かすまでに至ったのであろうと思われる。たとえ、そこにどんな政治的な思惑が働いていようともである。

これらの例はナショナリズム高揚の場であるオリンピックにおいて行われたというところに意味がある。ということは国家というのは半分開きかけているというか、国威発揚という発想が時代遅れのものであることを意味している。

それだからこそ一層私たちは過去の歴史の清算が求められているのだと思う。いや、清算などはこれからも出来はしまい。日本が犯した過ちはこれからも私たちが背負っていかなければならない。償いと贖罪の意識をもって私たちはアジアに対して向き合っていかなければならないと思う。そして、ナショナルなものを越えたところで多くの国々の人々と結びついていくのである。あくまでも日本人の一人として。

元MRI委員長
竹内謙太郎司祭に聞く

日韓交流回顧――

聞き手　日韓交流プロジェクト委員

司会―私たちが計画している日韓交流史の出版に際して、日本と韓国の教会の交流の歴史について、かなり早い時期から関わってこられた竹内先生にお話を伺うことになりました。私たちは21世紀に向かい私たちの進むべき新しい交流の道を手探りしておりますが、その為にも有益な示唆を頂けるものと思います。ここに時系列に沿ってお話しいただけるように一応年表を用意しましたのでよろしくお願いいたします。

こんな詳細な記録を作っていただいて大変有り難いと思います。こういうものがありますと今までどういうことがあったか、たぶん私はこれを拝見させていただきながら、行間にあるものを少し埋めていくというか、「実はこうだった」といういわば半分裏話のようなものも出てくるかもしれません。不愉快な話も中には無いわけではありませんけれども、一応今後の日韓交流ということを考えたときに多分そういう注意すべき事が多々あるという事を考えながらお話をさせていただきたいと思います。

年表記録以前

実は日韓の関係というものはこういう記録に載らないものの中に非常に重要なものがあります。例えば戦争が終わって、2年から3年かけて追放された宣教師達が帰ってくる、帰ってくるときに八代斌助（ひんすけ）主教と様々な話し合いをします。そして、もちろん国交は樹立されていないというよう

なことの中で、八代主教は何度か、これはまったく秘密ですから、私も何度という正確なことは言えないんですけれど、何度か……邦人引き揚げぐらいの時に、もうすでに彼は韓国に行っていたはずです。それらは韓国側の資料でたぶん触れられていることだと思いますね。

当時の主教さんはデイリーという方ですね、その後1950年の6.25（ユギオ）、つまり韓国動乱が始まったときに、このデイリー主教は捕虜として北に連行されて大変苦労されたのですけど、この方は大変八代斌助（ひんすけ）主教を頼りにされていたということを後で伺ったことがあります。動乱が一応終結する、休戦状態になったのが1953年頃、そしてその後李承晩（イ スンマン）が退陣し、一時民間の尹晋善（ユン ホ ソン）が大統領になります。そして朴正熙（パクチョン ヒ）のクーデター、軍事革命が起こるわけですね。クーデターが起こって、彼が政権を取った後、彼の見方は韓国が、当時統計的には北朝鮮には圧倒的に後れをとっているというわけですね。経済的にも100対50ぐらいの割合で負けている、これを改善しないと再び北からの侵略というものが起こる、その為にはどうしてもアメリカと日本の後ろ盾が必要だということでした。それが動機になって、日韓国交交渉というのが始まるわけですね。その間、久保田発言というのが混じってごちゃごちゃしますけれども、とにかく朴正熙（パクチョン ヒ）は強引にそれを進めて行くわけですね。そして金鍾泌（キム ジョンピル）—大平の間で財産請求権問題が決着し、1965年に日韓条約が締結されるわけです。この条約に関しては日本と韓国の両方の知識人、学生そしてまたキリスト教関係者は徹底的に反対運動をしました。

ちょうど私は慶応の学生伝道をやり始めた時でしたけれど、ずいぶんそれで学生達から突き上げられもしたわけですね。私はその頃、韓国というところに正直な

久保田発言

1953年10月の日韓第三次会談で日本側主席代表・久保田貫一郎は、日本の朝鮮統治は「悪い面ばかりではなかった」と述べた。例えば、日本は朝鮮のはげ山に植林し、土地を開拓し、朝鮮米の生産を大幅に伸ばす灌漑施設を建設し、鉄道、道路、学校、政府庁舎などを建立し数百万円を朝鮮投資に費やしたというもの。この発言が韓国側を激怒させた。

「戦後日韓関係史」李庭植　中央公論社より

ところあんまり関心が持てなかった、その持てなかったいちばんの大きな理由というのは「いずれ何とかなるだろう」みたいないい加減な考え方があって、後で非常に反省したんですけれど、「近いところだからそういうような戦争があったとしても、あそこはアメリカの領土だわい。日本の出る幕はない。」というような感じ、それが私にとっては積極的に動く、そういう理由をあんまり感じさせなかった。個人史みたいになってきますけど、私はむしろ今後の世界全体の情勢を考えたときに、まあ当時は冷戦時代ですから特にそうなんですけれど、アメリカブロック、ソ連ブロック、そしてその中間にあるアジア・アフリカブロックというのが世界の三大勢力になっていくだろうと思いました。その時に、アジアにおける日本の国際的な位置ということを考えた時に、アフリカ、東アフリカとの関係というのを重要視しなきゃいけないんじゃないかというので、ずっとアフリカ研究をこの間個人的にはやっていたわけですね。

1971年にアフリカに行ったわけですけれど、それと並行的に、日韓の関係がにわかに動き出しました。教会がこの日韓条約に対して非常に反対をしたということがありましたが、実は非常に皮肉な事なんですけど、この日韓条約が締結されたことによって、両国の間の往来というものが大幅に改善されるように

八代斌助（ひんすけ）主教

なりました。この日韓条約締結以前は、例えば先ほどの八代斌助（ひんすけ）主教は特殊な例ですけど、貿易関係者つまり経済的な関わりを持つ人たちだけが入国を許されるという特殊な状況、つまり国交がないわけですから、今の日本と北朝鮮の関係のように、特別な許可証のようなもので行く、三井物産、三菱商事なんかはもう駐在員をおいてましたけど、まあその程度である。しかしこの日韓条約が締結されますと、一般の旅行者も韓国訪問が可能になる、ここから日本のキリスト教関係者の韓国訪問というのが非常に活発になっていくわけですね、自分たちが反対していた条約によってむしろが逆に自由になってくるという大変皮肉な結果ですね。

李天煥（イ チョンファン）主教

そしてここにも現れてきますけど、

1967年でしたか、私は年号がちょっと曖昧でこれ8年だったんじゃないかと思ってましたけど、この記録のほうが正しいんでしょうね、1967年に大韓聖公会はデイリー主教から韓国人初の李天煥主教に主教座が渡されます。初めて韓国人主教が生まれたわけですね。第一代の韓国人大韓聖公会の主教です。当時はまだ教区というのがありませんでしたが、この方はある意味では朴正熙と同じような路線を取ります。

つまり日本との交流が無くて大韓聖公会は成り立たん、ということを非常に強く感じられた方ですね。この頃未だ大韓聖公会は英国から独立していません。カンタベリー管区に属しています。いわゆる親日家ではありません。むしろ反日です。しかし、聖公会の自立、独立を強く希求されておりました。

この方は若いときに田舎から出てきて忠清北道の、今の天安の出身だと確か思いますが、田舎の少年ですけど、非常に頭が切れるのでソウルに出て学校に行きたい、その時にいちばんいい方法は日本人の家でいわば書生さんをすることでした。当時優秀な、しかし貧しい人というのは書生をしたようですね。そういう流れの中で、李天煥さんもソウルに出てきて、そして聖公会の信徒でしたから、当時ソウルにおられた松坂神父という日本人神父が、ソウルの主教座聖堂の日本人会衆の神父さんであったので、そこへ住み込みで働かれました。そして英語なんかも神父から徹底的にたたき込まれるというような、非常によい教育を受けたということであります。そしてこの方

1960年代の李天煥主教（右）と竹内司祭

がのちに神学校に行き、神父になり、そしてまたデイリー主教が北朝鮮から解放されて帰ってこられた1955年以降、正確な年代は私は覚えておりませんけれど、英国留学をされるわけです。その時に李(イ)主教はどこの学校に行ったかというと、二つの学校に行っておられます。

一つはセントオーガスティンズカレッジ。セントオーガスティンズカレッジというのは、知る人ぞ知る英国の植民地における教会の主教を教育する学校です。将来主教になるであろうと思われる人材を植民地、つまり現地人から選抜してそこに留学させて次の世代の主教にしていくという、これが英国教会の、SPGのやり方でしたね。ですからこのセントオーガスティンズカレッジというのは、戦後の発足なんですけれども、そういう形で、韓国から李(イ)天煥(チョンファン)主教、それから少し年代が下がりますけれども、日本からは竹田主教、今井烝治司祭などがこの学校に行ってるんです。ここに行ってるのは英国側から見て主教候補という人たちですね、私がアフリカで出会った主教達は全部このセントオーガスティンズカレッジの卒業生でありました。そういうことで彼はイギリスに行く。そして二つと言いましたけれども、もう一つはロイヤルスクールオブ

後藤真主教

チャーチミュージックという王立教会音楽学校という非常に程度の高い音楽学校ですけれども、ここを修了されています。このときのご学友が澤邦介司祭、澤先生は一年まるまるしっかりと。あの人は元々オルガンがひけるからなかなか快適な生活だったみたいですね。音楽の好きな人は良く知ってると思いますがネビル・マリナーっていう指揮者、これ親友ですよ。ネビル・マリナーもこの学校に一緒にいたんですから。彼はだから教会に行って、セントマーティンズインザフィールドっていうトラファルガスクエアにある合奏団なんかに入っちゃって、それが今あんなになっちゃったっていう…。

ですから澤邦介さんと李天煥(イ チョンファン)さんはね、留学生同士ということでずいぶん親密な交際があったはずです。

いろいろなエピソードがありますけど、それはちょっと割愛します。とにかく李(イ)

天 煥（チョンファン）主教は松坂神父そして日本語、英語というようなものを通して日本の力っていうものを知ることによって韓国人主教として働くためにどうしても日本の力がいるということを考えられたようです。

彼の主教としてのひとつのモデルが後藤主教だったようです。後藤主教との間の往復書簡というのが1キロぐらいありました。後藤主教は全部自分で処分されたんですけど、1キロぐらいあってそれを全部私、目を通した後、「取っておきましょう」というのを後藤主教が「だめだ」と言って廃棄されました。これは非常にこまごまとしたもので、主教としての働きについて後藤主教に質問し答えるという形の往復書簡が存在したのです。

1967年

そういったようなことを通して、1967年ですか、日本聖公会教務院に対しての招待がきて、（当時後藤主教は東京教区だけではなくて、教務院渉外局の局長という立場でありました）渉外局のなかに山田襄さんもいらっしゃって同行される。それから、若手の聖職として竹田眞司祭も青年代表という形で訪韓団の中に参加しております。

これが初めて日本聖公会の重要なところに位置しておられた人達が韓国の―あるいは日韓関係の複雑さと言うものにふれた最初の体験だったと思います。その状況に対して非常に圧倒されたと思います。特に竹田司祭はここの段階で、今後日本聖公会というのは韓国の聖公会、韓国そのものというのに対して深い関心を持たなければならない。そして、当時の竹田司祭の代弁をさせていただければ、「これによって、これを克服しないと日本聖公会というのは本当のキリスト教会にはなれないのではないか」、というところまで一つの理念的なものを持っておられたのではないかと、そんな風に思っています。

この12名の方々が特にソウルの近郊を視察をし、そして適当なホテルもないということで信徒の方の家庭に民泊をし、そして泊まると毎晩、毎晩、証人がいるからちょっと具合悪いけど、その植民地時代の恨みつらみをいやと言うほど聞かされて帰ってきたという、そういう話があります。

いちばんまじめに受け止めたのが、当時の竹田司祭だったんじゃないかなと思います。それが後になって一つ具体的な動きに転換していくわけですね。

その時、確か共同声明といいましょうか、ある種の宣言のようなものが出されたはずです。これは今、管区事務所の記録のほうにあると思いますけど、今後関係を深めていくということをうたったものであり、同時にこの時点で団長である後藤主教が最終的に植民地時代の様々な問題に対して日本聖公会の代表団は、日本聖公会は、じゃないんですけども、代表団は深く反省し謝罪するという事を言っておられます。

謝罪について

よく謝罪、謝罪というのが出てきますけど、この67年ですか、この段階で日本聖公会の代表団はそういう意思を表明しているわけですね。次の年、68年に、もちろんここにはありませんけれど、日本基督教団がやはり代表団を送っていって、ほぼ同じような文言で戦責告白というか謝罪といったようなことをしています。

▽ 教派としての謝罪っていうのは1967年に日本聖公会が全体として正式に謝罪をしたということになるのでしょうか。

いやいや。僕は教派っていうような、教会としてっていうものではないと思います。代表団ですね――つまり。代表団が行って、いろんなこと言われて、これはホントに心動かされたと思うんですよね。ですから、滞在中の最後の礼拝で後藤主教がそういうふうにお説教しています。だけど、それは日本で発表されないんですよね。あの時後藤主教が日本に帰ってきて、「我々こういうことを向こうに行って言ったんだ」っていう事を例えば聖公会新聞に出したら、どうなってたんだろうなって思いますよ。

▽ その翌年に教団がしたのは、もう教団として正式な謝罪だったんですよね。

いやあ、教団も聖公会と同じでしょう。まだそこまでいってない。だけど、そこで代表団がやったことっていうのを受け止めたグループに鈴木正久さんがいたんでしょう。だから彼はアジアっていうものに対する戦争責任告白というのは、もう教団としてとにかくするべきであると。

▽ そうすると日本聖公会としての正式な謝罪っていうか、戦責告白というのは清里での宣教協議会と、その後の総会ということですね。

そうです。後で出てきますが、宣教90年の、僕が井原君と同行していったとき

に井原君に言ってもらったんですよね。その時は確か、韓国語で必死になって書いて僕が韓国語で読み上げたら、「日本人韓国語だ」って笑われたけど、だけどとにかくそれは通じたんだ。大拍手だったけどね。井原君…彼が日本語で読み上げて、やりましたけど。その時にも大変な拍手。だけどそれも出先でなんかやったというだけで、こっちにほとんど影響ないっていうか…

1968年

1968年の項に山田襄教務院長、和気、今村その他の方々がソウルを訪問したとありますけれど、これと67年のとはどういう関係にあるのかなと今ちょっとこれを見ながら感じておりました。山田教務院長はこの時点では一度しか行ってないはずですから、後藤主教と一緒に行かなかったのか、行ったけれどどうなったのかなと、この辺私の頭の中ではちょっと混乱をしています。とにかくそういうことで、ここからやっと何かが始まったということが言えます。そして、この代表団は教務院派遣、日本聖公会派遣ということで、受け入れ側は大韓聖公会というそういう形であります。

こういう最初の出会いの仕方が実は後になってある種の混乱を生み出すきっかけになりました。それは大韓聖公会の方の組織的な変化というものを日本聖公会側が充分に理解しなかったということでもあります。しかしとにかくこのような形でぽつりぽつりと始まりました。

しかし、この教務院の渉外局長である後藤主教が、それほど李主教との間に往復書簡などが山のようにあるのですけれども、それとは別な意味で、具体的な計画というものをするということにはなかなか踏み切れなかったですね。そのいちばん大きな理由は、今になって思うのですけれど、日本聖公会なりの日韓関係というものに対する深刻な無関心だったと思います。その無関心をぶち破ろうとした時に、それが非常に大きな抵抗になって出てくるわけですけれど。とにかく無関心だった。

韓国の人が日本に来るということはごく当たり前のことのように考え、韓国が外国だと思っている人はこの頃ほとんどいないと言ってもいいほどでした。ですから、そういう意味でなかなか具体的な計画が進まなかったということは致し方ないことだったんだろうなと思います。

1971年

1971年の項目に本年1月竹内謙太郎がMRI委員長に就任、とこうあります。そして1968年に後藤主教などが行かれたそれの答礼のための招待というものの計画が起こって、その責任者であったことは確かです。私はさっき申し上げたように東アフリカというものに非常に強い関心がありましたから、1971年の夏からアメリカに行きました。そして1971年11月、12月にはアフリカにいたわけですけれど、そんなようなことで事実上、MRI委員会や韓国ということについてあんまり積極的ではありませんでした。ただ、1971年に、ここにあります9月30日からソウル教区、これは大韓聖公会といった方がいいんですけど、大韓聖公会からの親善使節団の受け入れの準備はしました。

私はこのとき八芳園へ直接行って注文してから、帰ってきてすぐまた出かけたんですね。ちょこちょこ行ったり来たりしてましたから。この契約をしたのは確か私だったと思います。お客さんをおもてなしするんだから結構なプログラムを組んだつもりでいたんですけど、でも現実にここに私はおりません。このとき日本にはいません。

そして私の留守中、崔哲熙（チェチョル ヒ）さんが日本に来るというようなことになったのです。この間これからちょっと私自身の問題ですけれど、いろいろなことをやり始めたとたんに私をMRI委員長から辞めさせる動きが起こりました。常置委員会が強く主張されて、後藤主教は決めちゃって「一年ぐらい休めよ」ということでした。

MDF資金

1970年からこの話は始まるんですけど、東京―ワシントンの姉妹関係を、（ワシントン教区とは1964年から東京―ワシントンのコンパニオンシップ、姉妹関係というのが始まった）6年経って1970年に一応終結しようという話になったんです。70年からこの頃までにかけてワシントン教区からの提案としてワシントン教区はミショナリーデベロップメントファンド（MDF）というのを、正確に金額覚えてませんけれど、確か300万ドルを集めていろいろなところに配ろうとという話が出て、300万ドルをオーバーするものが集まったわけです。

その時に姉妹関係の日本は、何か欲しいものはあるかというようなことで、そし

て後藤主教がいくつかの提案をしておられるわけです。そのうち滝乃川学園の成人棟、深川の青少年センター、この二つがまず最初だったと思います。そして主教座聖堂、それから韓国・沖縄に対する東京―ワシントンの協働宣教活動。私の記憶する限りではだいたいこういった項目が並べられて、そして滝乃川学園と深川の青少年センターには、確か向こうからクレイトン主教がおいでになって、実際に視察をされてすぐそれが決まりました。

残りは主教座聖堂、それから韓国・沖縄関係なんですけど、これはちょうど71年に私がアメリカに行っているときに後藤主教から連絡があって、出すか出さないか向こうが決める段階になってるから、おまえ行って貰ってこいという指令が来ました。それから三日ぐらい徹夜していろんな文書を書いて、そして向こうでも助けてくれる人がいまして、文書を作って出して面接をされてですね、向こうのビジネスマンの質問ですからえらい辛辣なんですけど、その試験にパスしまして10万ドルを主教座聖堂のために貰い、1万ドルを韓国・沖縄のために貰うと、いうようなことだったんですね。

だけど今になって主教座聖堂資金がどうのと言っておりますけど、私はあの時の試験を思い出すと、「ごちゃごちゃ言われるくらいなら貰わなきゃ良かった」と思うぐらいなんです。主教さんから「よくやった」なんて電話が一本ありました。

そういうことでこの1972年にいよいよそのお金を貰うことになりました。何月何日にそのお金が日本に来たかということはこれは教区の記録にあると思いますから、そちらをご覧になっていただきたいと思います。

これから三教区合同宣教活動とありますけど、三教区というのは、ソウル―東京―ワシントンの三教区ということ、それから、沖縄―東京―ワシントンの二つに分かれるわけですけども、そういうようなことがあって、沖縄教区に関しても相当な、いわゆる資金援助というのをやったんですよ。私もその為に沖縄へ飛んだりなんか何度かしましたけど、そしてそのうちに韓国にこの残りのお金を集中したいからというようなことで、沖縄も賛成してくれて残りの全額というものを韓国に振り分けるというようなことになりました。それはまあ、ちょっと後の話ですけれども。

ここにあるお金の出方。1972年の項目にある、あそこに20万、ここに20万みたいなことがありましたけれど、これは

まだMDFのお金かな、という感じがいたします。

実際にお金をどんなところに使ったらいいかということで、ここにあるワシントン教区、クレイトン主教の代理のロミング司祭と二人で行きまして、このときは沖縄にも行きましたし、ソウルにも行きました。そしていろいろ協議を行いました。協議の相手方はこちら側は竹内、ロミングと、向こう側は李天煥（イ チョンファン）主教ご自身、あと若手の司祭達が何人か必ず会議には出席していました。その中の一人が李在禎（イ ジェジョン）神父（当時執事）であります。それから今の丁哲範（チョンチョルボム）主教、この二人はいつでも李天煥（イ チョンファン）主教と一緒に行動していたという感じを憶えています。このときに、この前にどっかの時点で、東京教区がソウル教区の東大門（トン デ ムン）教会に建築のために献金してるはずなんですよ。ちょっと記録にありませんね。

▽ それは1967年と李（イ）主教様はおっしゃってました。

その時のお金？

▽ 教区礼拝当日の献金4万円をソウルに建築のために寄付して下さったとおっしゃってました。この前ソウルでお会いしたときに。

じゃあ、まあそれなんでしょうね。このときに、私はロミングさんと二人でこれが東京教区が寄付してくれた壁だというのを見ました。壁だっていうのは、祭壇の壁ですから非常に重要な部分ですね、一番奥のところ、東の端の壁。「この壁ですか？」なんていったんですけど、もちろん壁一枚だけじゃないわけで、その祭壇の部分のという意味です。それが4万円で出来たのかな。とにかくそういう話でありました。そんなこんなで色々な話ができました。そして主として経済的には例えば「聖職者の教育のための資金援助はいたしましょう」というようなこともいろいろあったわけですけれどもね。あとずっとご覧になると確かにその通りです。オーガニストが留学のため日本に来るって言ったけど来なかったとかね、そんなようなことがありました。まあまあしかしこういったようないろいろなことがあって、いろいろな人の出入りというものがこういう形でありましたね。鄭（チョン）司祭の留学のために招請状を書いたとかの記憶もあります。

▽ 崔（チェ）主教さんの留学費用もMDFの資金から。

いやいや、MDFじゃなかったと思いますよ。僕の記憶では。ちょっとよくわかりません。その辺は。どっかにその記録が

ないのかな、私としてはMDFから出した記憶はない。

▽ MDF資金を沖縄・韓国関係のため2万ドルが支出されたと書いてあります。

ああ、2万ドルか。あ、そうだそうだ、1万ドルずつだ。ごめんなさい。1万ドルしか覚えてなかった。

▽ これ360円ぐらいの時代ですか。

360円の時代です。実質手に入れたのはたしか358円だったかな。私の記憶では。

▽ 300万ドルというのは膨大なものです。

そうです。膨大なものです。ですからそれはアフリカだ、南米だとみんなに1万ドルずつ配るみたいな感じですね。だから主教座聖堂の10万ドルっていうのが3,580万ですからね、大きなお金です。それを、せっせと私は、私はもう関係ないわけだけど、貯め込めため込めといって、それがほっといたら5,000万。何もしなかったから。アメリカは実はあきれたんです。あなた方使わないで貯めてんの?なんて後でいわれちゃいましたよね。

▽ 金利が良かったですしね。

金利が良かったしね。ですから、10年かそこらで5,000万円になったんじゃないですか。で、5,000万円別にしよう、使わないなんて、利子だけ使おうなんて大きな事いってた時代がありましたけど。だから、私が主教座聖堂へ来たときにいろいろお金を主教座聖堂でっていうのはみんな抵抗したけど、何抵抗してんだ元に戻すだけじゃないかと私は腹の中で思ってたんですけど。そんなようなことがありましたですね。

1973年

立教大BSA第16支部が楊平(ヤンピョン)でワークキャンプ、この楊平(ヤンピョン)というのがハンセン病の診療所のある南揚州(ナムヤンジュ)の聖生園(ソンセンウォン)の近くですね。ご存じのように。

塚田さんをなんとか引っぱり出そうと思ったけどちょっと失敗したというようなこともありました。

大田(テジョン)教区

大田(テジョン)教区がこの頃出来ます。これはいわゆる大韓聖公会が初めて二つの教区を作ったということですね。ですから忠清道(チュンチョンドゥ)、それから全羅道(チョンナドゥ)、慶尚道(キョンサンドゥ)

全体を大田(テジョン)教区。江原道(カンウォンドゥ)、京畿道(キョンキドゥ)それからもちろんこの辺全体をソウル教区、大韓聖公会を二分してそして北の方をソウル教区にし、南の方を大田(テジョン)教区にするというような設定をしたわけです。

そして大田(テジョン)教区の主教にはイギリス人のラットという人がなった。ラットというと妙な名前なんですけれどもスペルが違うんですね、RUTTと書きます。リチャード・ラットという方が、この方は韓国人より韓国語が上手だという人、韓国人に韓国語を教えるという、しかも大学の授業でもできる人です。この方はあとでイギリスへ戻られて、レスターのビショップになって、今引退されているとは思いますけど、非常に優秀な方でした。こうやってみると私もいろいろな記憶が時間的に相前後しているなということで、お話をしながらちょっとお恥ずかしいところがありますけれど。

私の記憶では、73年、安(アン)司祭一年間実習というのは私がMRI委員長として聞いたような気がするんですね。この人は何故延期になったかというと李天煥(イチョンファン)さんは日本に送りたかったけれど、本人はアメリカに行きたかったという事情があって、それでアメリカに行っちゃったわけです。今でもアメリカに、ロサンゼルスにいますけど。

そして、MRI委員会の報告、これ私の名前で出してませんか。

▽ 73年は違う…

そうですか。何故かというと大田(テジョン)教区とも考える場が欲しいというのがちょっとミソなんですけど、これはそういう意味で後々、現在に至っても具体化されていないことなんですけど、日本聖公会、東京教区としてはまじめに考えなきゃならないことです。私はちょっと教区会でも質問したりしたんですが、「何でソウル教区とだけやんの?」というような言い方というのはこういう伏線が実はあるわけですね。

1974年

74年の李天煥(イチョンファン)主教が安(アン)神父に代えて鄭(チョン)アントニオという人。今大阪に来てますけど、鄭(チョン)アントニオを一年間引き受ける。これ私やりました。このとき私がまた元に戻って委員長やってる時と思います。

まあ修女会のこと、MDFから派遣費、ここら辺にくるとぼちぼちMDFのお金を使いだしているということですね。ここに

ねえ、懸案のソウル教区に邦人司祭を長期に派遣する件は政情不安もあり、李天煥（イ チョンファン）主教に照会するというのは、ちょっと私正確に記憶していません。実は私はこんな事は無理だと思ってたんですね、最初から、無理というよりもやらない方がいいというのが私の理解でした。まだ日本人が行って、向こうで何やるかっていうことが明確でないという時代がありましたから。しかもその李天煥（イ チョンファン）さんからいわゆるジョブデスクリプションですね、何をどうするかというような明確なことはあまりなかったような気がします。ですから、断ったわけじゃないし、政情不安というのは一つの理由付けみたいなもんかもしれませんけど。私は基本的には、MRI委員会やりながら東アフリカに未練を残しながら韓国っていうのをやっているときに、やっぱりひとつ到達したのは、あんまり神学的じゃないんですけど、よく植民地時代に、韓半島というものを日本が思うがままに利用したと、好き勝手なことをやった。例えば、また元へ戻るかもしれませんけども、とにかく外務省の久保田発言なんていうのは、鉄道も引いてやったし学校も建ててやったしいろんなこというわけですよね。いいことしたじゃないかと、いいことしたじゃないかーというのをよくほじくってみると日本の統治のためにいいことしたけど、韓国人のためにいいことをしたとは私は到底思えない。だから、今こそやはり日本は多少その自分自身の財布が空になっても韓国の要請にはなんとか応える方向でものを考えるべきだというのが頭にある、常にあったというわけですよね。

ですから何か仕事を、日韓のことで韓国からの要請にはとにかくポジティブに答えようとするというのが私のMRI委員会における方針でありました。それだけは未だに変わってないんですけどね。ですから、この「ソウル教区との関係についての意見書」っていうのは、どんなこと書いたか覚えてません。これどっから出たのですか。

▽ 宣教委員会、河野司祭が委員長のときです。

ああ、河野君か。まあ、彼も関心が深かったから一所懸命いろんな事考えたんだろうと思いますね。

釜山（プサン）教区

1974年の6月に釜山（プサン）教区が大田（テジョン）教区から独立して成立した。釜山（プサン）教区

ていうのができます。慶尚（キョンサン）南北道にできますね。これは韓国内のいろいろな事情もあってあえてしたことなんでして、これが良かったかどうかというのはもう少し経ってから研究する必要があると思います。これ、大韓聖公会のある意味で、今後ずっと継続されるべき課題ではないかという風に思っています。ただ当時この頃になりますと、1972年、3年というのは全聖公会が大きく変わるときでありまして、1972年後半から日本に対する宣教団体が続々来日して協議会を開いて、そして今後日本聖公会に対する様々な援助というのは停止する——とそういう通告をしてきたんですね。そして75年までに完全に停止するわけですけど、72年73年というのはずいぶんたくさんの宣教師がいやいやながら帰国させられたという、そういう宣教師受難時代でした。

1974年にアメリカを旅していたときに、かつての宣教師達が「何でおまえは助けてくれなかった」というような恨みつらみを聞かされたという経験をいたします。

同様に私は74年前半はイギリスにいました。

CMSの総会というのに出て、アジアからの声を聞かせてくれといわれてしましたが、ここでも強制的に返された宣教師達からずいぶん私は攻撃をされて、「そんなこといわれても困っちゃうよ」という話をしたんです。

私の考え方というのは「宣教師は必要だ、それから、我々はお金が欲しいとか助けてくれとかそういう意味じゃなくて、全く別の次元で、あるいは視点で、共同の宣教というのを新たに考えるべきときにきてる」、そういう意味で宣教師がいてもいいのではないか、まあそんなようなことをCMSの本部でしゃべったことを思い出します。「そう言ってくれると有り難い」とかいわれましたが、総体的にはもう引き揚げだっていうんで帰っていっちゃいましたから。この頃からいわゆる宣教師というのはいなくなったんですね。

わずかに学校の英語の先生として残るという程度のものか、しかもオーストラリアのCMSしか送らなくなったんですね。オーストラリアから大阪のプール学院に二人ぐらい女性の宣教師が来てますけど、イギリスからはもう来ないというようなことになっています。

つまり、大きく変わるときです。そしてその時に、ACCというのが出来た。72年だったと思います。ダブリンで第1回のACCの会議をやりました。もちろん私はそこへ代表としていったわけではありま

せんけれど、日本側でこれの結果について何とかかんとかいうグループにはいました。ずいぶん面倒くさい事やるんだなというようなことを思いました。

ここでPIMってまた新しい言葉が出てきます。Partners. In Mission, MRIじゃもうだめだ、PIMだ、「だってMRIだってろくにやってないじゃないか」っていうのが私のリアクションでありました。

その中で、非常に興味深いことが出てきたんですね。つまりひとつのナショナルチャーチ、例えば日本とか韓国とかがあって、ひとつのナショナルチャーチの最低単位は三つの教区だという言い方。そして教区が三つになれば管区になれるという。そういう言い方が出てきたんですね。

韓国は、つい最近までですけど、カンタベリー大主教区の直轄地、つまりいわば植民地扱いですね。イギリスは韓国が自分たちの植民地だと思いこんでいる。日本を通してだという、わけのわかんないことになっていたんですけどね。メンタリティとしては英国聖公会の植民地教会というステータスでした。ですからカンタベリー管区の中に、ひとつの海外の教区という感じで存在していたわけですけれど、ここで三つの教区で管区になる

崔哲熙（チェチョルヒ）主教

というようなことになったときに、潜在的にカンタベリーから独立したいと思っていた李天煥（イチョンファン）さんはもう一つ教区を作ってそしてとにかく大韓聖公会をひとつのナショナルチャーチ、プロビンスとして認めさせたいと、こういう考え方があったと言っていいと思います。

そこでいろんな選挙運動なんかがありまして、結局、崔哲熙（チェチョルヒ）神父という日本で留学していて、この当時アメリカに留学に行っていた方が帰ってきて、主教の選挙ということになりました。このときの主教の選挙はいわゆる大韓聖公会の総会、つまりソウルと大田の二つの教区からの代表によって決められたと思います。

宣教師派遣要請

崔（チェ）さんが主教になる。そしてなってす

ぐ日本に表敬訪問をしたいと、今までお世話になった立教の人、日本聖公会、東京教区の人に感謝したいというので、確か2月に来られた。寒いときでしたから覚えています。1974年1月、この時に私は聖三一教会にいまして、そこで2月に会ったときに崔(チェ)さんから宣教師を送ってくれないかという話があったんです。このときの宣教師を送ってくれないかということの中身はどういうことかというと、釜山(プサン)教区のある教会、ある教会というのは温泉洞(オンチョンドン)というところの教会ですけど、今は主教さんももっぱら使っている比較的大きな教会になっていますけど、この温泉洞(オンチョンドン)の教会にイギリス人の司祭がいて、この方が1年間休暇を取る。だからその温泉洞の教会に留守の間、あるいは留守番として毎日曜日ミサをしてくれればいいやという、申し入れだったんですね。その時、じゃあそれMRI委員会で考えましょうなんていう話だったんですけど、忘れもしない、河野君と大木君がMRI委員会の時に「そんなのおもしろくも何ともない。本格的に宣教師を決める。留守番なんかじゃやだ」。そういう意見が大勢を占め、私はまだ逡巡してたんです。送って大丈夫かという。それでイギリス、アメリカからやっと7月に帰れるようになったので帰って来てすぐですけど、釜山(プサン)教区に行きました。そしてまず、温泉洞(オンチョンドン)の教会に行きました。

BTプロジェクト始動

1975年ここにありますように確かにそう寒い寒い時でした。佐々木司祭もご存じのようにあの大きな体で、震えながらいろいろ話し合ったこと覚えてます。

先ほど申し上げたように留守番をしてくれというのが最初の話でしたけれど、河野君達、それじゃおもしろくないとやっぱりやるなら本気でやろうというようなこと。それは僕は正解だったと思います。事実というか実際的な問題として留守番ではたぶん日本人司祭は受け入れられなかっただろうし、意味がなかったと思うんですね。ですから、本格的なことを考えようということで、7月に行きました。そして、どうしようかというふうに考えて行ったわけですけど、やはり最初に温泉洞(オンチョンドン)の教会に連れて行かれまして、ずーっと見てたときに、その温泉洞(オンチョンドン)の時にどっかにまた出てきますけど、文(ムン)神父という方がいらして、留守でした。で、文(ムン)神父は実は留守番だということ。イギリス人のメン神父という、イギリス名は

覚えてませんけど、メン神父という。

▽　メッサム。

ああメッサムか。その人がもう事実上いないんですよ。文神父っていう方がもう留守番開始してるわけで、これはここへ来てもしょうがないなと、それで信徒の方が二、三見えたけど、あんまり関心がないような感じだった。それからもうひとつ、じゃあ大聴洞はどうかというわけですね。崔さんは、崔哲熙さんは後で考えてみたらば、ちょっと、私たちが本気で考え出したのと相当ずれがあったということを感じます。つまり彼は日本から誰か来ることによって、それによって相当大きな経済的な援助というものを期待したということなんですね。

回って歩いて蔚山に連れて行かれたんですね。蔚山にいって、実はここで家庭集会をやって、そして月にいっぺんだか二か月にいっぺんだか、メン神父っていう温泉洞のイギリス人が来てミサをする。そこへ、四、五人の信徒達が集まるんだというような話を聞きました。

その時にどっかりと座った家が李明熙さんの家だったわけですね。その家、李明熙さんの家で家庭集会をやってるという、そこへいったわけですけど、李

李明熙司祭（現在）

明熙さんの人物を失礼ながらずっと観察したんです。私はこの人は信頼できそうだと思いました。やはり韓国の人たちは潜在的に日本人嫌いです。ですから、どんなこといったって日本人は基本的には信用しないし、とにかく嫌いなわけだ。だからこの人のところへ送って大丈夫かっていう心配の反面、彼が「神様のためなら引き受けましょう。」というような言い方をしてくれて、非常に真実味があったんですね。この人だったら信頼できるっていう、直感ですわ。私はその直感にかけたわけ。で、あの釜山へ帰ってきて、崔さんと最終的にどうですかっていうわけで、温泉洞、大聴洞、馬山にも行ったんですけど、馬山には温泉洞で留守番してるっていう文さんが学生伝道やってて、そこでまあ、もうほんとに汚い六畳一間みたいな掘っ建て小

屋みたいな下宿でミサをし、学生達集めてやってるんだと。ここどうだと言うけど、それは無理だと思った。で、とにかく、蔚山(ウルサン)が一番可能性があるし、もし日本人が死にもの狂いでやれば、何か出来るんじゃないかという気がしたわけですね。そこで、帰ってから報告をしました。そして「私たちは蔚山(ウルサン)だと思う」というと、まあみんな現場を見てないから訳も分からずにそうだっていう風に賛成してくれたわけですね。

そしていよいよ行く段になったんですが、その時に僕は、日本に帰ってくる直前ですけど、崔(チェ)さんに懇々と言ったんです。「お願いだから、受け入れの方にむしろ問題がある。送り出す方は頑張れといって送りだすことはするけれども、受け入れる方がホントに受け入れてくれなかったら、この計画はだめだ。だからその受け入れ態勢をしっかりしてもらいたい」と。「このためには最終的に判子を押すのは李天煥(イチョンファン)主教だ」と。大韓聖公会総会議長であり、財団法人だったんですね、あの時。「財団法人の理事長っていう立場で、あの人が判子押さなければ何の書類も法的効力を持たない。だから、李(イ)さんと充分に話し合って下さいよ」と。ところが、崔(チェ)さんと李(イ)さんとの間の意思の疎通が皆無だったんですね。ホントに書類のやりとりだけ。「これにあんた判子押してくれ」ってなもんで、それは李天煥(イチョンファン)主教にしてみればこんな無礼な話あるかっていう、怒るの当たり前だと思うんですけど。ですから、その書類が李(イ)さんの机の上に放置されたまま、一か月、二か月、何にもされないで推移してしまってる、ということになる。

しかし、こっちは一生懸命やろうと思うから、私はその準備として、参加希望者っていうか、参加予定者みたいな人たちのために、教区の人たちにも呼びかけて、「日本人が韓国に行って働くということの意味っていうのを考えよう」っていう会合を二人の講演者を呼んで二回、我々だけで一回やったわけですよね。一人は李仁夏(イインナ)先生、有名な李仁夏(イインナ)先生ですね。僕初めてこのときに仁夏(インナ)先生と直接話しが出来たと思うんですけど、この７月に帰ってから９月までの間に立て続けにこういう会合をしました。仁夏(インナ)先生はホントにいい話をしてくれて、私はホント感動したんです。もう一人は日本人で、タイのチェンマイの大学に行っていた方。その時休暇で日本に帰ってきたっていうんでしめたと思って呼んだんですけど、望月賢太郎先生。私

は謙遜の太郎、あちらの方は賢い太郎ですね。望月先生も言い、それから李(イ)仁夏(インナ)さんも言い、私も本当そうだと思ったんですけど、この方が外国にいって働くときの心得みたいなものを懇々と説明してくれて、「私はタイだけど、韓国はもっと難しいでしょう」っていうような話をやってくれました。そういうようなものを総括しての一回と。それから、準備会を。私の記憶では三回やったんですね。私はこれで充分だと思いませんでしたけれど、しかし私たちとしては韓国の側からの意見も聞き、そして日本人として外で働くため、当時の状況においてはこういったようなことをとにかく勉強したということはいえたと思います。

その時はホントに行くんだというわけで、相当熱心な会合だったと思います。東京教区内に対しては誰か行く人いるかっていうようなことがあって、個別にも交渉しましたけど、やっぱり河野君、大木君は僕行きますって最初に手を挙げて、それから長谷川君、佐藤徹君、これが僕も行くっていうようなそういうことになりました。これを割り振ったわけですね、一人が1年は無理だ。それは東京教区内の状況考えても、1年いなくなっちゃうというのは無理だから、だから四人が1年を四等分して三か月ずつ働くということにしようと。崔(チェ)さんあんまりこの案は賛成でなかったんですけど、東京教区の事情だから理解して欲しいということで了承してもらいました。

例えば河野君、このとき浅草の教会でしたけど、浅草の教会が空いてしまう。それじゃあというので、近辺の司祭たちで日曜礼拝なんかをカバーしてもらうというような手当もしました。そんなようないろんな事をやったわけですね。

そうこうしているうちに日にちが迫ってくるわけですよ。9月に行くって話になってるんですけど、9月近くなっても、何の音沙汰もないわけで、私は崔(チェ)さんに電話かけて、「どうなってるんだ」といったら、「ソウルの方に行ったっきり返事がない」と、「返事がなかったらあなた何で催促しないの」って言ったんです。僕がまたソウルに電話をしたんですね、李(イ)主教に「どうしてこれおかしくなってるんですか」って。そしたら激怒してんの向こうは、激怒してんだけど、僕は怒ってるって事全然気がつかないから、「何とかよろしくお願いしますよ、そうしないとちょっと困っちゃうし、今後の日韓関係の事も」とか言ってごちゃごちゃごちゃごちゃくだらん説明をしたと思うんですけど、それで

なんかしょうがないやっていうようなことになった。

その書類が何とかなって、結局河野君が出かけたのが10月に入ってからです。ですから三か月と言っても半分ですね。一か月半しか彼は事実上働いてません。彼が行ったときに、9月に来るはずなのに来ないわけでしょ。一か月以上来ない。だから蔚山(ウルサン)では李明熙(イミョンヒ)さんはじめ、「あんな事言ったけど、やっぱり来ないわ」というような受け止め方をしてたところへひょこっと彼が現れたので、「あれ来ちゃった」ってそういう感じだったようですね。「困っちゃった、ホントに来ちゃったよ」という。それは河野君が時々笑いながら思い出話しますけど、そんなような状態で、彼は最初李明熙(イミョンヒ)さんのところに下宿を、確か二週間か三週間ぐらい下宿をしてたと思います。

そして、これホントに来ちゃったということで、李明熙(イミョンヒ)さんがご自分が建てた二階建ての建物、一階に美容院だとか何とかいろいろあるんですけど、二階が比較的広い集会所みたいなのが出来る建物があって、「その二階を教会にしましょう」と彼が言ってくれましたが、ほとんど自費ですよね。自費で教会のスペースを提供してくれて、そこでそうですねえ、河野君はここに一週間いたかなあ、帰国直前にそういうことになってそこに住んで、一週間だか二週間だかを過ごした。その時に彼は、一酸化炭素中毒にかかって死にかかったというそういう話もあるんですけど、そこへ後から長谷川司祭が行って、震えてたというようなことになる訳ですね。

それで二番手が長谷川司祭、これはビザの取得についてそれほど大きな問題ではありませんでした。彼が行って、銀行口座を開くとかやっと何とか格好がつくようなことになってきました。

礼拝は、事実上この人達は韓国語は出来ないわけです。李明熙(イミョンヒ)さんという方は日本語の教育を確か小学校の二年か三年ぐらいまで受けたのかな。いえちょっと待てよ。小学校四年。ですから、ある程度覚えてるんだけど、この30年40年で忘れちゃったというのを彼は必死に勉強してくれたんですね。説教の通訳も出来るようになったんですよ。通訳ったって日本人の司祭が書いたものを徹夜で翻訳をしてそれを読み上げるということでしたけど、とにかくホントに努力をしてくれたんですね、この方は。ホントにこの人の恩を絶対忘れちゃいけないと思ったんですけどもね。そして食べさせてく

れたりね。ホントにこの人いなかったらみんな飢え死にしてるぞ、というのは大げさですけど、ホントにそうなんですよ。この人の心底からの、愛情がなかったら、とてもこんなことできない。李(イ)さんのおかげで我々があまり深刻な問題にぶつからないで済んだと。今だに心から感謝ですわ。

三番手が佐藤君でしたね。佐藤君は佐藤君なりに一生懸命やって、この頃やっとなんと言うかな、日本人司祭のする礼拝に韓国の人たちが多少慣れてきたと、つまりカタカナでやってるわけですから。「ピルチオダ(祈りましょう)」註) なんてやってるわけですから、だからみんな違和感持ってるに違いないんだけど。だけど、よく受け入れてくれたと思いますよね。佐藤君も佐藤君で、コーヒーアワーをしたり、何か一生懸命努力をして、人が教会にたまるような方法を一生懸命考えてくれた。

その次が大木君ですね。大木君は夏の一番熱いときで、長谷川君が冬の一番寒いとき。蔚山(ウルサン)ていうのは南の方だからそうでもないと思うと日向で零下3度か4度という。寒かったね。僕寒いとき慰問に行ったんだけど、慰問どころか私も一緒に震えた。そんなことでありました。大木君は夏、彼ホントに夏弱い人でね、大腸炎になって入院したり、いろいろ苦労が多かったんですけどね、最後の日曜日というのに私は行きました。大木君の最後の日曜日。この礼拝をやって、私はソウルに行きしたが、私はその時についでに下痢しちゃってたんですけど、近辺の司祭達が集まりました。しかし崔(チェ)主教はいなかった。外国に行ったり来たり行ったり来たりしてて、そしてあんなに受け入れ側をお願いしますと言ったにもかかわらず、一度も蔚山(ウルサン)に来たことがないと言ってもいいぐらいの頻度で、日本人司祭に対する配慮というものは全くしてくれなかったですね。これを今恨み節で言ってるんじゃなくて、海外派遣するときに、どういう条件が必要かっていう、最大のポイントとしてこれがあるって言うことを強調したいわけですよ。今後もし日本が何かするんであったら、あるいはこれから韓国だ、フィリピンだ何だってそういうところへも、いわゆる宣教師のような人を送るんだったら、このポイントが一番重要だと私思います。最初から。

註:「祈りましょう」は通常「キドハプシダと言う。「ピルチダオ」は古い言い方

彼のいるような時に私が行って、何とかお願いしますよっていっても、馬耳東風というか、「はいはい」と言って、次の日にはどっか行っちゃう。僕は崔(チェ)さんというのは悪い人だとは決して思わない、むしろいい人なんだけれど。「私は本当に忙しいんです。私の一週間のうちの80%が手紙を書いています。」何の手紙ですかって言ったら「外国へ募金の手紙です」って言う。もう李明熙(イミョンヒ)さんなんか教区の常置委員やってたけれども、会議の度に彼は「主教様」ってやってましたけどね、「そんなお金外国に頼まなくたってここにあるじゃないですか」ってやってる。ちょっとBTプロジェクトについてのいろんな批判があるとすればそこにあると、その一つだという風にそっから派生してきていろいろソウルとの関係もおかしくなっちゃうというようなことが出てきたわけですよね。

こんなようなことで推移をして、そしてもういっぺんという、そのいよいよ大木君が最後の時に近辺の聖職達が集まってきて、何で一年でやめるのかって詰め寄られたわけ。あれは閉口したなあの人達には。それから、尚州(サンジュ)の神父さんも来てくれたけれども、みんなで私を取り囲んで本当に首根っこ捕まえられたわけですよ。「何でやめるんだ」っていう訳で。韓国じゃあれは普通なのかもしれないけれど、「だけどとにかく計画はこれだ。崔(チェ)主教との約束を我々は守る」と。「この人が最後だ」と、断固として言うと、「日本人は駄目だ」ってのがちょっと聞こえて来るんだねまた…「我々は嘘ついている」と言い、「嘘ついてないじゃないか」と、いろいろ口論になりましたけど。ところが、それからしばらくして崔(チェ)さんが帰ってきてもういっぺんやってくれって、主教さんからの正式な手紙が来た。これはちょっと無視できないということで、次の年に入ってからですけど、8月の終わりに大木君が帰ってきて秋はずっとなし、次の年に入ってからまた長谷川司祭が行ってくれると言うので、今度は、長谷川司祭、あの時どこの教会にいたんだっけ…

▽ 神愛です。

神愛でしたね。そこやめたんですね。そこやめて、蔚山(ウルサン)にまあいわば赴任したという形になって出向、一年間出向ということで、行っていただいて。それでもまだ済まずにその次の年は田光君が今度は家族連れで行きました。

▽ あれ、佐藤司祭が行ったのではありません?

いや、ちょろっとですよ。それは。

▽7月25日から7月…

河野君も行ったんですよ。

▽あ、そうですか。

河野君も韓国行きたくってね、「間があいてんのは良くない、僕が行く」とか何とか言って行きましたよ。この時まだね、MDFのお金ちょっとあったかもしれません。だからちょろっとよ。二人とも。それはまさに。一つの日曜日とかね、二つの日曜日ぐらいなもんですよ。その秋ね。場つなぎみたいなもんです。

そういうことがあって、ソウル教区はBTプロジェクトに対して、徹底的に批判的だった。それは、一番大きな理由は李天煥(チョンファン)主教の権限を侵したっていうところにあるわけです。ですから、私は何度も行きましたけど、行くと、まず釜山(プサン)に入って、蔚山(ウルサン)に行って、大田(テジョン)に行って、ソウルに行って挨拶して、それぞれの場所で挨拶をして帰ってくる。そういうやり方をして、少なくとも韓国聖公会の人たちに礼を失しないようにと思ってやってたけれど、そんなの無意味になるほど、ソウルは怒ってるわけですね。それが分かったっていうか、その間いろいろあったりしましたけど、ソウル教区の首脳部が、全体が好感を持っていないというのがだいぶ後になってから分かったんですね。

李(イ)主教と大喧嘩したのは、だいたいこの田光君の頃だったかな、やっと事情が飲み込めたのはだいぶ後になってからの話だね。だから、何年何月何日に喧嘩したなんていうことは覚えてませんけど、でも大喧嘩をいっぱいやったことがあります。彼は僕が書いた手紙を全部出してきてね、「あんたここにこう言ってるけど、嘘じゃないか」みたいなことをやった。外国の主教と喧嘩したのは僕ぐらいなもんだと思うけどね、そういうことですね。でもその後「とにかく申し訳なかった」と、「我々の失敗というか、韓国内の問題なんだから、崔(チェ)さんにやっていただかなければ我々としては何にも出来かったんだけれど我々からもご挨拶をちゃんとしなければいけなかったのかもしれない、それは大変申し訳ない」とそういうふうに最終的には謝ったわけですけどね。それでまあ、李(イ)天煥(チョンファン)主教はとにかく一応了解してくれた。決して僕は許してくれたとは思ってませんでしたけどね。ずっと怒りっぱなしだったと思います。

その代わり、僕はまあ、他の人がなんだって言うぐらい、一生懸命李天煥(イチョンファン)さ

んのためにはお尽くししたつもりなんだけど、なかなか、日本側にも韓国側にも理解してくれる人いなかったですから、それはしょうがない。というのは、この辺の状況です。

BTプロジェクトの評価

ですから、BTプロジェクトっていうのが、本当に良かったか、悪かったかっていうか、いわゆる成功って言葉はあんまり使いたくないんですけど、成功したのか、しなかったかというと、教会が建って、蔚山（ウルサン）の人たちが本当に喜んで、その時いい伝統はやっぱり残していたわけですよね。信徒が働かないと、教会は成り立たんという、それは今だに蔚山（ウルサン）の聖公会、聖バルナバ教会の伝統になっていると思います。当時はだって、こう言うと表現良くないんですけど、日本人司祭っていうのは目は見えないわ、口はきけないわでしょ。文字読んだってわかんないんですから。しゃべれないんですから、聞けないんですから。本を見たって読めないんですから。そういう状態の中で、この人どうやって働かせようかっていうと、彼等にとっては大変な大きな課題であり、重荷だったに違いない。でも、それをちゃんとやってくれたっていうことは僕はある意味で、韓国側にとってはすごいことだったんじゃないかなと思います。

当時の韓国は神父様が仰ることしかしないんだと。神父様のことをお世話するなんて事は夢にも思ってない。神父様はお世話して下さる方だっていう。それがひっくり返ったんです、蔚山（ウルサン）では。だから、日本では当たり前のようなことが向こうでは決して当たり前ではないという、そこいら辺で何か貢献が出来たとしたら、その点かな、というところですね。

日本聖公会、あるいは東京教区にとってどれだけのメリットがあったかっていうとちょっとそれは、行った四人の人、あるいは田光君も入れて五人の人には大変申し訳ない言い方になりますけど、本当に東京教区にとってメリットだったかどうかっていうのは、ちょっと私個人としては疑問あるんですけどね。

メリットがあったのは長谷川君だけですよ。お嫁さん貰っちゃって。（笑）…一つは蔚山（ウルサン）に行ったこの四人、五人、本当に命がけだったと思います。何にも分からないところへ、ぽこんと一人置かれてね、僕はね、長谷川君とはね、寒い時に会って、三、四日一緒にいたっけねぇ。僕はもう、蔚山（ウルサン）からソウルへ行くバ

スに乗るときに、本当にあれが後ろ髪引かれるっていうあれなんだろうね。バスに乗るターミナルまで送ってくれて、もう本当に長谷川君が「先生行っちゃうんですか」って言ったときに「おれ残るよ」って言葉がのど元まで出てたもの。本当あれは大変だと思うんですよね。寒い時で、しかも、日本だったら電話かかってきて、べちゃべちゃお喋りするとかあるかもしれないけど、全然ないんですから。もう頼りは、李明熙（イミョンヒ）さんだけ。他の信徒が来ても、ハハって笑うだけでね、「ヨボセヨ!（もしもし）」ぐらいで後は出ないんだ。そういうところでは本当に大変な苦労だったに違いないと思いました。

▽ BTの評価っていう話が出たんですけれど、竹内先生は東京教区にもたらしたメリットっていうのに対して、懐疑的であるような表現がちょっとあったと思うんですけど。今の日韓関係、日韓交流にも、BTっていうのは方さんの本なんかにもありますけど、非常に大きな働きの一つだったと思うんです。それが東京教区に対してもすごく大きな影響があったんじゃないかとは思ってるんですけど、その辺はどうですか。」

いやいや、その辺は確かにその通りだと思います。ごく、何か表面的な言い方になりますけど、やっぱり韓国に対する認識っていうのは前と後とじゃ全然違うだろうと。やれ謝罪がなんだっていう難しいことよりも、そういうものに対して意識があるっていうのとないのとじゃ全然違うよね。謝罪にしたって、意識があってしてるのと、何かこう表面的にやるのとじゃやっぱり全然違うわけだから。最初は信徒は十人位しかいなくて、その内の半分は日本人に付き合わないってなっちゃっていたんですから。だからそれがいつの間にやら教会建てなきゃになるわけよ、ほんの一、二年。これ、大きいと思うよね。で、やっぱりね、必死に働いたと思う、日本人のこの五人は。だって自分が言ってる話が本当に通じてるかどうか、李明熙（イミョンヒ）さんに対する信頼感でしか分からないんだから。だからやっぱり必死になりますわな、それは。だから、説教しても、説教一つ、あの必死さで今やってるかな、あるいはやったかなというそういうことですよね。僕はあの気持ちをそのまま持ってきたらもっと教会大きくなってもいいんじゃないかというふうに、ちらっと思うわけよ。

今東京教区いろんなことやりすぎてると

思うんだよね。あの時分はほんとにそれをやってね、みんな応援したわけよ。今だともし仮にやっても、やれこっちで何かあるだとか、委員会があるだとか、そんなのなかったもん。たくさんなかったですよね。一つのあれで集中した。だから毀誉褒貶だったですよ。教会なんかでギャーギャーやっつけられると同時に、なんか仕事してんのMRI委員会だけじゃないかみたいなことを言われたりね、どっちなの?誉めてんのけなしてんのどっちなの?って言いたくなっちゃう、そんな状態でしたね。

新教会建設計画

そんなことでですね、最終的に人数も増えたし、美容院の二階の聖堂ではあふれるようになったことはすばらしいことでした。

それで教会が欲しいということになって、土地を買うという段になったわけですね。それは、長谷川司祭の二度目の最後の方でしたっけね。土地見に行ったんですよね。一緒に。行かなかった?田光司祭のほうか? でも長谷川君の時にそういう計画を始めたでしょ。当時の蔚山(ウルサン)は今みたいに繁華街になってませんでしたから、まだ田圃の部分がたくさんあって、全くの何にもないところにポコッと出来た大都会っていう感じですから、何ていうんですか、土地は空いてるんですよ、やたらに。だけど、どこがいいかっていう土地の選定っていうのは大変難しかったんですね。李明熙(イミョンヒ)さんていう人は蔚山(ウルサン)の街が軍需都市として発足する当初から関わった人で、よく分かっている。で、彼がここと、ここと、ここって、三か所ぐらい土地を提示してどれにしましょうかって言ったときに、私はここがいいなと思って決めた。それは大きな新しい何にもないところですよ。ボコッて出来た大通りからちょっと入ったところですね。しかも韓国文化院だとか何とかかんとかって言う公共の建築物がポコッ、ポコッて建ち始めたところで、ここならば何とか。今は密度の高い住宅地みたいになっちゃって、大変なとこになっちゃいましたけど、その頃はまだ水がたまってる田圃だったんですが、1メートルぐらい水があった。

そこを買って、それに対して東京教区が300万円集めて送った。とにかく土地を買いましょう。それを持っていって、土地を買いました、200坪。あとで100坪を売って建築費に当てましたけれど、そ

れが良かったか、悪かったか未だに議論になるわけですけど、そういうことでありました。

▽ 1972年以来のソウル教区との親善関係は、近年不幸な行き違い、誤解のためスムーズでなかったと書いてありますが…」。

あ、それ僕が書いたんです。

▽ MRI委員長の報告ですね。

李(ィ)さんに「日本においで下さい!」みたいな事をやって、ご機嫌を直して下さいよっていう、そういう感じですね。これ見ると思い出します。そうか、あんな事やったのかって感じですね。で、二度目の長谷川司祭を訪問して、激励したり、激励してもあんまり元気な顔しなかったんですけど。そういうことがありました。後藤主教なんかも行っていただいて。後藤主教はその途中からですが本当に一生懸命バックアップしてくれました。

教区内の雰囲気

この間(かん)ですね、東京教区の全体の雰囲気っていうのは、我々に、我々っていうか、MRI委員会が、計画を出すというたんびに、教区会の全体の雰囲気はきわめて冷ややかでした。ことにBTが始まるときですけど、河野、大木、私と三人で何故するかっていうようなことを書いたんです。文章に。1. 親善のため。2. 過去の日本人の犯したことについての償いのため。これに引っかかっちゃったんだ。「償いとは何事だと。韓国に償いとは何事だ」と。僕はほとんど立ち往生ですよ。教区会の席上で。あれが始まる75年の教区会でした。

この頃から僕はもう一切考え方を変えて、当たり障りのないことしか言わないようになった。教区会に対しては。つまりそういうことを言ったら途端にお金がでなくなっちゃう。お金を集めようと思ってやってだめなの。反対が多くて。そこで後藤主教が一言言ってくれりゃいいのになと思って顔見てもね、素知らぬ顔してるから。だけど本当に教区会で立ち往生っていうのはものすごく辛いですよ。しかも理不尽なことで言われるんだから、「何だこん畜生」って思いながら立ってるわけだからやんなっちゃいますけどね。本当に私はあっち向きゃお辞儀し、こっち向きゃ喧嘩し、それを二、三年続けたんですよね。鍛えられたです、本当に。

それまでは、何かあったっても教区会なんて至極平穏でしたから、「分かりまし

た」、パチパチで済んでたんだけど、僕がこのことやり出したら、つっかかっちゃってしょうがない。それから強くなったというか。そういうことですね。だから何か言われてもあまり感じなくなっちゃたんです。そういうことがありました。

蔚山(ウルサン)聖バルナバ教会

とにかく、田光君がいよいよ建築をすると。建築の時にもう、僕は「この建築のためにもお金を」って言う、気力がなくなってきてたわけですね。くたびれちゃって。教区会からして、一応、「募金しますけど、よろしくお願いします」という程度で、だからたいしたお金は集まんなかったんです。

しかし、蔚山(ウルサン)の信徒は本気で働いたんですね。あのお金の約七割、あるいは六割ぐらいが蔚山(ウルサン)の信徒が自分で調達しました。そして土地を売った半分、100坪、今、鉄工所になってますけど、それから、ソウル教区が約20%お金を出してくれた。それがあの、例の李在禎(イ ジェ ジョン)神父、えんやこらでやってくれたんですね。東京教区から50万ぐらいかな、たいした金額じゃないです。ですから本当にこの蔚山(ウルサン)の教会っていうのは、釜山(プ サン)教区の他の教会から一銭もきませんでしたけど、蔚山(ウルサン)の教会の人、土地を売ったお金、ソウルからの援助、東京教区からの涙金で出来た教会です。あれが出来たときに、後藤主教が、1979年の10月10日、忘れもしない10月10日、教会建物の聖別式に行きました。

▽8日から12日の間、後藤主教はじめ20名の訪問団、釜山(プ サン)教区蔚山(ウルサン)聖バルナバ教会献堂式出席のため訪韓、その後ソウル教区を訪問、歓迎を受けた。10月10日ですね。

そうですね。10月10日にその献堂式があったんです。ですから毎年10月10日っていうと招待状が来るんですよ。10月10日っていうのは蔚山(ウルサン)の人にとっては大変な日ということになっとるわけですよ。

これでまあ一応終わったと。一応終わったっていうとおかしいけど、まあ一応責任は果たし、出来るだけのことはやったわい、というようなことでありました。

それと同時に、ソウル教区からの注文もいろいろ増えてきました。そして、前のことがありますから、私としてはソウルからのいろんなご注文もいただきましょうと。何とか前向きに実行しましょうということを考

えておりました。李主教を呼んだり、教役者会とか聖職養成委員会の熱海の合宿とか、そんなような合宿とかそういうような所へ、お呼びして、乾杯したりやったわけですね。そのうち、こういうことになってきたんですが、まあまあ総体的にソウル詣でというのが私自身にとっては増えてきました。出来る限り、必ず蔚山に寄るっていうことは励行したつもりですけれど…

1980年

ここで、1980年を見ますと、うわーいろんな人が来てるなっていう感じですね。1980年にはここにある90周年記念式典、これ井原常置委員を同行して、井原君は大分緊張してましたけど、まあ彼が日本語で挨拶をして、私がそれを翻訳したものを持って日本弁の韓国語の挨拶をするというようなことをしました。

ここのページが変わった一番上に、ソウル教区から聖職二名の東京訪問計画でる。まさにこの感じです。突如として李天煥主教から、「頼みますよ」って言われたんですね。これは釜山教区の次の金栄哲神父の所じゃないですよ。これはあの、釜山教区の人たちに東京見てもらおうと言うことで、特別にお呼びしたということですが、ソウルからは毎年定期的に頼むというような、そういうことが李天煥主教から直接私に要請があったんですね。この辺は1980年ていうのは、全斗煥のころですね、大変だったんですこの頃。行くのも大変、帰るのも大変でありました。私なんかもう、KCIAのお付きがついてるんですね。ちょっとまた別の理由があるんですけど、私の行動っていうのは全部KCIAが把握しているっていう、やんなっちゃうね、政府の筋のよく知ってる人が、「神父さんのデータこんなにありますよ。KCIAにこんなにありますよ」って、「おい、本当かよ」って、背筋がゾッとしたっていうような中で、こういうふうに、行ったりきたりっていうのがしょっちゅうありました。

ソウル教区から東京教区に二人ずつ送るからよろしくっていうのは後になって、何か非常に変質しちゃった、まあその変質が悪い変質じゃないからいいんですけど、最初は李主教特有の言い方ですけども、「一生懸命、身を粉にして働いてる司祭がおりますから、東京で少し休ませてやってくれませんか」で、「この人達は少し教区からお小遣いを出しますが、東京教区からもなにとぞよろしく」と、いうような言い方で、「ちょっとお小遣いも出

金成洙主教

せよ」というような感じですけどね。だから、東京教区でゆっくり休んで遊んで、そして香港へ行って、香港でまたゆっくり遊んで、それでソウルへ帰って来るという、こういう切符を持って来るわけです。李主教が在任中はずっとそれでした。ですからこの人達は全く観光です。これが後になって竹内は何だなんていう批判する人がいるけど、僕はもう李主教に言われた通りやってただけですからね。誤解のないように。後になるとやれ生野だ、やれなんだっていう、そりゃいいですよ研修は。だけどね、分かり切っているところに来て、いかに日本人が在日韓国人をいじめてるかって言ったって、「これだけ私たちはいじめてますなんて言ってもそれでいい思いするわけないだろう」って言ったんだけど、まあまあ、それはそれで意味があるのかなあって、最近はそういう風になってますよね。でも最初はそうじゃないんです。休暇旅行をする。それはもうこちらとしても、ゆっくり遊んで、楽しんでいただいて、多少日本のいいところを見ていってもらいたいというそういうことです。まあ、「日曜日にぶつかったら説教でもしていただきたい」とこの程度の旅行でありました。金成洙さんが主教になってからそう言う風に多少変わっていったと言うところもあるのかもしれませんね。

原爆被災者救済

今までの流れとそれるんですけれど、実は田光君がいたときに、彼から電話があって、「原爆の被害者がいる」。その人たちが田光君に言ったことは、「自分たちも日本の、例えば広島の原爆病院のような所で、治療を受けたいんだ」というわけです。

教会の人たちに助けて欲しいということですよね。で、だいたい分かった、こりゃ大変だ、ウワーって思ったんですけど、その頃三一教会に自民党関係の方がいて、その方にちょっとその話をしたら、「動きましょうか」って動いたんです。「よし」って訳で、動き始めたときに僕はMRI委員会に「こういうふうに言って、こういう要請がきてて、これ何とかしようじゃないか。それに対して、自民党のこういう人がいるから、これを使って行政を

動かさなければだめだ」っていう話をした。そしてその時に、大木君が「私は絶対に反対」と。「原爆症患者を助けることはいいんだけど、自民党の手を借りるのは絶対反対」っていうんです。僕はね、「自民党はともあれ、反対は俺だって自民党反対だけど、だけど国家が動かないとその行政が動かない」と、「ビザ一通出ないんじゃないか」と。「それを動かすのは、やっぱり行政が動かないとだめだ」と言ったけど彼は執拗に反対する訳ね、他の人たちはみんな何の事やらよく訳わかんないからかどうか知らないけど、みんな黙ってるわけです。

僕は最終的に「じゃあ、やめた。私は一人でやるさ」と言いました。それから動き出したわけです。そして、何度行ったかわかんないけど、日本と韓国の間を、言ってみりゃ自由民主党と向こうの民主共和党（ミンジュコンファタン）の間を行ったり来たり、その時金鍾泌（キムジョンピル）と知り合ったんですよ。ちょうど朴正熙（パクチョン ヒ）の暗殺、全斗煥（チョン ド ファン）の実権掌握の前から、その途中で政変が起こって、「しまったこれで駄目か」と思った時ありますけどね。それから楽隊連れて行って、国立劇場で演奏会やってお金集めやってみたり。いろんなデモンストレーションやって、大聖堂でも演奏会やったんですけどね。もうこれはMRI委員会は一切関係なし。やって、自民党を動かして、厚生省動かして、外務省は「日韓条約で決着済み」って、突っぱねるけども、いろんなその代議士の大物引っぱり出してきて、最後に出てきたのが江崎真澄、橋本龍太郎。これが韓国訪問することになる。そしてその聖三一にいた人がこの二人にとにかく釜山（プサン）に寄ってやってくれと頼み、釜山（プサン）にわざわざこのために田光君を行かせたけど、あんまり詳しいことわかんないで行かされておたおたしてるわけ。江崎真澄と橋本龍太郎の前で、原爆の被爆者救済演説やったらしいんだ。今でも、「先生、ひどいよ」なんて言うんですよね。だけど、彼のおかげがあるんですよね。そこで何か体裁のいいこと言ってくれたんでしょう。で、江崎真澄と橋本龍太郎が帰ってきて、すぐ橋本龍太郎が厚生大臣になった。厚生省がわぁーっと動き出した。

そして年間五十人、5年間っていう枠ですよ。韓国側からしてみれば、「そんなの何にもなんない、こっちは二万人いるんだ」っていうわけね。僕もだいぶやられたけど、「とにかく今出来るのはこれだけ」と言っておきました。それで、実

施しました。新聞に出た。合計二五〇人、この人たちに日本の被爆者と同じ資格を与えた。

この人達は、広島の原爆病院に一か月間滞在して、徹底的に検査をして、治療方針を持って帰国して、韓国の病院で「この通りにやって下さい」って言う。厚生省はその前に技官を送って、誰が本当の原爆症かっていうのを徹底調査するっていう話。実現したからね。呆れたんですけどね。本当にやっちゃった、みたいな感じですよ。

東京教区ともMRI委員会とも関係なしですけれど、しかしそれが蔚山(ウルサン)の教会にとってはどうであったか。最初蔚山(ウルサン)の教会の人たちは韓国の人たちと同じで、「原爆?えー」って感じなんだけど、そういう人たちが僕が来るとぞろぞろ会いに来るでしょう。だもんだから、そういう意識も少し出てきてる。それが後になって、蔚山(ウルサン)の聖バルナバ教会では環境問題に非常に関心が出てくるきっかけにもなってるんです。

その為にやっぱりソウルは助けてくれたし、演奏会やるって言えば切符も売ってくれたりしたからね。その時はやっぱり、李天煥(イ チョンファン)さんがバックアップしてくれたんですよ。大喧嘩した後だからよけいだと思うけど、李天煥(イ チョンファン)さんがバックアップしてくれた。感謝ですよ。

被爆者救済こぼれ話

▽ 年表だけでは行間が読めないところがあるのですけれど、だいぶ分かりました。竹内先生は何回も行っておられるでしょう。

20〜30回以上行きましたよね。その原爆のことで。

▽ 原爆の被爆者のための献金っていうの、あれソウルですよね。」

それはこういうことなんです。そんな話が始まったときに、韓国にはキリスト教婦人連合っていうのがあるんですよね。Church Women Unitedこれが被爆者のうち、何人かのために延世大学医学部の付属病院にベッドを確保したと、彼女らのお金で。そしてそこで、無料の治療をするということで、全国から年間何十人って言ったかな、それが洪(ホン)アガタさんが婦人会長に初めてなったときに、「先生助けてよ」って言うから、「よっしゃ」ってわけで、そして初めMRI委員会が主日信施の表を作ったんですけども、その

中に最初に僕は入れたわけ。だから洪(ホン)アガタさんは、とにかく最初に、ソウル教区の婦人会が全国の婦人連合にこのためって言って献金したお金が一番多かったんだって。一番多かったものの相当部分が東京教区だったと。だから、僕の顔見ると「あの時嬉しかった」って言いますけどね。

▽ 数十万ですね。

ええ、ええ。最初大変な勢いだったですよ。

▽ だから婦人会へ送金しているのですね。

そうです。それは僕がやってたのとは、ちょっとまた、次元って言うか状況が違う。私は日本に連れてきて治療して返した。

▽ それは釜山(プサン)教区?

釜山(プサン)教区と言うよりも、釜山(プサン)教区の近辺にいるんだよね、陜川(ハプチョン)っていうのですよ。釜山(プサン)教区の中ですけどね。釜山(プサン)の北の方、晋州(チンジュ)の近く。そこにそのいわゆる、コロニーの様な形で。気の毒なんですよ、非常に。当然貧困だしね。その人たちに、経済的に、そのクリスチャンの人たちがその陜川(ハプチョン)まで行って、細々と治療するというのはだいぶ前からやってるんですけど、彼等が望んでいるのは、私たちは原爆症患者だっていうことを日本政府に認定してもらいたいと、それから生ずる権利はもらいたいっていう。だからそれをやったんです。だから大木君は反対するけど政府が動かなきゃどうにもならない。クリスチャンの医者送るだけじゃだめ。

▽ 慰安婦もそうですね。

そうそうそう。慰安婦だってね、民間が助けたってね、嬉しくも何ともないんです彼等は。政府が動かなきゃだめ。政府に動くように要請してるんですから。今だったらあれだけど、もうちょっと前って本当に自民党が動かなかったら何にも出来なかった。外務省の課長なんか僕のこと怒鳴りつけて、「余計な事するな、牧師が、コノヤロー」なんてね、あいつの顔は忘れられない、僕は。だから、日本大使館まで乗り込んだりさ、外務省行ったりさ、厚生省行ったり。

全部取り決めが出来て最後にいよいよ実行っていうときに橋本龍太郎に会いに行ってさ、「有り難うございました」ってやったけどね。だから、原爆反対運動と、とっ違えられたんです。だから追っか

け回された、CIAに。あそこ原爆の基地がありますからね。日本から来て余計なこと言われて…。だってもう、ホテルへ入ると電話がかかってくる、「あなた明日のご予定は?旅行社ですが」って言うんだけど、僕は旅行社なんか頼んだことない…「釜山(プサン)の飛行機は大丈夫ですね」なんて言ってね、知ってるんだ。しかも李在禎(イジェジョン)神父っていうのはいつも狙われる人でしょ。行くたんびに牢屋入ってるんだからね。それと仲良く歩いたりしたら…仲良く歩いたり、「朝飯食いに来い」なんてホテル呼んだりなんかするもんだから、KCIAがもう真っ青な顔して追っかけ回して。僕は見ると、民主共和党の中入ってるしね、李在禎(イジェジョン)神父とは会ってるしね、なんだか訳わかんなくなってる…面白かったですよ、その頃は。だけど、後で聞いてみたら、いつ拘束されるか分からないところまでいたんだって。

日韓関係を管区レベルに

そんなこんなやっているうちに、田光君が帰ってきたり、一応終わった。さあ、どうしようというような、さあ、どうしようっていうとおかしいけど、これから一つ転機に入っていくことになる。その間僕は原爆のことで頭いっぱいだったから、あんまり実務的なMRI委員会の働きっていうのははやらなかったんです。しかし最終的に今後の方針ていうのをきちんと立てようじゃないかと思いました。MRI委員会に提案をしたのは、この問題は東京教区の課題であることは確かだけど、いわゆる日本聖公会全体の課題じゃないかというふうに日韓関係をとらえたわけです。今まで東京教区だけで教区としてやった。本当に東京教区だけだったんですけども、他に教会としては、大阪のほうなんかがいろいろやっておられました。

全体の課題として、日本聖公会の業(わざ)としてやるっていうことは、やはり日本聖公会の管区のレベルにこういうのを持ち上げていかなきゃいけないんじゃないかということで提案しました。当時、渡辺主教と小南総主事、彼等を呼んで、いろんな話を聞いたりなんかしてたんですね。僕は日本聖公会の課題だっていうんで、「とにかく全国から代表を集めて、呼んで、日韓教会協議会っていうのやろうじゃないの。日韓宣教セミナー」。そういう提案をして、ちょっと強引だったかもしれないけど、ソウルへ行きました。それをやる。管区としても行けるというようなことで。ちょうどその頃日本聖公会総会があった。管

区総主事に河野君がなった。

僕はとにかく管区レベルにのっけるっていうことが目的でしたから、そこで何をやったかっていうとあんまり関心なかったのね、実は。正直言って。管区の事業として、事業っていうかプロジェクトとして、この日韓問題っていうのをのっけることが、日本聖公会にとって一番重要なことだなとあの時点で特に思った。それは成功しましたよね。だけど、その時竹内のやり方が悪いっていうんで総攻撃でね。「何にも知らないのに、そんなことやるのは何事か」なんて、学生みたいな若いのが団体交渉にやってきたりね、つるし上げにきたりいろいろでしたよ。僕は全部断って、断固としてやる。「やめろ。やめろ。謝罪もしないのに行くとは何事か」みたいな話をしてきたけど「行かなきゃ謝罪できないぞ」とかなんとか言って、喧嘩しながらやりましたね。

▽ 82年ですね。セミナーについて、竹内司祭訪韓し、打ち合わせをした。これか。

そうそうそう。

▽ わかりました。

山田主教の時ですからそれです。1984年がそうですね。

▽ 4年が、第一回、3年に準備会。そうですね。わかりました。

そして、もう金成洙（キムソン ス）主教になってるわけですよね。

▽ そうです。

李（イ）主教が交代したからっていうのがあったのかな。僕の気持ちの中にはあんまりそういうのはなかったんですけど。僕はとにかく管区の問題にしなきゃっていうのが一番大事でした。そして河野君は総主事として頑張りました。いろいろありましたけど、そして二回目から、「僕は一回やりゃいいや」なんていったりして、意図的にも僕ははずされて、二回目からは一切関わらないということになったんです。

▽ 85年に第2回って書いてあるんですけど。

第二回は1985年になってますよね。大阪から。ここで東京から前田司祭、長谷川司祭、金順伊（キムスン イ）に、五十嵐・佐藤信康。こういった顔ぶれで、これからこういう交流っていうのが様変わりしてくる。

1988年

1988年に竹田主教になる。88年でしたっけ。

▽88年です。1月。

まだ、この頃はソウル教区聖職研修として、劉裁鎬（ユ ジェ ホ）、金容国（キムヨングク）。この二人は確か、年配の人だったですけどね。

▽おかしいんですよね。二つ続いてるんですよ、9・10と。これ間違いじゃないんですか、一つは…

うん?

▽9月にソウル教区聖職研修、ソウルから洪永善（ホンヨンソン）。

洪永善（ホンヨンソン）、李定九（イ ジョン グ）。

▽これ9月でしょ。10月にまた、金栄一（キムヨンイル）とかそういう人が二週間いると。どっか変ですね。

金栄一（キムヨンイル）っていうのは…ああ、これか。いやいや。あったかもしれませんよ。僕はもうこの頃一切手を離していましたし、ちょうどNCCの議長になりましたから、89年の3月に。だからもう忙しくてとてもこれ出来なかったんですよね。

▽たくさん来てますよね。

後が、だいたいそういうような所で、書いてある通りなのかな。私はむしろこここら辺からNCC議長として韓国へはちょこちょこ行きました。東京教区のもう、これもうそろそろMRI委員会じゃなくなったんじゃないですか。まだMRI委員会あるのか。ああ、そう。これ五十嵐君が委員長。94年解散か。

▽はい、そうです。

確か、こんな感じでしょうね。こうして、こちらからも行き、向こうからも来、というのが日本聖公会東京教区の状況の中でどういう意味を持ってきたかなというようなそういうことはなお、なお、考える、考えねばならぬ課題ではないかなと思います。まだまだ何となく何かしてあげる雰囲気というのがあるうちは本物ではないと、私はそう思います。

▽ 本日は長時間にわたり貴重なお話を戴き、誠にありがとうございました。 断片的には既知の部分もかなりありますけれども、こうやってまとめて話をしていただきますと、ほんとに目が開かれる思いがします。 また、竹内先生の記憶力のよさにはほんとに敬服いたしました。 年表の記録の誤り等も、おかげさまで修正することが出来ました。

これから新しい千年紀を迎えるこの時期に今迄の日韓の交流の歩みを振り返りつつ正しい認識を得る事が出来ました。これを糧として、私達は共に歩み、共に成長する道を探ってまいりたいと思います。

先生のご健康とこれからの更なるご活躍をお祈りいたします。

BTプロジェクト———

BTプロジェクトは1975年９月から翌年までの第１期と、77年１月から79年９月までの第２期に別れますが、釜山教区と東京教区との間に交わされた協約にもとづいて慶尚北道の蔚山教会に日本人司祭が延べ４年間にわたって５人交代で派遣される大がかりなものでした。日本聖公会として始めて外国に宣教師を送り出すという画期的なプロジェクトです。このプロジェクトに関わった聖職は以下のとおりです。

〔第１期〕

1975年 ９月～11月 ---------- 河野　裕道　司祭
1975年 12月～76年２月 --- 長谷川正昭　司祭
1976年 ３月～５月 ---------- 佐藤　　徹　司祭
1976年 ６月～８月 ---------- 大木　弘行　司祭

〔第２期〕

1977年 １月～78年４月 ----- 長谷川正昭　司祭
1978年 ５月～７月 ---------- 佐藤　　徹　司祭
1978年 ９月～79年９月 ----- 田光　信幸　司祭

そして、このプロジェクトを釜山教区（崔哲熙主教当時）との間に取り交わしたのは、当時MRI委員長であった竹内謙太郎司祭でした。（竹内司祭の回顧談参照）

このプロジェクトの意義については故後藤真主教がお書きになった文章（コラム参照）に簡潔にまとめられていると思います。

ここでは、蔚山教会信徒会長李明熙氏（現在西蔚山教会執事）大木弘行司祭、佐藤徹司祭、田光信幸司祭に思い出を書いて頂きました。

教会の今日あるまで

執事　李明熙（イミョンヒ）

東京教区と釜山教区が交流を始めた時、名称をBTプロジェクトと名付けて発足しました。司祭が足りない釜山教区では人的援助を要請しました。それが決議され、3か月ずつ4人の司祭が1年間、勤務する条件で勤務地が蔚山に決められた時、私は肯定的な捉え方より、否定的な見方をしていました。その理由は韓日間の辛かった過去、植民地時代の虐政を経験してきたからです。このモヤモヤした晴れない過去の問題が私の心情の中に潜在していたからだと思います。

しかし、実際にBTプロジェクトを通して交流が始まってみると、二つのことに気がつきました。一つはキリストの中でわかちあえる愛は何時でも何処ででも誰にでも可能であることを体験しました。もう一つは人間の根本を変えることは出来ないけれども愛の中では少しずつ変化していくことに気づきました。

1　宣教の種は播かれて

釜山教区内でも条件が良い多数の教会が日本人司祭に勤務してくれることを望んで申請したにもかかわらず、竹内謙太郎MRI委員長（当時）は教会の建物もない、そして信徒数も6名しかいない蔚山を選択しました。その深い理由はわかりませんが、開拓伝道することに意義を見出したようです。ですから、私は牧会面での期待は始めから抱いておりませんでした。

1975年9月29日、河野裕道神父を筆頭に12月8日長谷川正昭神父、1976年4月14日佐藤徹神父、1976年6月17日大木弘行神父を最後に一年間の契約期間が完了しました。蔚山教会では教会委員会を開催して、評価会をしました。結果は四人の司祭はそれぞれ個性も違うし、牧会方法も違いましたが、共通点は熱心に努力することであり、生活と文化が違う外国での寂しい生活の苦労を甘んじて我慢してくだ

さる有り難さを感謝したいということでした。そして、信徒との連帯関係もとてもよかったという評価でした。それで可能であるならば、三年間このプロジェクトを延長してほしいということを釜山教区長である崔哲熙主教に要請することにしました。

条件としては1人の神父が一年以上勤務してくれることを希望しました。その要請が受け入れられ、1997年2月長谷川神父が1年の期限で再赴任してくださった時、信徒皆が集まって歓迎をしました。

2　福音の種は芽生えて

長谷川司祭は挨拶の言葉も多少韓国語で出来ましたので、わかりやすい説教で信徒たちが教会に親しめるように心を配ってくれました。1977年6月15日、竹内MRI委員長が訪韓して教会土地取得代金として300万円を寄贈してくださったので7月10日蔚山市南区新亭洞15－3の空き地、226坪を購入しました。

1978年3月長谷川司祭が任期満了で帰国し、6月25日、田光信幸司祭が家族同伴で赴任してくださいましたので私たちは6番目の日本人司祭と出会いました。信徒たちは牧師婦人があまりにも親切なので、平日でも皆が教会に寄って、生活を助けようとする姿はとても微笑ましいものがありました。

この時から教会委員会で或る試練が始まりました。と言うのは田光司祭が帰国する前に教会建築に着手して、たった一回でも新しい聖堂で聖餐式を捧げて欲しいという願いが芽生えたからです。建築費がまったく用意できていない状態でしたので、考えた挙げ句、土地100坪を売却することにしました。購入して20か月余りで地価が5倍程上昇して、建築費の半分を賄うことが出来ました。残り半分は国内外で募金することを決め、4月11日信徒代表として私が訪日して、東京教区内で募金を訴えた結果、教区婦人会で50万円拠出を約束してくれました。そして、6月28日第一期工事を完了、6月29日に田光司祭が初めての聖餐式を捧げて6月30日御家族と共に帰国、同年10月9日東京教区後藤主教と釜山教区崔主教共同司式による聖別式を行いました。来客は日本から20名、国内から約200名が出席して盛大に行われました。

3　神の福音は国境を越えて

愛があるところには平和が共存しています。東京教区BTプロジェクト関係者の皆様の愛によって私の固い敵愾心が溶かされ、現在は日本を一番理解する一人に変わりました。蔚山教会信徒一同も東京教区の司祭たちとの交流にかかわったすべての信徒はいつも当時を懐かしみながら司祭たちの平安をお祈りしています。私たちは神の中で永遠の友人となることを願っています。二五年前から皆さんがお祈りして下さる蔚山教会は歴史は浅いけれど東京教区で播いてくれた種が無駄にならないように努力していますし、継続的に成長して、今は釜山教区でも一番信徒数が多い（150名）教会になりました。1986年浦項（ポハン）教会の開拓のために伝道を開始しましたし、1999年蔚山教会の支教会として西蔚山教会を開拓して、私が副祭（執事）として働いています。

私自身は勿論、蔚山教会信徒すべてが東京教区のためにいつもお祈りしています。この祈りは永遠であると思います。私たちの心にはもう国境はありません。

東京教区主教さま、司祭さま方、信徒の皆さまに全能である神のみ恵みが豊かにありますように心からお祈り申し上げます。

（2000年7月18日　釜山教区西蔚山教会）

現在の蔚山（ウルサン）聖バルナバ教会

民衆の視点を大切に

司祭　大木　弘行

BTプロジェクトが実施されてからすでに二五年が経ち、その後、韓国も、日韓関係も大きく変わり、今はただ蔚山の教会の信徒の方々を始め、韓国聖公会の聖職、信徒に対して感謝の思いでいっぱいです。私たち日本人を、最も赦し難い日本人である私たちを受け入れて下さったのですから。そして、共に主の聖餐に与かり、赦しと和解の福音に共に生かされ、立つことの出来た喜びと感謝は私の拙い言葉では言い尽くすことは出来ません。

1976年8月15日、この日は日曜日であり、韓国では三六年に及んだ日帝・植民地時代からの解放を記念する「光復節」の日でもありました。当日、私は主日礼拝の司式、説教をしなければなりませんでした。その説教準備のため、あれほど苦しんだ経験がかってあったでしょうか。当日は説教することが出来ず、ただ神と韓国人会衆の前に深く頭を垂れ、長く朝鮮半島の人々に対して犯した罪を悔い、その赦罪を祈り求めたのでした。

当時、蔚山聖公会の信徒会長であった李明熙兄は笑顔で私に次のように言ってくれたのです。

「大木神父さん、いいですよ。神父さんと一緒に聖餐式ができたのですから。それが嬉しいですよ」

蔚山聖公会で洗礼式を施す大木弘行司祭

何と素晴らしい信仰でしょう。私の説教の出来なかった思いを深く理解され、そして主イエスの愛の力と喜びを与えてくれた李明熙兄のあの笑顔と言葉は生涯忘れることができないでしょう。主イエスの福音の真実はBTプロジェクトの経験を通して私たちに与えられたのではないでしょうか。

私がこのBTプロジェクトに参加することになった理由には、幾つかの大切な出会いがありました。その第一は1970年7月にソウル教区から立教大学大学院に留学のため来日された崔哲熙神父との出会いであります。当時、千住基督教会の牧師であった私は約二年間、崔神父と生活を共に致しました。この間、崔神父を訪ねて来たソウル教区の聖職、信徒に会うことの出来たことは貴重な経験であったと思います。

その後、帰国した崔哲熙神父は1974年4月、釜山教区の初代主教に選出され、同年6月1日に当時、ソウル教区長李天煥主教によってソウル大聖堂で主教に叙任、按手されました。私はこの主教按手式に後藤真主教の代理として臨席しました。その時、大田教区の主教に裴斗煥神父も按手され、大韓聖公会には李主教始め、三人の韓国人主教が司牧されることになり、大きな希望と喜びが与えられました。

その後、私はソウル、仁川、水原の各教会を訪ね、また大田教区での裴主教の就任式、続いて釜山教区での崔主教の就任式にも出席する機会が与えられ、この事の経験は私のその後の韓国聖公会との交流に大きな影響を与えるものとなり、今も深く感謝致しております。

さて、BTプロジェクトは1963年カナダのトロントで開かれた全聖公会の会議で、A・M・ラムゼー大主教によって提唱されたM・R・I（相互責任と相互依存）の宣教理念の精神に立ちながら、更にはP・I・M（宣教における協働）の実践という目的を踏まえ、日韓聖公会相互の教会の革新と変革を目指して行われた画期的な宣教プロジェクトではなかったでしょうか。勿論、日韓の相互の教区、教会の聖職と信徒の協力がなければ、その目的を果たすことは出来なかったことでしょう。

1970年代の韓国社会と教会の情況はどうであったでしょうか。1972年10月、朴正熙大統領は憲法改正を行い、73年に入ってからはその独裁体制を強め、教会や民衆への弾圧を強化していきました。これに対し、教会は立ち上が

り、いわゆる「民主化闘争」を連日のように行っていたのです。教会の牧師、神父、神学者たち、学生、労働者たちは民衆と共に政府の弾圧、迫害に屈せず、神の正義と自由のために、「救国宣言」を訴えながら苦しむ民衆と共に、神の平和と民主主義の実現のために闘っていったのです。その時、民衆の先頭に立っていたのは牧師であり、神父たちであり、また神学者、学生でありました。BTプロジェクトはこのような韓国の政治的、社会的情況の只中で行われたのです。

当時、私たちが蔚山からソウルを訪ねると明洞カトリック教会に入る左右の坂道には沢山のテントが立ち並び、警官に取り囲まれた中で、大勢の学生、労働者たちが語り合い、歌をうたっていた姿が今でも目に浮かんでまいります。「韓国の教会は生きている」…失礼ながら、その時、私はそう思いました。歴史の現実の中に生きてある教会、民衆と共に生きている教会の姿を目の当たりにし、心打たれ、それにくらべ日本の教会の何と貧しいことかと耐えがたい思いに打ちのめされたことを告白しなければなりません。

ローマカトリック・ソウル教区
明洞大聖堂

かって、BTプロジェクトの報告書「カッチ・カプシダ」の序文に「宣教の

宣教のスピリットとは

主教　ダビデ　後藤　真

今から約百十数年前、米国聖公会から始めて日本に送られた最初の宣教師ウイリアムス主教の報告は当時、スピリット・オブ・ミッショッンという雑誌に掲載されていた。私は四〇年前ヴアージニアの神学校に在学中、当時の総裁主教タッカー主教の依頼によって、主教が書いておられた書物の資料を作るため、神学校の書庫の中でほこりにまみれて、この古い報告を読んで大いに感動した。この報告が、どんなに当時の米国聖公会の人々の宣教のスピリットを高揚したことであろうか。その後、ずっと、米国聖公会の日本人への宣教の協働が続いたのである。

それから約半世紀、今、日本聖公会の我々は始めて自分たちが外国の宣教の協働のために送り出した宣教師の報告を読むという画期的な経験をすることが出来るようになったのである。

スピリットのない教会は活きた教会ではない。」と後藤真主教は書かれています。この序文は今読んでも大変感慨深いものがあります。後藤主教もこのプロジェクトに対し、終始、祈りと支援を惜しまず、私たちを励ましてくれました。感謝の念を禁じえません。

1979年10月、CCA主催の「民衆神学」を主題として神学協議会がソウルのアカデミー・ハウスで開かれ、私はその会に出席する機会が与えられ、当時、民衆神学を提唱し活躍されていた故安炳茂教授、故徐南同教授にお会いすることが出来たことは幸いでありました。あの三日間の会議―発題の内容については「民衆の神学」（キリスト教アジア資料センター編　教文館）に詳しく発表されているのでここでは割愛させていただきますが―終始、緊張した雰囲気のなかで、新しい神学的息吹きを直接感じながら、韓国の神学者たちの姿勢に学ぶ貴重な経験でありました。その会議の翌日、私は蔚山に向かい、そこで朴正熙大統領の暗殺の事件を知ったのです。その時の驚きは忘れることは出来ません。私的な事を書きながら、韓国現代史の大きな流れの中に、これまで多くを学ぶ機会が与えられていたのだと今、あらためて思い返しながら感謝を致しております。

2000年の今や、朝鮮半島に新しい平和の訪れの近きを感じ、嬉しく思います。今後の日韓聖公会の宣教の協働の新しい地平を望みながら、聖霊のひそかな導きがありますように祈ってやみません。

シャローム。

私たちの送った宣教師が言語も生活慣習も全く異なった所で福音に仕えようとした時にどのような経験をし、どのようなことを学んだか、またそれを受けた人々が、どのようなことをしたか、私たちはここで本当に、宣教における協働（パートナーズ・イン・ミッション）ということを具体的に体験することが出来るのである。

宣教のスピリットのない教会は活きた教会ではない。宣教師を送り、そのために祈り、これを支えるということの中に、我々の宣教への参与がある。

私はこの報告書（注、BTプロジェクトの報告書「カッチカプシダ」を指す）が、東京教区を本当に活き活きとした宣教協働体とする助けとなることを祈って、皆様に是非読んで頂きたいと願っている。

（1997年4月25日発行
「カッチカプシダ」の序文）

日韓教会交流に関わって

司祭　佐藤　徹

わたしが意識的に韓国の教会と関わり合うことになったのは、1975年からの東京教区と釜山教区とのいわゆるBTプロジェクトの一員として参与した時からであった。私は二度派遣されたのであるが、最初の時、1976年の3月初めに行く予定であったが、私が危険人物で合ったせいか、ヴィザがなかなか降りず、4月14日に韓国の釜山空港に到着し、崔釜山教区主教と李明熙蔚山教会信徒会長に出迎えられた。そして韓国の第一印象はどうですかと尋ねられた。私の答は、顔つきも余り変わらないし、外国に来たという感じはしません。考えてみれば、元日本ですからねであった。主教さんは苦笑いをされていた。そしてその瞬間に私はハッとした。これ程酷い差別発言はないと感じたことはない。そしてこのことについて謝ることはできないと思ったと同時に、私のできる限りのことをすることが、私の謝罪であると決心した。この差別発言は私と同年代の日本人がごく自然に思っていることであると確認したことでもあった。そしてその思いが、李信徒会長との交わりの中で段々と強められていった。

私と李会長とは、一才違いで、わたしの方が年上であった。このことは、私にとってその後の韓国人理解に大きな影響があったのである。彼は私に、あなただけが、私のお兄さんだからと言って、私たち日本人が全く知らされていない、日韓の歴史を彼自身の経験を通して彼が今まで日本人に抱いていた気持ちを知らされたのである。日本人は黒い服と帽子を被っていて黙って人の家に入って来て、韓国では、出産後養生している部屋には、夫でも入れないのに、その部屋からお米を運び出してしまう礼儀知らずの嫌らしい国民だと思っていた。このプロジェクトが始まることを聞いた時、崔主教は何を考えているか分からなかった。しかも、司祭であっても日本人を自分の家に泊めることは、村八分に遭わなければならないと決心して

いたと、最初に派遣された河野司祭が本当に来たときに思ったと述懐していた。いくら司祭でも韓国には来ないでしょうとも思っていたと。しかし来てしまった。この彼の思いは、それを聞いた時には、韓国の人たちの気持ちが分かり始めていた時なので、堪らない気持ちになった。

このような状態でBTプロジェクトが始められたのである。しかし日にちが経つうちに、これ程親身になってくれる人たちはいないと思うほど、微にいり細にいりお世話になった。彼は言う。違った司祭たちが来て、私の日本人に対する見方が違った。心の暖かい、心の通える人たちであると。

私自身は、蔚山の教会で何をしたかと聞かれると、毎週のように各家庭が回り持ちで婦人中心の家庭集会に一緒に行き、言葉も分からず、ただニコニコしているだけ、日本語で開会の祈りをするだけであったが、そこにはいつも近所の新しい顔があった。主日には、カタカナで書いた韓国語で聖餐式を司式し、日本語で説教し（勿論、李会長による通訳付）、信徒のところによばれて食事をご馳走になるだけであった。もう一つのことは、聖餐式後、すぐに帰ってしまうので、礼拝後に、コーヒータイムを持つようにしたことである。それによって信徒同志のコミュニケイションが円滑化されたことである。

ある家庭集会の時のことであった。時々、釜山からピビ（多分フィベ）修女が参加され、聖書の話をされていた。このシスターは、今は無き仙台の青葉学園で婦人伝道師の勉強をなさった方で、日本語の上手な方であった。この方が私に言葉がわからないから退屈ではないかと聞かれた。いや私は皆さんが一生懸命にシスターの話を聞いておられるのを見ていて退屈するよりも、感動していると答えると、ある信徒が、シスターに私に何と言ったのかと聞き、私が何と答えたのかとも聞き、彼女は、私たちは言葉がわからなくても、神父が側にいてくれることによって、安心していられるから是非居てくださいということであった。このような発言は、それまで一度も言われたことがないので、びっくりもし、また感動的であった。神様に感謝したことは言うまでもない。このような私の状態にもかかわらず、教会にくる人が増え続け、初めは五、六人であったのが、毎主日二〇人以上に膨れ上がっていったことは、不思議なことであり、婦

人達の努力はもとより、神様の計り知れないお働きに感謝賛美を捧げる他はなかった。現在は、二〇〇人を越す、釜山教区では、第一の教会に成長している。

二回目に蔚山に行ったのは、1978年4月の半ばから7月の半ばまでで、それまで一年と二ケ月滞在した長谷川司祭と後から初めて家族で赴任する田光司祭との繋ぎで、受け入れ態勢を作るためであった。この間、蔚山の教会の土地取得のための募金が東京教区でされ、募金目標300万円がほぼ達成され、200坪余りの土地が与えられた。そして、その当時、蔚山の教会では、礼拝堂建築に気持ちが傾き始め、その時買った土地が短期間で六、七倍にまで跳ね上がり、半分ほど売って礼拝堂建築資金に当てようということに決めた頃であった。今でも、蔚山聖バルナバ教会は、釜山教区に属するけれども、東京教区立の教会であると現地の信徒は言っている。教会名もこの頃に、信徒たちの同意で決定された。

私がMRI委員長になった年の教区会での出来事であった。MRI委員会の報告の時、ある信徒代議員の質問に、「宣教師を送ったとあるが、そんな力があるのか、東京教区を見た時に、足下がしっかりして居ないのに韓国どこ

BTプロジェクトこぼれ話

後藤真主教のコラムに記されているように、BTプロジェクトは戦後、日本聖公会が始めて外国に宣教師を送り出したという経験であった。言葉も文化も習慣も異なるのは当然で、遣わされた司祭たちの苦労は並み大抵ではなかったであろう。しかし、そこにはユーモラスなエピソードもある。例えば、蔚山教会が建設されるまでの仮礼拝堂は信徒会長（当時）李明熙氏の御令妹が経営していた美容院の二階だったが、日本からの国際電話は「二階の神父さんをお願いします」という韓国語を片仮名で関係者が必死になって覚えたものである。「イーチョンキョウヘイシンプニムブッタクハムニダ」と。

因みに韓国聖公会では司祭という呼び方よりも神父という呼び方が一般的である。尊称のニムをつけて「シンプニム」と呼ぶ。日本語で言えば「神父さま」である。

もうひとつ、感動的なエピソードを御紹介しよう。最終ランナーの田光信幸司祭は家族を伴って赴任した。田光夫人が書いた文章があるので以下に引用する。

『蔚山に着いた最初の日、信徒会長の李さんに連れられて市場に布団を買いに行った。「日本人だとわかると高くなるので日本語を使わないように」と言われ、口を閉ざしていた。決

ろではないのではないか」とあった。私は、宣教師というのは、米英の宣教師のように教えるというのではなく、他の国に学ぶための宣教師ということも有り得るのではないか、そして足下ばかり見て、他の国に目を向けていないから教区の現状があるのではないか、と答えたことが二〇年余り経った今でも鮮明に覚えており、悲しい思いをした。このことが少なからず、私の思いが韓国の教会との結び付けを濃いものにしていったことは否めない。

このことが、韓国訪問団への参加を進め、ガイドをして、普通こんな場所に日本人を連れてくることはなく、こんなに日本人の悪口を言わなければならないことは辛いと言わしめるような場所を訪問した。日韓の歴史の一端に触れてもらおうという意図であり、知らないという罪の大きさを知って頂くためであった。そしてこのことは、東京教区民だけでなく、日本聖公会の人たちに知ってほしいとの気持ちがBTプロジェクト関係した者たちに更に強くなっていった。そして、ソウル、釜山教区だけでなく、大田教区からも交流を求める連絡があり、これは単に東京教区だけの問題としてではなく、日本聖公会全体の問題として受け止めるべく、当時の管区協働委員会にこの話を持ち込むことにより、総会

める時に小声で「これは綿かしら」と言ったら、そこのおばさんから「綿だよ」と返事が来てびっくりした。それからそこの店の前を通ると寄っていかないかと声をかけられ、「日本でジュジュ・クリームは今いくらする?」と聞かれたり、寒くなると毛布はいらないかといつも言われ、断るのに苦労した。何か月か過ぎた頃、私が韓国語を使うと言って周りの人と大笑いされた。オンドルの心地良さを話すと「日本はワラ(畳)じゃねえかよ」という言葉が返って来る。こんな言葉を残していったのはまぎれもなく日本人なのだろうと思いながら聞いていた。(中略)

蔚山に住み着いて何日か過ぎた頃、市場で見かける見事な手さばきで包丁を使わずに作っている手打ちうどん、時々立ち止まってその手付きを眺めていたが、或る日、それをもらってこようとナベをかかえて行った。ところがなかなか通じず、弱っていたらそこで食べていた五〇位の男の人の日本語で助かった。周りの人の目が向けられていることを感じながら持ち帰った。夕方、子供を連れてナベの蓋用に借りた皿を返しにそこへ行くと昼間その傍で物を売っていた人達の冷たい視線が笑顔になり、そして一番冷たい目で見つめられていたうどん屋の婦人からもその笑顔が子供に向けられていた。』

にかけられた。今までの経緯から、東京の山田主教、竹内司祭と私が、大韓聖公会との協議をするために訪韓することになり、1984年の10月8日から10日までの第一回日韓宣教セミナーの開催に漕ぎ着けたのである。私たちが大韓聖公会との関わりを持ってから十年にしてやっと漕ぎ着けられたのである。

そして特筆されるべき出来事として、今年の5月に、李明熙信徒会長が、執事に叙任され、来年には司祭に叙任されるであろうということである。彼の人生の中に、BTプロジェクトがなかったらという感がしないでもない。神様のご計画は計り知れない。感謝である。

私にとって韓国とのかかわりはこれで終わったことではない。死ぬまで何かの形で関わっていきたいという思いが強いのである。

BTプロジェクトに参加して

司祭　田光信幸

いまウルサンでの一年間を振り返ることになって、いろいろなとまどいが胸中を去来します。21年前、32歳、司祭に按手されて９か月、妻と２歳半のこどもの家族同伴で赴任したという当時の私自身は、「日韓交流」という目的をもったBTプロジェクトの意義を充分理解し、自発的意欲を持ってということでは決してありませんでした。一後任がいない。一聖堂建築が始まるので東京教区の司祭が必要とされている。一行けば学ぶことは沢山ある。一とにかく行きなさいというのが、正直なところ当時の私を取り巻く状況でした。韓国語とはどんな言葉であるのか、それさえも意識したことのなかったものが半年程度の準備でなにができるのか、不安も思い浮かばないくらいあきらめの胸中のなか、とにかくできそうな準備からというところからスタートしました。

離日前の数ケ月間、早稲田のNCCの韓国語教室に通い、川崎の李仁夏先生のところにお伺いして日韓の歴史、「在日」問題などのお話を聞き、今村秀子さんの励ましを受けながら準備の時を過ごしました。

その間、息子の入院、母の危篤・入院という家族の問題を抱えながら落ち着きのない中を過ごしました。入院中の母を見舞い、医師から回復の可能性はないと聞かされましたが、韓国に行くということは今の自分にとっては必然の事柄だと言い聞かせながら出発しました。

空港で、李仁夏先生と父の見送りを受けましたが、青年時代に関東大震災の時、逃げまどう朝鮮の人たちをこん棒をもって探し回ったという父が、李先生に手をとられ励まされている姿に、すでにわたしにとってのBTプロジェクトの成果が目に見えるようでした。

蔚山に赴任して一か月後に母の逝去の知らせを受け、葬儀のために一時帰国しましたが、蔚山の教会に戻ったとき、教会の人がみなさん集まり逝去記念の礼拝を日本語でさせていただいとき、蔚山の教会のみなさんの厚意に主

を信じる者の心からの繋がりを感じることができました。

赴任してからの二ケ月間の生活は、衣食住に慣れること、業者の手続きミスでなかなか着かない生活用品の手配に振り回されましたが、その後は韓国の秋のさわやかな空と空気に癒されるような思いの中、教会は聖堂建築の具体化に向けて建築計画の協議、建築募金のための教会巡り（韓国中の）、また竹内謙太郎司祭からの要請で在韓被爆者団体の方々との実態調査活動と多忙に過ごしました。

釜山教区の教役者の方との交流は、釜山の温泉洞におられたキム・ブント神父さんの厚意で研修旅行や協議会などにも出席させていただきました。また、教会では韓国語のできないわたしのために若い教役者の方に教会活動の多くを助けてもらいました。

記憶は定かではないのですが、聖堂建築は秋の終わりくらいからとりかかり、酷寒の中、少しづつブロックが積み上げられていきました。その間、李明熙会長が毎日のように、朝早く教会に来られては息子を自転車に乗せ現場に連れて行ってくれました。息子さんにとっては遊びの少ない中でそれは楽しみのひとつでもあったようです。

聖堂がほぼ完成に近づいた頃には、信徒全員で床の研き出し作業も行われました。ウルサンの教会は李会長を中心にまさに家族といっても良い絆があったように思います。教会員相互の交わりは、信仰に生きる運命共同体のように、未信徒、求道者には親しみと尊敬を込めた交際がありました。とりわけわたしたち家族にとっては、教会階下の食堂、美容院の方たちとは愉快な楽しい付き合いがありました。

一年間という滞在は、振り返ればほんのひとときの間という思いがありますが、その期間に体験したこと、教えられたことは記憶のなかに収まりきれない多くのものがあります。いま、そのほんの一部の記憶をたどりながら二一年前のわたしの出来事を振り返って、わたしにとってBTプロジェクトとは、それは「交流」という言葉では収めきれない、出会った一人一人の方との「共生」の体験ではなかったかと思います。東京教区のなかで、これまでの「交流」を通しての「共生」の学びがさらに広がりを持つこと、韓国の人々、「在日」韓国・朝鮮の人々との出会いと「共生」が、豊かな恵みの賜物として活かされる機

会を作り出すこと、偏見と無関心のなかで起きる差別を払拭することがこれからの教会の宣教にとって大きな役目を果たすものとなるのではないかと思います。

当初、今回のわたしの主題としては、人権問題と日韓交流の関係にも触れてという注文もありましたが、人権問題、日韓交流という題目でのまとめは、わたし自身の体験を越えて、さらに「日ー韓」という歴史的、社会的問題意識からとらえてまとめていくことが必要であるように思います。もちろんそのときにも「共生」という体験が、何人も差別せず、何人にも自らの優位を主張せず、敬愛と尊敬の思いの中でこそ人権は尊重されるということを実証するものであると思います。

聖職者短期研修報告　東京教区教区会記録から

大韓聖公会ソウル教区を訪問して

司祭　高橋 顕

東京教区とソウル教区の交流プログラムによって、1995年の11月17日から12月1日までの二週間、八木正言執事と共に、大韓聖公会ソウル教区を訪問した。訪問中に二回の主日を迎えたが、それぞれ、ソウル教区の聖生園聖フランシス教会と仁川間石教会を訪れた。限られた時間内ではあったが、それぞれの教会の聖職と信徒よりお話をうかがい、ありのままの教会の現状にふれることができた。「私たちの教会はここでこうしている」という明確さと熱意が強く伝わってきた。

二週間の訪問中、主な宿泊場所は聖架修女院であったが、ソウル教区内の様々な施設や活動場所を訪ねることもできた。教区事務所をはじめ、「マドゥル福祉館」、「分かち合いの家」、独立記念館、延世大学、韓国キリスト教協議会（NCC―K）、韓国基督長老派総会教育院、江華島地域、ペーロン聖地教役者静想会、聖公会大学校などに訪れた。それぞれの訪問地では温かい歓迎を受け、親睦を持ち、また多くの学びを得ることができた。特に、ペーロン聖地での教役者静想会に参加させていただいた時、ソウル教区の聖職者全員と共にあって、深い霊的な養いと慰めと力を与えられ、心から神に感謝をささげた。

私は今回の韓国訪問にあたって、韓国におけるキリスト教とシャーマニズムの関係について、関心の視点をもった。1960年代以降における韓国のキリスト教界の爆発的な急成長の背景には、韓国の伝統的巫俗信仰（シャーマニズム）が多大な要素となっているのではないか、という意識を持って、韓国へ訪問した。機会あるごとに、このような意識に立った話題や質問をし、またミアリ占星村で女性の占い師に会ったり、市街地の市場地域でムーダン（巫女＝シャーマン）に会うことができた。ソウル教区での滞在をとおして、韓国ではなお圧倒的に多くの人々がムーダンに頼り、その託宣を聴き、その祈りに願いを託している

ことを知った。60年代以降、韓国の農村共同体の急速な崩壊により、多くの人々が都市に移り住んだ。しかし精神的な支えをもはやかつての共同体に見いだすことはできず、都市生活においてキリスト教に支えを求めた。また、それだけでは満たしきれないところに、ムーダンとの関係が成り立っている。「ムーダンに求めるように教会に求める信者がたくさんいる」との発言を聞いた。

また、ソウル教区滞在中に、韓国における外国人労働者の現状とそのことについて支援活動をしている働きを知る機会を与えられた。滞在ビザの期限が切れてもなお、韓国内に滞在して働いている外国人労働者は、年々増えている。しかしその社会的立場のために、彼らは不当な生活を余儀なくされ、苦しめられている。そのことについて、教会は彼らに目を向け、彼らの人権と生活のために支援活動をしている。私はそのことについて具体的に多くの気づきと学びを与えられた。

今回の私たちの韓国訪問を備え、支えて下さったすべての方々に心から感謝いたします。そしてこれからの日本と韓国との関係が、さらに神さまのみ心にそう豊かなものとなりますよう、お祈りいたします。

大韓聖公会ソウル教区を訪問して

司祭　八木正言

去る1995年11月17日から12月1日まで、東京教区と大韓聖公会ソウル教区との教役者人事交流プログラムにより、高橋顕司祭と共に、韓国ソウルを訪問する機会を与えられました。韓国は93年、聖公会神学院の三年次の実習以来二度目の訪問になりますが、前回同様、今回も実に多くのことを感じさせられ、考えさせられ、また学ぶことができました。それらを一つずつご報告するのは別の機会に譲るとして、ここではその一端をご紹介することで、今の私の思いを共有していただくことができればと願っています。

今、私が韓国で経験したこと、どういう所を訪れたのか、そこで何を感じたのかを一つ一つお話したい、という思いに駆られながらも、それにもましてこの紙面を通して分かち合っていただくことができればと考えるのは、私と李貞浩（イ ジョン ホ）神父（韓国では、聖公会の司祭も一般的に神父と呼びます。）との「出会い」につ

いてです。あえてここでこのことについて書こうとするのは、この「出会い」が、単に二年前に知り合った「友」との再会とか、大変にお世話になった、よくしてもらった、という域を越えた「出会い」であったからです。

韓国独立記念館を訪れ、そこに展示されている韓国と日本の「歴史」を目の当りにしたとき、そこに李貞浩神父が共にいてくれたことで、私はそれを一国の歴史（それは日本の歴史でもあるのですが）ではなく、李貞浩神父の歴史として感じることができました。またソウル教区全教役者によるリトリートに同席し、同教区が直面する問題を垣間見たとき、それは一教区の課題としてでなく、「友」が直面している課題であると感じたからこそ、一緒になって懸命に考えることができました。李貞浩神父の奉職する聖フランシス教会が、外国人労働者とのより良い関係を築くために必死になっている、と聞かされたとき、それは一教会が抱える問題ではなく、「友」が取り組み、必死になっている問題と感じたからこそ、何もできない自分を思い、痛みを覚えました。

今、私は、図らずも戦後五〇年であった95年という年に、韓国という場所において、そして李貞浩という一人の神父の存在を通して、即ち「出会い」を通して、韓国を見、聞き、感じることができたのだと思わされています。そしてそれは、神が二千年前という具体的な「時」に、ユダヤという具体的な「場所」に、イエスという存在を遣わされて福音を告げ知らせたことと無関係と言えないと思っています。だからこそ神は常に、具体的な人のもとへ、具体的な場所へと私たちを派遣されるのだとも思います。「出会い」を通してはじめて、私たちを取り巻く事柄の一つ一つが明らかになっていくのだ、そう思うのです。さらにはこのような具体的な関係にしがみつき、生き抜こうとすることこそが、イエスの歩まれた道であったように思えてなりません。

韓国訪問を通してあらためて思わされたこと、「出会いを生きること」、そしてそこで自らが「変えられて行くこと」を、これからも自らの旨として歩んで行きたいと思っています。

大韓聖公会ソウル教区を訪問して

司祭　吉村庄司

東京教区とソウル教区の日韓交流プログラムの一環として、私は1997年11月11日から22日まで、佐々木庸司祭と共に韓国を訪問しました。到着翌日に、韓国の「独立記念館」を訪れて、非常なショックを受け、打ちのめされました。何故なら、1592年日本の豊臣秀吉の朝鮮侵略に始まって、日本帝国主義が朝鮮を侵略していった過程、そして植民地化してからの暴虐を尽くした統治の実体を知ったからです。

これは、まさに人権蹂躙、人権無視の野蛮な行為であり、私は日本人共同体の一員として韓国、朝鮮の全ての人（生きている方、逝去された方）に対して、心の底から謝罪いたします。なおかつ、日本帝国が、日本国民に実態を知らさなかった罪、そして戦後、今日に到るまで、真に謝罪しない日本政府の罪、そして私自身がこれまでに知ろうとしなかった、おこたりの罪を、深く受けとめています。日本の歴史教育のあり方が問われます。

さて、ソウル教区の宣教活動に聞する見聞・体験の主要なものを挙げます。

第一に、21世紀を目前にして、チョン・チョルポム主教は、在任期間十年間に四十の教会を創ることを提案しておられます。1996年には議政府地域（ソウル市北側）に新しい教会を開拓し、京畿道北部地域に教会拡張の新しい起点が確保されました。江東区にある江東教会は、鄭淵優神父の指導のもとに大聖堂に次ぐ立派な教会を建築中でした。

第二に、ソウル主教座聖堂が1926年に聖別された時には、経済的困難によって計画の半分しか建築されていなかったが、今回やっと本来の設計通りに完成したことです。まことに荘厳で立派な教会建築です。これは韓国のキリスト教会や社会に対して、聖公会の存在を高め、宣教と教会発展の新しい拠点に寄与するでしょう。

第三に、ソウル教区内に四教会区があり、その一つ江華教務区を訪問して印象的な事は、

（1）教務区内の聖職者たちが毎週木曜日に集まり、洪永善神父の指導のもと、次の主日の説教準備を熱心に討論した後、小学校の校庭で地域住民とサッカーをします。

（2）ちょうど収穫期の後ですので、司

祭が各信徒の家庭を巡回訪問し、家庭祈祷会をします。近隣の信徒たちが集まり、司祭を囲んで、聖歌、聖書、短い講話、祈祷をします。

第四に、11月17目の主日にソウル教区で第二番目に大きい教会である京畿道の水原教会（朴構造神父）に招かれ、三〇〇余名の会衆と共に収穫感謝礼拝をしました。祭壇の前には、大地の豊かな産物が捧げられ、神からの賜物を感謝し、主の栄光を現すことができますように共に祈りました。そして、「日本聖公会の宣教ビジョン」の講演をしました。

第五に、都市貧民のための宣教奉仕活動として、「分かち合いの家」が十年前に創立され、現在、教区内に四箇所あります。この度は、松林洞の「分かち合いの家」を訪問しました。地域住民のニードに合ったプログラムが展開されています。側えば、学童保育、両親教育、自立教育、福祉プログラム、礼拝など、イエス・キリストの愛に根ざした奉仕活動です。この活動に従事する教役者は教区主教の派遣ではなく、自ら召命を感じ、志願した人です。生活費、活動費は、教区からでなく、教区内の委員会が募金を集めて支えています。新しい宣教活動のモデルでもあります。実にソウル教区は宣教に燃えています。

大韓聖公会ソウル教区を訪問して

司祭　佐々木 庸

1997年、11月11日（月）から22日（金）まで東京教区の日韓交流プロジェクトのプログラムによって研修させていただきました。15年前にBT（釜山・東京）プロジェクトの訪韓団の一員として生まれて初めての海外旅行をさせて頂いて以来四回目の韓国でした。そのうち、ソウルは三回目。三年前に九州教区からサイモン金成洙（キムソンスウ）前主教様の首座主教就任式に参加して以来でした。今回の研修で個人としての目的は日韓の歴史の認識でした。縄文・弥生時代はしっかり教えるが、せいぜい明治維新ぐらいで時間切れとなってそれ以後の歴史は自習しておくようにで片付けられてきた不幸な学校での歴史教育のため、安重根（アンジュンクン）義士も柳寛順（ユガァンスン）さんも李舜臣（イスンシン）将軍も知らなかった私の遅ればせながらの勉強でした。希望していた、独立記念館、柳寛順記念館、安重根記念館、カトリッ

クの切頭山殉教記念館にも案内していただけたのは心の痛みを覚えつつも感謝でした。三・一独立運動のタプコル・コンウォン（パゴダ公園）へも初めての吉村庄司司祭と三年ぶりに再訪できました。1910年以来、36年の日帝支配だけでなく豊臣秀吉の時代（壬辰の乱）から我が国が韓国を苦しめてきた歴史を改めて認識しました。三年前にあまりの失礼さに愕然とした、あの景福宮の光化門と勤政殿の間に、いわば人様の玄関を遮るかたちで作られた、旧朝鮮総督府（国立中央博物館）が撤去されたのは、日本人のしたことをこれで忘れてはいけませんが、正直言って、やっと少しほっとしました。

二週間にも満たない短期研修で何程のことが理解できたとはいえませんが、次の二つのことは言えるのではないかと思いました。

（1）三年前にはまだ未完成だったソウルの大聖堂が本来の計画どおりに昨年五月に立派に完成されたことが象徴するような、目に見える教会成長があるということ。江華島地区の家庭祈祷会に参加させて頂き、すでに香山執事が第78教区会で報告されているように宣教教育院による通信教育テキスト、区域祈祷会テキストなど地道な文書伝道の努力があることを再認識しました。さらにカトリックからプロテスタントまで教派を越えた韓国キリスト教界における聖霊刷新運動（カリスマ運動）の霊性の影響も確かにあると思いました。

（2）同時に、民衆の神学・解放の神学の流れにたつ、分かち合いの家（ナヌメジプ）にも仁川で触れることができました。聖公会大学校の李在禎総長が指摘されるようにすでに過去の奉仕プログラム：学童保育、託児所、識字学級だけでなく、自分達の手で基礎共同体が始まっていました。15年前にも今回も訪問した聖ペトロ学校（知的障害児）の働きもソウル教区の実践でした。天国直通だけでなく、主イエスとともに身の回りの他者に仕えようとする教会の姿勢は東京教区の宣教方針とも一致すると思いました。この二つが排斥しあうのでなく両輪となるように努力されていることは大いに見習わなくてはと思いました。さらに日本聖公会は少し文書伝道が弱いと反省させられました。いづれにせよ、韓国の聖職・信徒方々の神様にたいする熱心さには本当に頭がさがりました。

本年は信徒の方々とともに東京教区の教役者がソウル教区を訪問して、初

めての宣教大会（「ソウル―東京21世紀宣教大会　教会・未来・挑戦」6／16―19）が予定されています。両教区がこれまで顔と顔を知り合って積み重ねて来たこの教役者交流のプログラムが発展して私達が、さらに具体的に理解の違いや働きの違いは違いとして認識しつつ、21世紀に向けて共に担いあっていく共通課題はなにかを探って行きたいと願っております。

韓国訪問の機会を与えて下さいましたすべての皆様に感謝しております。

大韓聖公会ソウル教区を訪問して

聖職候補生　中川英樹

去る98年10月7日から16日までの10日間、大韓聖公会ソウル教区を訪問する機会を与えられました。聖公会神学院を卒業し、教会・保育園という実際の牧会の場での勤務が半年を過ぎようとしていた私にとって「これから」どの様に教会共同体を形成していくのか、また保育園という現場で子供達の人格形成にどの様に関わっていくのか、が中心的な関心・課題でありました。その「これから」を考えていく上で、この韓国研修が良い学び・経験の時である事を願い、研修の主たる目的を「ソウル教区の牧会・施設・宣教現場の訪問」としました。

10日間という短い日程の中で、江（カン）東（ドン）、山本（サンボン）、平澤（ピョンテク）、水原（スウォン）の四つの教会を訪問し、特に水原教会では信徒宅に宿泊し、その支教会（今は母教会の支援下にあるが三年後には自立を目指している教会）である東水原教会も訪問する事が出来ました。この東水原教会はソウル教区の中でも比較的新しく、これからが期待されているとの事でしたが、その途上で地域への奉仕を模索しつつも、なかなか課題が明確に出来ず、実践に移せない焦りや信徒数の減少、教会形成にとっての様々な課題に苦悩している神父が、同じ様に思い悩む私のために祈ってくれた事は今でも大きな励みとなっています。また江東教会では主日前夕より神父宅に宿泊し、神父としての自分の経験や教会形成に対する神父の考え方等の色々な話を伺う時が与えられました。私はこれらの経験の中で、折に触れて祈る信徒達、そして教役者達の姿を見ました。そして、その祈りが教会会衆全体の中に響き合い、励まし合い、祝福し合っている事、また教会会衆全

体の中に「祈りと祝福」が充溢している事を感じました。この「祈りと祝福」の発見は私の「これから」を考えていく上での大きな支えとなる事でありました。

現在、韓国はIMFの管理体制下にあり、中小企業の相次ぐ倒産は国民的関心事となっています。多くの人々が職を失い、路上生活を強いられるといった事態が現実に起こっています。実際にソウル駅周辺の就職紹介所には、再就職を求める人々が列を作っていましたし、近郊の公園には、途方に暮れる人々の姿が多くありました。こうした状況下にあっての家族の崩壊は深刻な問題であり、何とか家族の解体を回避しようと、奉天洞にある「分かち合いの家」では、失業を家族で乗り越えるため、家族単位の精神的ケアと再就職支援を目的とした支援施設「家族休憩所」を10月から始めたばかりでした。ソウル教区において、今後こうした活動は増えていく予定であると聞きます。社会の抱える課題が、直接教会の抱える課題である事をソウル教区は実践しています。そして、これら様々な宣教活動が多くの教会の「祈りと祝福」によって支えられていることを改めて感じました。

現在の韓国が抱えている課題を直接肌で感じ、その課題に取り組むソウル教会の各教会の働きに、そして多くの人々との出会いと多くの祈りに触れた一〇日間は、私にとって励ましと学びの時でありました。この訪問に際し、本当に多くの方々のご協力とご支援があった事に心から感謝したいと思います。最後に、今回の研修は、これまでの東京教区とソウル教区との教役者人事交流プログラムという枠を越えて、中部教区との合同研修（野村司祭が参加）という形をとりましたが、韓国での様々な体験を、それぞれが直面する関心や課題に引きつけながら、東京・中部という教区の枠を越えて分かちあえた事も大きな喜びであったことも付記しておきたいと思います。

留学体験と日韓交流について――

司祭　香山洋人

私が始めて韓国を訪問したのは1986年でした。東京教区がソウル教区との間で模索していた青年交流の準備のためです。それまで、指紋押捺拒否の運動などを通して在日韓国人との接点はありましたが、民主化闘争の真っ只中を生きる韓国の教会青年たちとの出会いは衝撃的でした。それから十年後の1996年に韓国の聖公会大学に留学するまでの間、さまざまなレヴェルでの「韓国体験」を経てきましたが、ソウルでの二年半の生活を終えた今も心からの友と呼べる仲間たちの多くは、十年前の青年交流で出会い、お互いに困難と希望を分かち合った人々です。

交流の原点は文字通り人間であり、個人です。ただ、その個人がどのような背景を持ち、どのような立場であるのかということは大切です。私の場合、初めは日本聖公会東京教区の青年を代表する一人として、次にはMRI委員会の一員として、セミナーなどに参加する時も常に「東京代表、日本代表」の一員として韓国に行き、韓国の人々を迎えてきました。ところが1997年、ソウルで「東京―ソウル21世紀宣教大会」が開かれたとき、留学中であった私はソウル教区側で準備に参加し、ソウル教区側の名簿に加えられ、「ソウル教区　香山洋人」とハングルで書かれた名札を渡されました。

日本人である私が安易に韓国側に立つことはできません。私は一人の人間で

留学中の香山洋人司祭とご家族。右は佐々木庸司祭

ありながら、同時に所属する共同体や社会を自分自身の背景としていますし、そのことに責任を持つ人間であることから逃げ出すことはできません。韓国で暮らしながら、私たち家族は自分たちが日本人であること、そして、かつて日本が植民地として収奪の限りを尽くしたこの大地に、植民地支配の傷跡が癒えないままのこの国の人々の暮らしの只中におかれていることを、片時も意識しなかったことはありませんでした。

「ソウル教区　香山洋人」とハングルで書かれた名札が意味するものは、そうした厳然たる事実にもかかわらず、教会の交わりが作り出すことができる新しい世界のきざし、希望のしるしのようなものかもしれません。自分自身のことをこのように語るのは僭越なようですが、私の韓国留学は単なる個人の留学ではなく、これまでの多岐にわたる日韓交流、東京―ソウル両教区の交流の積み重ねの実りであり、東京教区としての施策の一環でもありますから、ここでは臆することなく希望のしるしであると申し上げたいと思います。

日本人であること、あるいは韓国人であることを越えた新しい世界は、立場性を無視することではなく、むしろ明確な立場性や責任性を表明することによって初めて可能になるのだと思います。日本にとって韓国そして北朝鮮は単なる「外国」ではありえません。私個人にとっても韓国への留学は、ただ神学を勉強するための海外留学ではなく、「日本人としての韓国への留学」であり、私たち家族が経験したのは単なる海外生活ではなく、「日本人として韓国で暮らす」というものでした。立場を明らかにするとは、自分がどのような日本人であろうとするのかを示すことであり、責任を明らかにすることとは、自分が属する社会や組織の中でどのような役割を果たそうとするのかということだと思います。

真実を重んじ、声なき者の声を代弁することを願い、忘れ去られようとする過去の証言者として今を生きようとすること。学徒として相手に謙虚に身をゆだねること。こうした姿勢が、日本人であるという自明の立場性を超えて、正義と和解の福音に生きようとする志を持つ者、日本と韓国の間で生まれつつある新しい世界を証する存在として、一瞬であっても一人の日本人が韓国の側に共に立つことを許してくれたのではないか、それが、「ソウル教区　香山洋人」とハングルで書かれた名札が語る希望だと思います。

韓国でのわずかばかりの生活を通して

願うこと、それは日韓両国の聖公会が、互いに相手の言葉に耳を傾け合うパートナーでありたいということです。日韓の歴史について学ぶことは、ゆがめられた歴史意識を払拭できず、基本的な知識すら共有できていない日本社会に暮らす人間としての必須的課題ですが、しかし韓国は歴史学習のための場であってはならず、ましてや歴史博物館ではありません。今を生きる韓国の信仰者たちの課題と祈りの言葉に耳を傾ける姿勢が大切です。また、対等なパートナーになるためには自分たちの課題が何であるかを語ることができなければなりません。聞いたり学んだりという作業は決して一方通行ではなく、互いに聞き合い学び合う関係の中で生じます。そのためにも互いの言葉を知ること、生活の様子や教会の様子などがわかる人材がどんどん増えることが必要です。交流は結局は個人と個人の関係ですが、限られた人同士の関係ではなく、少しでもたくさんの窓口が開かれていることが、交流の幅を広げ、内容を豊かにすることでしょう。

日本にとって韓国は、いつしか「普通の外国」になるのかもしれません。しかしそれはそう簡単な道のりではありません。両国の関係の原点は、少なくとも日本の課題として第一にあげられるのは在日韓国朝鮮人です。在日の存在が両国の歴史を端的に示しており、彼／彼女らこそまさに歴史の生き証人であり、在日の受けている民族差別の現実が、日本社会が韓国や朝鮮に持っている偏見の根深さを物語っています。在日をめぐる問題と日韓の交流には厳密な区別が必要ですが、在日の存在を見失った日韓交流は、日本の側にとって立場性の喪失を意味します。そのような意味から、これまでの日韓聖公会の交流がお互いの課題を大切にしながら進められてきたことはもっともなことであり、人と人との出会いの中で形成されてきた関係であればこそ、形式に流されない実質的な交流のスタイルが作られてきたのだと思います。

日本の教会で働く韓国人聖職、韓国で神学教育を受けた日本人聖職。これからはこういう人々が増えていくことでしょう。日本のキリスト教界において、聖公会、特に東京教区が積み上げてきた韓国の教会との関係は実に貴重であると思います。今後もますます深い人間的な交わりをもとに、新しい世界の構築へ向けた交流が深められることを祈っています。

間石教会（聖ニコラス教会）と練馬聖ガブリエル教会との交流――

主教　五十嵐正司

1984年、韓国を訪ねた五十嵐司祭は、ソウル市内また江華島（カンファドゥ）の歴史的建物、教会を韓国の司祭に案内してもらいました。朝鮮王朝の成明皇后（閔妃（ミンビ））が日本軍により殺害された場所を訪ね、朝鮮支配の中心地として立てられた朝鮮総督、また豊臣秀吉の軍隊に焼かれた、様々な施設を訪ね、また大韓聖公会で最も古い教会に案内してもらいました。その教会に立派な鐘楼がありましたが鐘はありません。日本軍に供出させられて、そのままになっているとのこと。案内者から「鐘を返してください」と言われて、何も言えなかったことを思い出します。そのときの、案内者が洪神父でした。

洪神父との関わりの始めは重苦しいものでしたが、その後、何度かかの文通等を通して互いに信頼関係が生まれました。洪神父が間石教会に赴任されたのを機に、相互の教会の交流を通して、学びと宣教協働ができればと願い、相互に主日礼拝で代祷をすることにし、相互訪問をも開始しました。始めは教会委員の相互訪問をし、後に中・高校生の交流、そして婦人会の交流が行われました。その交流によって日韓の歴史を学び、三一独立運動の発祥の地であり犠牲者が記念されているパゴタ公園や独立記念館を訪ねました。また、在日韓国・朝鮮人の現状をも学ぶようになりました。

間石教会の姉妹教会設立の礼拝にも出席して、その伝道スピリットに圧倒されました。この両教会の交流はそれぞれの教会メンバーに相互理解と信頼を促し、また、キリストにある兄弟姉妹として宣教協働へと導かれました。その導かれた場が、フィリピン中央教区でした。同教区がキリストの働きとして行って貧困に苦しむ人々へのプロジェクトでした。

両教会の信徒が身近な兄弟姉妹である思いを持つことができ、キリストの働きを協働するまでになったことを嬉しく思い、主イエスの恵みに感謝です。

両教会の信徒のイニシアチブによって交流が発展されたことは特記すべきことです。

（九州教区主教）

第２期の特徴

司祭　佐々木庸

聖ニコラス教会（間石教会）と練馬聖ガブリエル教会の交流もそれぞれの主任司祭の転勤により、洪神父→江華島温水（オンスリィ）教会、教務局長、大聖堂主任司祭。五十嵐司祭→東京聖三一教会→九州教区主教。次世代に入ったと言えよう。

96年はカンソク教会に金容國（キムヨング）神父がガブリエル教会に佐々木庸司祭が着任した。それまでの各会別交流の青年、婦人の流れのなかで、4月20日から23日まで韓国側が金容國（キムヨング）神父夫妻、方承熹（バンスンヒ）信徒会長はじめ婦人方七名計十人が訪問された。

97年は練馬の壮年会五名と佐々木庸司祭の計六名が5月2日～5日に訪韓した。その際の話し合いで、日韓の聖公会の両教会がアジアの聖公会、具体的にはフィリピン聖公会中央教区のボテンガン主教（五十嵐主教と司祭時代からの友人）のホーリースピリット・ミッション（タギの聖霊教会による小学校就学前の子どもたちへのプレスクールの働き）を支援して行こうという話し合いになった。このことは翌月のソウル－東京21世紀宣教大会で特別講演をされた金鎮萬（キムジンマン）教授（聖公会大学校）によって紹介された。カンソク教会は、11月26日から29日に金容國神父夫妻、方承熹信徒会長はじめ十数名でフィリピンへ。練馬も佐々木庸司祭と横内允協働委員が26～28日現地調査に合流した。その結果、間石（カンソク）側は子どもの奨学金を、練馬は建設中断の教室の資金援助をすることとなった。

98年には、カンソク教会の壮年会八名と金容國神父の計九名が11月20日～23日来日され一回りに差し掛かった両教会の交流について意見交換を行ない今後はフィリピン支援で現地で交流しょうと話し合った。

99年8月1日～5日練馬は佐々木司祭と協働委員会のメンバー他五名、計六名で工事の進捗状況の視察や子どもたちや現地スタッフの顔と顔を

合わせた交流のためにフィリピンを訪問した。残念ながらカンソク教会は日程が合わず合流することができなかった。

2000年7月に間石(カンソク)教会は、直轄司祭が金容國(キムヨング)神父から劉載縞(ユジェフォ)神父に交代。信徒会長も黄麟祥氏から権赫吉(ウォンヒョウチョル)氏に。11月5日の練馬聖ガブリエル教会の創立六五周年には同信徒会長が参列され、また同月16日から佐々木司祭がカンソク教会へ牧師交代の表敬訪問に行くので今後21世紀に向けてこれからの両教会の友好交流関係について話し合っていくことになるであろう。この時期の特徴は日韓両聖公会の小教区(パリッシュ)の二教会が自分達だけで完結してしまうのでなく、アジアの聖公会の一員として協働していこうと目指し動いたことと言えよう。

（練馬聖ガブリエル教会牧師）

間石教会聖堂にて　練馬聖ガブリエル教会壮年会訪問

日韓セミナーから21世紀宣教大会まで――

司祭　前田良彦

BTプロジェクト以降、東京教区MRI委員会は日本聖公会管区事務所がPIMの理念に沿って、体外的な関わりを管区と管区の交渉を経て行うことに提案をしてむしろ日韓との交わりは日韓聖公会宣教セミナーを中心にしてきたと言えよう。いわゆる日韓セミナーが実施されている期間は、日韓の歴史を学ぶ会の開催、日韓の青年たちの交流を支援し、ソウル教区からの聖職者研修を着実に実施していたことが教区の記録からも明らかである。

東京教区の大韓聖公会との交流は、1）東京ーソウル教区間の人事交流　2）東京ーソウル青年交流協議会　3）日韓の歴史を考える会、を柱としている。

1）の東京ーソウル教区間の人事交流については「短期交換研修報告」で触れているので、ここでは日韓聖公会宣教セミナーの内容、日韓の歴史を学ぶ会、東京ーソウル青年交流協議会について触れてみる。（MRI委員会のMRIとはMutual Responsibility and Interdepedence in the Body of Christ＝キリストの体における相互責任と相互依存）の意味です。MRI委員会の活動はこの理念を中心にしている。全世界の聖公会がそれぞれの責任において協働して宣教の働きに参与しようというものです。東京教区ではアメリカ聖公会のメリーランド教区、大韓聖公会のソウル教区との交わり、また現在のカパティラン・プロジェクトもこの理念から出発したものです。

日韓セミナー

日韓セミナーと呼ばれているが正しくは「日韓聖公会宣教セミナー」で1984年から1993年にかけて、5回のセミナーが開催された。第1回から第5回までを要約で紹介する。

第1回　1984年10月6日－10日（ソウル）

主題　相互理解と協働を求めて

講演　1. 今日の韓日関係その歴史的背景（宋建縞）

2. 日韓宣教協働における日本の応答（竹田眞）

発題　1. 両国人事交流活性化（丁哲範・河野裕道）

2. 対共産圏宣教問題（朴勝視・五十嵐正司）

3. 日韓青少年協働プログラムの開発（朴鍾基・佐藤徹）

4. 両国聖公会の歴史的関係の反省（金鎮萬・竹内謙太郎）

5. 在日韓国人に対する宣教とその問題点（徐千萬）

在日韓国人の宣教問題（松原栄）

共同声明（要旨）

1）日韓両聖公会は相互の歴史的認識と協働が両国聖公会の宣教を確実に実行するために必要。

2）日本聖公会は36年間の植民地支配から今日まで、なすべき事をなさず、なすべかざる事をなしてきた罪を懺悔し、深く陳謝し、両国聖公会は不幸な過去を再確認し日本の歴史歪曲、経済的支配、文化的偏見と差別を信仰により拒否する。

3）大韓聖公会は相互交流と協働の宣教的使命によって、過去の両聖公会の信仰的反省の土台の上に、相互人事交流の活性化、日韓青少年協働プログラム開発、在日韓国人の宣教問題と法的地位対策、共産圏キリスト者へ継続的関心を持つ。

4）日本聖公会は在日韓民族への差別問題を緊急かつ重要な宣教の課題であると認識しこれを推進する。

5）両聖公会は提起された課題の継続的協議と宣教協力のため、常設の協議機構を発足させる。

東京教区からの参加者

山口千寿司祭（浅草聖ヨハネ教会）、竹田眞司祭（聖公会神学院）、竹内謙太郎司祭（東京聖三一教

会）、五十嵐正司司祭（練馬聖公会）、河野裕道（池袋聖公会）

第2回　1985年11月15日－19日（大阪）

主題　私たちは主に罪を犯しました
－両国聖公会の歴史をかえりみて－

講演　1　日本聖公会の歴史を顧みて（塚田理）

講演　2　私は主に罪を犯しました－韓国聖公会の歴史を省みながら－（崔哲熙）

発題　1　宣教師が残したものを我々はどう受け止めてきたか。（朴耕造・藤間繁義）

発題　2　両国聖公会は民衆にとって何であったのか。（不詳・井田泉）

発題　3　在日韓国朝鮮人の悩みは誰の罪か（李龍吉・金徳煥）

合同報告書（要旨）

両国聖公会の歴史的汚点を省みて自らの過ちに気づき、宣教の使命を覚醒するよう努力し、次の事が提案、また認識された。

1）両国聖公会は民衆を抑圧する権力に批判的に関わることができず、民衆と共に歩んではこなかった。

2）大韓聖公会は日本の天皇制復活傾向と靖国神社問題に対し危惧を表し、日本聖公会はこの問題に取り組むべきであると指摘した。

3）聖ガブリエル教会に関心が強まり韓国側から献金があった。

4）在日韓国朝鮮人の人権問題である外登法の指紋押捺撤廃にむけて日本聖公会は努力する。

「日韓交流史」を導いたもの

竹田眞主教の序にある方承憙氏の「韓日聖公会交流史に関する考察」は、韓国の聖公会大学校神学大学院で神学修士課程において学位請求論文として1998年に提出されたものである。著者は大韓聖公会の仁川間石教会の信徒会長、韓日交流委員会の委員長を歴任された信徒。70才で聖公会大学校神学大学院に学び、当時東京教区から留学中の香山洋人執事（現司祭）と机を並べた学友。

内容としては、第一章は前史として1592年の壬辰倭乱（豊臣秀吉の朝鮮出兵）に参加したクリスチャン日本人武士によって戦場に捨てられ死んでいこうとする子供たちが天国に行けるよう洗礼を施されたということから、カトリック教会が誕生したというJ.G. Luiz de Medina師（イエズス会）の説から16世紀日本カトリックと「朝鮮」の歴史が説き始められている。

そこから一気に19世紀に飛び、第二章に日韓

5）両国の歴史を学ぶ為日本聖公会は家庭教育をはじめあらゆる機会に学習すべきである。
6）サハリン在留韓国人問題で政府に影響力を。
7）韓国人被爆者問題への関心が希薄。
8）相互理解が不十分。
9）相互交流を継続的に深める必要がある。

東京教区からの参加者

佐藤信康司祭（神田キリスト教会）、前田良彦司祭（東京諸聖徒教会）、長谷川正昭司祭（渋谷聖公会聖ミカエル教会）、金順伊（渋谷聖公会聖ミカエル教会）

準備委員として

五十嵐正司司祭（練馬聖公会）、河野裕道司祭（池袋聖公会・管区事務所総主事）

第3回　1988年5月19日－22日（釜山）

主題　教会成長と社会正義の関わり

主題 1　教会成長と社会正義の関係（李大鏞）

主題 2　教会成長と社会正義の関わり（関本肇）

発題 1　社会正義と聖公会の体質（河野裕道・金安基）

発題 2　民主化運動と社会正義実践（文相尹）

発題 3　社会正義に対する聖書的要求（森紀旦・郭賢紫）

合同報告書（要旨）

神の正義を実現する器としての聖公

聖公会関係史が概論として述べられる。国家間の日韓併合を日本聖公会と朝鮮聖公会の教会間の併合と読み替えた人々による誤った選択があったこと。大韓聖公会は工藤師を「朝鮮聖公会の主教」とは認めていない理由が韓国側の理解としてはっきり示されている。この歴史を踏まえて、初めて李天煥主教による日韓聖公会交流の開始（1967年）までの遮断が理解出来る。

第三章では解放後の日韓聖公会関係史を日本聖公会側の資料をもちいてBTプロジェクト、MRI委員会、聖職者短期研修、韓日聖公会宣教セミナー、青年ワークキャンプに至る道が検討、整理されている。

実はこの「日韓交流史」が生まれた背景には、方承憙氏の修士論文に資料提供を協力した日本側が触発されたという経緯があるので、このコラムでご紹介することとした。

会の過去と現在の姿に対する客観的な批判を通じて、この時代の両聖公会の歴史的責任を痛感した。次の事柄が提案また認識された。

1） 大韓聖公会は常設委員会を組織する。

2） 両聖公会は相互に宣教の方策や具体的活動の歩みの情報を交換し協働の業を見出す。

3） 「世に仕える教会」を韓国側は民主化と統一問題を通して確認し、日本側はその学びから教会の変革を促された・

4） 韓国側は民主化運動が神の望む社会正義実現のための具体的課題であることを確認した。

5） 日本側は天皇制が在日韓国朝鮮人、アイヌ部落差別を助長するとの共通の認識をした。

6） 社会正義の為聖書が正しく理解され、真の福音であると確認し、広く伝える責任と使命を確認した。

7） これらの成果と意義を教会・教区に広める。

8） 両聖公会の発展を願う。

東京教区からの参加者

藤井慶一執事（三光教会）、菊田かおり氏（練馬聖公会）、竹田眞主教

準備委員として

五十嵐正司司祭（練馬聖公会）、保坂久代氏（大森聖アグネス教会）、河野裕道司祭（管区総主事）

第4回 1990年9月26日－30日（ソウル）

主題　大韓聖公会百周年と宣教2世紀の課題

発題者　金鎮萬教授

主題講演への応答

山本眞司祭

発題　1　韓国聖公会の宣教課題としての南北統一（李在禎）

発題　2　日本聖公会の宣教課題としての在日韓国朝鮮人との協働―聖ガブリエル教会を中心として―（菊池邦杳）

聖書研究

1　イスラエルとユダの統一（孫奎泰）

2　真の平和の実現（崔永実）

合同報告書（要旨）

両聖公会が、過去100年間の大部分を教会共同体としての交わりなく過ごしてきた事実を省み、神の恵みによる両国聖公会のきずなが、今後

いかなる世俗的、政治的理由にも再び断絶されることがあってはならないと告白した。

両国の宣教課題はいずれも政治的社会的な問題でもあるが、両聖公会において「そのような問題は教会が取り扱うべき問題ではない」という従来の神学が強い影響力を持っていることを認識した。

両聖公会がそれぞれの宣教課題を遂行する過程は、教会が革新される過程でもある。

この為には政治的、社会的問題が教会の課題であると明確にする新しい教会の神学を深める必要がある。

教会革新の課題の実現と両聖公会の協働の要として聖ガブリエル教会の意義を再確認し、感謝して活動センター実現にさらに祈り働く決意をした。

両国の社会的、教会的現状の理解を一層深める為人事交流を推進する。

東京教区からの参加者

香山美土里（聖パトリック教会）、犬飼圭子（聖アンデレ教会）、速水昌子（阿佐谷聖ペテロ教会）、山崎ホシ子（練馬聖ガブリエル教会）、井原泰男司祭（聖路加国際病院）、五十嵐正司(練馬聖ガブリエル教会)

第5回　1993年8月13日－17日
（東京）

主題　「サリルム（生かし合い）のための分かち合いの実践」

主題講演者　（黄征箕）

副題講演「在日韓国・朝鮮人の今」
（関田寛雄）

聖ガブリエル教会
聖公会生野センター報告
（宮嶋眞・呉光現）

川崎ふれあい館について
（ペ・ジュンド）

靖国神社について　（西川重則）

聖書研究　（大町信也）

合同報告書（要旨）

第５回日韓聖公会宣教セミナーは大韓聖公会の管区成立、管区長主教就任式の行われた記念すべき年に日本聖公会センターを会場に、韓国側27名、日本側51名の参加を得て開催された。５日間生活をともに、講演、現場体験、分団討議、聖書研究をした。また8月15日の主日礼拝で「南北統一のための共同祈祷」を

ささげることが出来たのは大きな恵みであった。また東京、北関東、横浜教区の信徒宅に分散してその地域の方々と夕食をともにして、日韓の話し合いを深めたことが出来たことは大きな喜びとなった。

在日韓国朝鮮人多住地域の川崎市での現場体験や、日本聖公会の宣教課題の一つである靖国神社の今日の問題について学び、サリルム（生かし合い）とは相反する存在であることを学ぶことができた。教会に属する者一人一人が、それぞれの内外に働くこのような悪魔的な力に気づき、それとの戦いを進めること、またその戦いを教会の内外で分かち合うことが、宣教のみ業に参加すること、すなわち、サルリムのための分かち合いの実践であることを参加者は確認した。

1） 日韓聖公会宣教セミナーを今後も継続する。

2） 本セミナーで学んだことをそれぞれの場所で広く分かち合うよう努め、参加者間の交わりと分かち合いを、例えばニュースレターや私信などを通して、継続する。

3） それぞれの現場でサリルムの実現のために、殊にこれまでの5回にわたる日韓聖公会宣教セミナーで提起された、在日韓国・朝鮮人、南北統一、天皇制の課題を優先課題として取り組む。

4） サルリム実現のためそれぞれ毎日時間を決めて、特に平和のために、祈る。またそれぞれの関係機関に対し、両教会の特別な宣教課題を相互に祈ることができるため方策を立てるよう要請する。

5） 両聖公会の青年、女性、聖職等、各層間の交流を深めるよう努める。また各関係機関に対し、今後の両聖公会の関係について共通の方針を策定するよう要請する。

東京教区の参加者

植田栄基（阿佐谷聖ペテロ教会）、杣取賢一執事、八木正言聖職候補生

委員として参加

香山洋人聖職候補生、河野裕道司祭、斉藤菜月氏、前田良彦司祭、松平謙次氏、長谷川順伊氏、植田仁太郎司祭

（資料作成協力　日韓協働委員会 菊地邦杳氏）

日韓宣教セミナー以外の東京教区（東京、北関東、横浜三教区）の活動

1985年9月から「日韓聖公会の歴史に学ぶ」という講演会形式の活動が始まった。順を追ってどのようなプログラムであったかを以下に記す。

	テーマ 主催・共催	講師・通訳	開催年月日 備考	場所
第１回	韓国聖公会に学ぶ 日韓協働委員会	司祭井田泉	1985.9.1	聖パウロ教会 参加者 15 名
第２回	「隠された爪跡」 VTR 「関東大震災と朝鮮人虐殺」 委員会所有 VTR 主催・関東三教区共催日韓協働委員会	講師:姜徳相氏	1986.8.31	池袋聖公会 参加者 45 名
第３回	一人芝居 「身世打鈴」 日韓協働委員会主催・関東三教区共催	新屋英子氏	1987.9.6 参加者 120 名、整理券 500 円	目白聖公会
第４回	共に生きる夢を語る VTR 「生野わが町」・「ある手紙の問いかけ」 日韓協働委員会東京教区・横浜教区・北関東教区共同主催	李仁夏、金信浩、李相鎬（川崎）神農英邦各氏	1988.9.2 ～ 4 参加者 27 名、会費 10000 円 お話、証言、分かち合い。 在日韓国朝鮮人多住地区現場研修。 大韓聖公会から 2 神父参加。	2 泊 3 日 川崎ふれあい館 川崎会員会館
第５回	VTR 「ある手紙の問いかけ」、聖公会在日信徒の証言 VTR(RAIK)借用 日韓協働委員会・東京教区・横浜教区・北関東教区共同主催		1989.9.3 参加者 50 名、聖公会信徒三名	神田キリスト教会
第６回	1991 年問題について VTR 「再開ー平壌への遠い旅」 日韓協働委員会関東三教区共同主催	姜栄一牧師	1990.9.2	聖パウロ教会 参加者 15 名
第７回	VTR 「隠された爪跡」 チマ・チョゴリの日本人 委員会所有 VTR 日韓協働委員会関東三教区共同主催	金纓牧師	1991.9.16	志木聖母教会 参加者 55 名

第８回　一人芝居「身世打鈴」　新屋英子氏　1992.8.30　神田キリスト教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催　参加者 100 名、整理券 1000 円

第９回　第５回日韓聖公会宣教セミナーの日韓合同祈念式に合流
東京ビビンバクラブ演奏会　1993.8.15　神田キリスト教会
日韓協働委員会主催・関東三教区生野委会共催
昼食・パーテイー付き1000 円

第 10 回　三一独立運動を聴くー 75 年前の万歳運動とは
洪曼姫氏、通訳任大彬氏
聖公会生野センターの働きVTRとお話
呉光現氏　1994.2.27　目白聖公会
三教区生野委員会主催・北関東教区宣教部、協働委員会
東京教区生野キャンペーン・横浜教区生野センター友の会・日韓協働委員会
東京教区婦人会共催　参加者 120 名、整理券 1300 円
韓国料理コムタンクッパ、キムチ、オクスス茶付き

第 11 回　大阪・聖ガブリエル教会の開設者「張相準師の苦難と信仰」
宮嶋眞司祭　1994.8.28　横浜聖アンデレ教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催
参加者 62 名、整理券 300 円
食事キムチ丼提供

第 12 回　三一独立運動と堤岩里事件から学ぶわたしたちの信仰
姜信範牧師　通訳：任大彬氏、井田泉司祭
1995.3.5　立教小学校
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会、東京教区婦人会
参加者 110 名、整理券 500 円

第 13 回　関東大震災と関西大震災　朴邊山氏　1995.9.13　聖バルナバ教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催
参加者 48 名、整理券 300 円

第 14 回　一人芝居「身世打鈴」　宋富子氏
自分史と日韓の歴史のパネル展　1996.3.3　聖バルナバ教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催
参加者 72 名、
前売り800 円当日売 1000 円

第 15 回　生野からのウルリム　宇野徹司祭
スライド「生野センターこのごろ」　1996.9.8　目白聖公会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催
参加者 32 名、整理券 300 円

第16回　三・一独立運動日本人キリスト者の対応
歴史から学び、現在を見つめ、未来を展望する
李仁夏牧師　1997.3.9　市川聖マリヤ教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催　参加者70名、整理券300円

第17回　女として、在日として日本社会に生きる
女性として日本社会の差別を問いかけるー
辛淑玉氏　1997.9.7　神田キリスト教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催
参加者51名、整理券1000円
韓国料理ビビンパスープ、キムチ付

第18回　韓国の文化日本の文化　矢野百合子氏　1998.3.8　目白聖公会
関東三教区生野委員会・日韓協働委員会　参加者48名、会費300円

第19回　私が日本人に求めるもの ― 人はみんなマイノリティー（少数派）―
崔善愛氏　1998.9.15　池袋聖公会
主催・関東三教区、共催日韓協働委員会　参加者30名、
会費当日売400円前売り300円

第20回　梁石日、在日と文化を語る　梁石日氏　1999.2.28　目白聖公会
関東三教区主催日韓協働委員会共催　参加者32名、
整理券前売500円・当日600円

第21回　韓国社会を垣間見る ― ナヌメチップ（分かち合いの家）をとうして―
香山洋人執事　1999.9.12　牛込聖バルナバ教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催　参加者37名。
会費・当日400円前売り・300円

第22回　神の寄留の民の教会　金性済牧師　2000・3・12　神田キリスト教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催　参加者27名
会費・当日400円・前売り・300円

第23回　3・8・6世代が語る日韓の今日とあした ― 南北統一、女性、若者 ―
金フナ女史　2000・9・10　志木聖母教会
関東三教区生野委員会主催・日韓協働委員会共催　参加者35名
会費・当日400円・前売り・300円

東京ーソウル青年交流

1985年11月に第2回日韓聖公会宣教セミナーが大阪で開催された。東京教区から佐藤信康司祭、前田良彦司祭、長谷川正昭司祭、金順伊氏を派遣した。セミナーに参加していた金根祥神父、朴耕造神父との出会いがあり、MRI委員会がソウル教区との折衝し、宣教委員会、社会委員会、MRI委員会の協働企画として1986年8月18日ー24日までソウル教区の青年たちと江華島の聖アンナの家を会場に第1回東京ーソウル青年交流が実施された。報告書（日韓聖公会　東京ーソウル教区　青年交流協議会報告書　発行　日韓青年交流協議会参加者　B5版116頁）も作成され各教会に配布した。東京教区からの参加者は司祭前田良彦（東京諸聖徒教会）、司祭井田泉（聖公会神学院）、執事近藤幸平(聖マーガレット教会)、伝道師高瀬祐二（聖バルナバ教会）、加藤博道神学生、加藤俊彦神学生、石川高明氏（聖マーガレット教会）、香山洋人氏（三光教会）、菊田かおり氏（練馬聖公会）、波多野あき子氏（聖ルカ礼拝堂）、宮谷尚実氏（東京諸聖徒教会）、通訳矢野百合子氏。

主題講演

「平和のために働く人々は幸いである」　金根祥神父

アベルの血・ナボテの血・イエスの血ー平和と人権を考えるひとつの手がかりー　司祭　井田泉

韓国側発題

韓日交流の歴史的反省

分断・平和・統一

大韓聖公会青年運動の経過と反省

女性問題

日本側発題

日韓関係の歴史的反省

平和・人権の問題について

青年のつどいの活動と課題

女性問題

その後、1988年にもソウルで実施の予定で前田良彦司祭と香山洋人氏がソウルで担当者と協議をしたがソウルオリンピックのため、ソウルでの開催を中止し、東京で8月25日ー28日聖公会神学院を会場にして開催した。ソウル教区から朱成植（チュ　ソンシク）伝道師、金善玉（キム　ソノク）氏が参加。ソウルオリンピック問題で緊迫する韓国の状況や韓国の青年の状況などの報告を受けた。参加者は延べ22名。

1989年には東京・大阪・広島を会場にして、在日、被差別などをテーマにフィールドトリップを行い、東京ーソウル青年交流協議会としてそれぞれの教区のプログラムに参加する相互訪問になった。

1990年、7月ソウル教区青年連合会主催「農村活動」に伊藤葉子氏（練馬聖ガブリエル教会）、大井和明氏の2名を派遣した。また「生野研修」に東京教区から7名が参加。ソウル教区青年連合会から、金慈愛（キム　ジャエ）氏、徐延國（ソ　ジョング）氏、日本留学中の柳相準（ユ　サンジュン）氏が参加。

1991年8月ソウルでは光復関連プログラムに伊藤葉子氏（練馬聖ガブリエル）、城下彰氏（聖ヨハネ教会）、荒川賢珠氏（葛飾）を派遣した。また生野で行われた「生野研修」にソウル教区の青年、金ワンジュ氏（ソウル教区青年連合会会長）、文ヒエ氏（若い女性の会幹事）、柳相準氏が参加。聖ガブリエル教会の協力で日韓史、在日韓国朝鮮人の法的地位について学び、在日大韓基督教会全国青年協議会との交流を行い、今後の計画を協議し1週間の交流を終えた。

この後はそれぞれの教区の活動に参加したが、教区としての正式な活動は継続されていない。

韓国語教室の開催

大韓聖公会との出会いの中でコミュニケーションが難しいことが常に問題であった。そこで、東京教区MRI委員会では韓国語の学びをする計画を立てた。目白聖公会を会場に毎週1回行われた。途中、会場を浅草聖ヨハネ教会にしたりの変更はあったが、数年間継続した。また韓国語教室のメンバーが訪韓する際は援助をした。現在、東京聖三一教会で韓国語教室が行われている。

日韓聖公会青年交流キャンプ

1993年で日韓セミナーは終了したため、日本聖公会は個別的な課題で交流を計ることにした。日韓聖公会青年交流キャンプが実施されることとなった。1994年に計画されていたキャンプは中止となっ

たが、1995年に第1回が開催され阪神・淡路大震災の復興のために神戸を中心として日韓聖公会青年交流キャンプ（1995年7月20日ー31日が行われた。このキャンプには日本全国からの参加者を得て行われたが、東京教区からの参加者がない場合でも資金援助の形で、10万円をささげている。2000年には東京教区からの参加者があった。この日韓聖公会青年交流キャンプに東京教区の青年が参加することは出会いと交流の場が広がることが期待されるので、今後とも参加を促したい。2001年度は横浜・川崎で在日の問題を共有するキャンプとなる予定である。

21世紀宣教大会について———

司祭　大畑喜道

それは極寒のソウルの町でした。まるで冷凍庫の中に放置されているような感じでした。ソウル—東京21世紀宣教大会の準備のために、日韓交流プロジェクトの長谷川司祭、佐々木庸司祭、教役者会の幹事長だった高橋顕司祭、通訳のために長谷川順伊夫人と聖職養成委員長として私の五人は、1997年1月22日訪韓しました。ソウル教区の国際交流委員会のメンバーとの話し合いは、ソウル教区事務所で缶詰めで丸一日に及びました。印象として終始、ソウル教区サイドの熱意に押され気味だったように思います。

このプログラムの開催には足掛け三年の月日がかかっていました。聖職者同士が、単なる教役者の交流を深めると言うのではなく、より具体的に双方の教会の抱えている課題や現実を見詰め直し、互いにフィードバックしあえるような研修会を行いたい。1995年、日韓交流プロジェクトとソウル教区国際交流委員会との間で、研修会開催の検討に合意があり、1996年にもソウル教区サイドから委員が東京教区に来日し協議を重ねてきていました。しかしこの話は教区の教役者の共通理解とはなっていませんでした。それゆえに教役者会や聖職養成委員会にも呼びかけ、教区全体の教役者の意識の高揚をはかる必要がありました。日韓交流プロジェクトからの呼びかけに、聖職養成委員会も教役者の研修の機会としての必要性は感じ、協力することになりましたが、全体としての教役者の関心は非常に薄かったように思います。良い悪いを別としてソウル教区が教役者の研修会を開催するとほぼ全員出席となるという話を聞いていた私には、聖職養成委員会主催の研修会の教役者の参加度のことを考えると一番の気掛かりは東京サイドからの参加者の数の問題でした。もし仮にソウル教区の参加者と東京教区の参加者の数の大きな隔たりが生じた場合、大問題に発展しかねないのではないか。また本当に自分達の課題や現実を把握しているだろうか。そ

の準備のために半年もなくて大丈夫だろうか。次々に不安が出てくるのです。場所は?費用の概算は?日程は?プログラムの枠組みは?…次々と決まっていきます。ある意味ではすぐに決定できることです。主題は「教会・未来・挑戦」と決まりました。さてこれをどう料理するのか。話し合いは続きました。私たちは三つの柱を立てることにしました。両教区の教会形成に関しての分かち合い、社会宣教に関する分かち合い、そして今後の協働課題の明確化。そんな中で東京教区としては一つの提案をしました。それは聖職の研修会ということではなく、両教区の宣教のための研修会であると把えること。そのために双方から信徒の参加も促したいこと。従って今回の会はソウル―東京聖職合同研究会から、21世紀宣教大会とすること。近くであり、良く似たような教区でありながら教役者と信徒が共に話し合い課題を探そうと言う提案には、ソウル教区にも戸惑いがあったように思います。現在の東京教区では、信徒と共に話し合い、課題を見つけていくと言うことなどは当たり前になっています。ソウルでは少し違うのです。これは大きな挑戦でもあったように思います。

そんな準備を行いながら第81（定期）教区会に宣教大会プロジェクトチームの設置の議案が提出されました。両教区の友好関係を深めるため、同じ首都圏教区としての共通の課題を担い合うため、未来の宣教のパートナーシップを築くため。この目的の遂行のために予算180万円の計上を行いました。この会の主旨は理解するものの、本当にこのようものが今の東京教区に必要なのかどうか、一部の人のお祭り騒ぎで終わってしまうのではないか。厳しい反対意見も出されました。賛否は同数となり、最後に議長の採決で可決されるというきわどいものでした。

1997年6月16日から19日まで、宣教大会はソウル郊外楊平（ヤンピョン）韓化コンドミニアムを会場に東京教区は竹田主教以下聖職16名、信徒11名、通訳3名の合計30名。ソウル教区からは丁主教以下聖職27名、修道女3名、信徒12名、スタッフ3名の合計45名。双方合わせて75名という大会が開催された。竹田主教と丁主教による主題講演。竹田主教は日本の社会の中でいかに小さくされた者と出会うかが難しい社会であること、しかし教会の根本はここにあるので諦めること無く韓国の方々の助けを借りながらどう出会うかを学んでいこうと課題が話さ

れました。丁主教はより具体的にソウルの宣教の現状と課題を話された。特別講演として聖公会大学の金鎮萬教授が「韓国と日本における聖公会の未来」というテーマで話された。日韓だけに留まらず、アジア全体の中で苦しむ人、小さくされた人の側に立って、聖書のみ言葉に生かされつつ、互いに同労者として宣教と平和のために積極的に学び合う必要があるとまとめられた。

発題は双方の教区から行われ、教会成長に関しては「教会における女性の役割とリーダーシップ（神崎和子氏・以下括弧内は発題者）」「夫婦の聖書研究（朴耕造神父）」「霧雨伝道の実践（朱成植神父）」「癒しのわざ牧会（高英敦神父）」社会宣教に関しては「東京教区の宣教方針（岡野峻氏）」「ぶどうのいえについて（大畑喜道司祭）」「カパティランの活動（横山美樹氏）」「青少年安らぎの場を通して（宋日用神父）」「分かち合いの家を通しての都市貧民宣教（金弘一神父）」「外国人労働者への宣教（李貞浩神父）」がそれぞれ行い、その後、小グループに分かれて分科会。最終日には共同報告書（次ページ）作成にまで至った。

講演も発題もすべて事前に両国語に訳され配付されていたことは非常に助かった。しかし一方で日本側参加者から指摘があったように、コミュニケーションの第一歩である言語をいつまでも学ばない日本の姿勢に反省すべきこともあったように思う。香山司祭のように韓国へ留学される方が増えてくると日韓の新しい歩みに大いに役立つものと考えられる。共同報告でも確認したように両教区は東アジアを視野に入れて宣教の協働を推進する必要性がある。そのためにより深い宣教の共同研究が不可欠になる。外国人労働者問題でも、女性と男性の課題についても、青少年問題、聖書研究、礼拝音楽、教育、その他様々な分野での交流も必要になってくる。この宣教大会では様々な課題が明確になったように思う。少しづつその課題に取り組みつつあるが、教区の中でこの宣教大会での成果が風化されないようにしていかなければならない。その責任が参加者の一人一人にあることを再確認している。教区では1998年3月にソウル－東京21世紀宣教大会報告が出されている。多くの方々が一読されるならば幸いである。

共同報告書

日本聖公会東京教区と大韓聖公会ソウル教区は、1997年6月16日から19日にわたり、韓国京畿道楊平（キョンギドゥヤンピョン）において、「教会・未来・挑戦」の主題のもとに、「ソウル・東京21世紀宣教大会」を東京教区とソウル教区の信徒19名、聖職42名および修道者3名が参加する中で開催した。両教区の主教による主題講演、教会形成、社会宣教に関する発題、および金鎭萬（キムジンマン）教授の特別講演を受け、グループ討議を行った。私たちはこの中で、両教区のおかれた状況の中から異なるものと共通のものを見出した。今回の大会を通して私たちは福音宣教の推進のために以下の共同報告をする。

Ⅰ　教会形成に関して

1. 女性を初めとする信徒の働きが教会形成にとって極めて重要であり、今後女性信徒同士の交流を、促進することを確認した。東京教区では女性を司祭に按手するための働きが優先課題の一つであるとの報告があった。
2. ソウル教区側の発題を通じて、牧会と福音伝道を熱意と多様な方法をもって教会形成のために推進して行かなければならないことを確認した。

Ⅱ　社会宣教に関して

東京教区の宣教方針による「滞日・在日フィリピン人宣教奉仕プロジェクト」と、ソウル教区の南揚州（ナミヤンジュ）教会の外国人労働者奉仕活動および「分かち合いの家」などを通じての地域社会活動が重要な宣教課題であることを確認した。

Ⅲ 今後の協働課題

現場交流を推進する。

（1）外国人労働者への宣教活動における実務者の交流。

（2）女性と男性の信徒の宣教活動におけるリーダーシップの開発。

（3）教役者相互の長期派遣を検討する。

（4）分野別の課題を担っている人同士の交流を推進する。例えば、教会音楽、聖書研究、青少年問題、教育など。

Ⅳ 東アジアに対する両教区の協働に関して

両教区は東アジアを視野に入れた協働が必要であることを確認した。特に、私たちは飢餓状態にある北朝鮮の食料問題について、緊急支援活動の必要性を認識した。

私たちは以上の共同報告が東京教区の宣教課題である「最も小さいもののための宣教」と、ソウル教区の「あなたの垣根を取払い主のからだを広げなさい」は宣教方針に適ったものであることを確信し、私たちをここに集めてくださった神さまの恵みに感謝し以上の共同報告をするものである。

1997年6月19日

ソウル・東京21世紀宣教大会参加者一同

韓国には心があった———

―立教中学バスケットボール部親善訪韓から―

保田　孝

立教中学バスケット部は1974年3月22日～29日の一週間、韓国を訪問し、親善試合を通してソウルの中学校との交流を図った。これは当時、歴史科の教諭であった保田孝先生の御尽力によるものである。立教中学ではこのために周到な準備を重ね、かつての日本の植民地支配の歴史から外国との交流に必要な心構えなどを事前に生徒たちに学習させた。

ソウルの受入れ側の中心として色々御配慮して頂いたのが、李天煥主教であった。中学生という感受性の強い時期に韓国との交流を経験した生徒たちは現在、日本社会の中堅として様々な分野で働いていることであろうが、この時の経験は大きな影響を与えたものと思われる。

ここでは、保田孝先生が立教学院チャペルニュースに報告としてお書きになったものを再録させて頂いた。

私は今、興奮と感激の連続の中に幕を閉じた七泊八日の旅を静かに想い返し、あらためてその余韻の中に酔いしれています。

善意に満ちた人と人との出会いの素晴らしさ――純真な両国中学生がプレーを通して力いっぱいぶつかり合い、そして言語の不自由さを克服して懸命に友好を深めるあの微笑ましい情景は、神の愛によってのみ創造された感動的な一大絵巻でした。

それにつけても李主教様はじめ教会の方々、学校の関係者、韓国立教会――いいえ、何万人という韓国の方々が私たちに示して下さったあの心からの歓迎ぶりは、私の期待の遥か上を行くものであり感受性の鋭い中学生の心もどんなにかゆさぶられたことでしょう。

考えてみれば、昨年来の異常な狂乱物価をはじめ幾多の障害から、ともすれば挫折しがちだった私を強く支えて下さったのは、李主教をはじめ多くの方々の御親切であり、御父兄の激励の賜ものでした。この計画実現のために真正面から取りくんで下さった皆様方の善意に、私は心から感謝し――それこそ私の乏しい韓国語で申せば　ラダニ　カムサ　ハム　ニダ――厚く御礼申し上げます。

今この大任を果たして私はしみじみと立教に勤めさせていただく幸福感と満足感に浸っています

昨日も今日も、そして恐らく明日も韓国の中学生諸君からペンフレンドとしての便りが届き、それを囲んで談笑する生徒たちの姿をみるにつけ、彼らの新しい感覚で両国間の歴史の一ページが開かれることを信じています。

私は昨年来、準備のため七回韓国を訪問しましたが、年間五十万人といわれる『醜い日本人』の傍若無人ぶりを目の当りにして、韓国の方々の心に日本人というものがどんな映像を残しているか、私なりに胸を痛めて参りました。確かに韓国に対する日本の投資額はアメリカを抜いてトップに立ったでしょうが、多くの韓国人には、かつての銃剣による植民地支配に代わる円による経済侵略の兆しだとしか受けとめられていない事実も承知しています。

そこで生徒たちには出発前の何回かのオリエンテーションを通じ、ソウル大学教授の談話を引用して「これだけは絶対胸に叩き込んでおけ」と命じたものです。『日韓双方とも前もって国内で処理しておかねばならない問題を、未解決のままに国交回復を急いだことが不幸のタネになっている。日本人は簡単に清算事務は済んだと考えたのに反して、韓国人の心の中では何も終っていないという不満が、年を追ってふくれ上がっている。

韓国内には、終戦のときの債権をそのまま日韓両政府に対して講求権があると主張する人たち十四万人で組織する団体さえある。

広島・長崎で被爆し、いまもなお原爆症の苦しみにあえいでいる人も多い。さらに戦時中に日本当局によって強制連行されたサハリンで、望郷の思いを捨てず帰国実現の日を待っている韓国人の問題もある。

古い傷痕が治りきらないのに、さらにその傷をツメでひっかいているのが恥知

らずの観光客だ。悲劇的なのは、そのことに日本人自身が気づいていないことだ』

――私は生徒たちに「君たち一人一人は立派な大使だ。心と心の触れ合う日韓関係は外務省ペースで何回繰り返されても、閣僚会議反対の声は消えるものではない。君たちの最高のおみやげは、韓国の心を正しくつかんでくることだ。」と強調してきました。

そして今、日本へ帰ってきた生徒たちは、こんな感想を洩らしています。いか

『知らない』ことは恐ろしい　－「慰安婦問題」は糾弾ではない－

“知らない”と言うのは恐ろしいことです。もう十数年前のことです。NTVが日韓の大学生を対象に「日帝支配36年」と題して終戦特別番組を組んだことがあります。

映像の中心が、日清戦争直後（1895年）日本が事もあろうに公使を暗躍させて、朝鮮の王妃を宮廷内で焼きという外交史上例をみない「閔妃暗殺事件」になった時です。――「知らなかった」「驚いた」「授業でも聞いたこともない。」を連発する大学生を前に、突然、目を真っ赤に泣き腫らした女子留学生の一人が、「あなた方はいつも『知らなかった』を繰り返すだけだ。過去のきびしい歴史を克服してこそ新しい友好も生まれるが『知らない』の連発は依然として韓国蔑視が基調となっていることを物語っている。」と叫びました。

私は教師の一人として、鋭く詰問される日本の学生を気の毒に思いました。責任を感じました。

「ナチス時代」という過去をもつドイツの首脳は「われわれドイツ全員が過去に対する責任を負わされている。過去に目を閉ざすものは現在にも盲目となる」という趣旨から、独自にしぶとく戦争責任を追及しました。しかし、日本の指導層は「反省しなければならない過去はない」という認識か、それとも、たとえあったとしても『過去は水に流す』をよしとする国民性のためすか「恥」の部分は教科書からも大幅にカットしたのですから。――彼らは本当に知らないのです。

もちろん「こんなに酷いことを」という驚きが「申しわけなさ」に繋がり、必要以上に自虐的になることは自戒しなければなりませんが、「恥」の部分があれば、私たち日本人は正しくそれを知らねばなりません。

先日も新聞の投書欄に「過去の糾弾は未来をつくらぬ」という意見が載っていました。「韓国から突然つきつけられた感じがする過去の慰安婦問題と、国家としての補償請求主張は現在とこれからの社会のために努力している自分にとっては、一方的な『心理的侵略』に映る。日韓の若い世代を再び過去の関係に引き戻す必要はない筈。過去の歴史に縛られるよりも、今後の歴史をつくっていくことに力を傾けたい。」こうした意向でした。

私が強烈に「慰安婦問題」の深刻さを叩き込まれたのは、1975年夏の訪韓でした。薄暗い喫茶店の一隅で肩を落としたK氏が涙ながらに話してくれた言葉を忘れることはできません。

「今まで連日、一緒に旅をしてきたのですから、

にも少年らしい素朴たものかもしれませんが、心ない観光客には味わうことのできない韓国の心の本質を、いくらかでもつかんで来てくれたと嬉しく思っています。

「最初の中は正直いって麦ごはんは食べにくかったけれど、日を追うにつれて慣れてきました。水・土の二日間は昼食に全然米を食べられないときいて二度びっくり。日本では米が余って、一時は古米を豚のエサにしたというのにどうして大人たちは助け合おうとしないのだろうか。僕は日本人として恥ずかしい。今

今日もあのデパートをご案内しなければならないことは十分承知しています。でも、どうしてもあのデパートには入れないのです。戦時中、あの二階には女子挺身隊の検査場でした。当時17歳の親戚の娘が駆り出された日の、あの切ない悲鳴が耳について離れないんです。生きているのやら死んでいるのやら。南方に送られたと聞きますが、貨物扱いで乗船名簿もなく探す手立てさえありません。もっとも、親元には帰ってこられないでしょうが…。」―― 帰国して早速読んだ「天皇の軍隊と朝鮮人慰安婦」と題する本は、かなり鋭く本質を抉る論調でしたが、私は敢えて中学生の授業にもその一端を話してきました。

どう考えても、従軍慰安婦問題は「突然、突きつけられた」問題ではありません。仮に今まで広く知られていなかったとすれば、それは日本人側の問題です。戦後に果たすべき責任を果たさず、問題を放置し続け、最近、証拠が出てやっと「軍の関与」を認めました。

私たち自身がこうした「曖昧さ」から抜け出して、過去の歴史にきびしく目を据え、その教訓に学ぶという謙虚な姿勢を持たない限り、アジアの人々からそれこそ「心理的侵略」と言われかねません。

1981年、バスケット部の再度の親善訪韓を、当時の須之部量三大使は心から歓待してくださいました。レセプションの挨拶は流暢なハングマルを駆使される程の韓国通です。「心ない一部の日本人観光客の過去の歴史を無視した傍若無人な振る舞いに、韓国人は戦時中の日本人の姿をだぶらせるんです。」の言葉が印象に残ります。

最近、須之部氏の徒然草を引用しての韓国観に感銘を受けました。「冬が去って春が来るのでなく、冬はおのずから春になるのだ。古い葉がおちて芽が出るのではなく、下から新しい芽が萠してくるからこそ古い葉が落ちるのだ。」の一節です。

――『韓国人は新しい芽生えを感じていない。だからこそ、古い葉が落ちないことを日本人は知らねばならない。』といった論旨です。

―― 外務省顧問までされた須之部氏も、今では一私立大学の教授。「慰安婦問題」にしても、今こそ『決着済み』『訴訟の推移』を繰り返す官僚臭を捨てて、国民の合意が得られる斬新な発想をこそ、望んで止みません。

1992.4（保田　孝　元立教中学教員、
練馬聖ガブリエル教会信徒）

では、わが家も麦ごはんにしました。」

「今の日本は物質的に余りにも贅沢過ぎる。生まれてこのかた、なに不自由なく育ってきましたがもう一度『自由』というものを考えなおしてみるきっかけができました。」

「大韓聖公会の礼拝に出席したとき、言葉は判らなかったけどなんとなく気持が落ち着きました。それに神さまの前ではみんな平等――国籍なんか無意味だとつくづく感じました。」

「経済的にはまだまだだし、貧富の差が大きいのも予想外でした。でも道路をはじめ街にゴミがなく実にきれいで、日本人が公徳心に欠けていることを反省させられました。」

「ソウルでカービン銃をかまえた兵隊が、きびしい表情で歩哨に立っているのが印象的でした。同じ民族なのに互いに憎しみ合わねばならない気持は、僕たちにはよくわからない。」

「韓国の人はよく働きますね。それに公害とは縁遠く、済州島で棒で叩きながら川で洗たくをしていたけど実にのどかでよかった。空気は澄み切っているし、自然がそのまま生きている。」

「至るところで豊臣秀吉、加藤清正、小西行長といった昔の武将の悪業ぶりをきかされて、日本人としていたたまれない想いでした」

「韓国の中学生は実に質素で頭はみんな丸坊主、黒の学生服一色だけど、彼らから規律正しさを学びました。それにゲームのとき、ボールに対する執着心のものすごさ、動きの鋭さ。よい経験でした」

「済州島で韓国の中学生たちがみんたで立教の校歌を歌ってくれゲームが終って学校を去るとき、何百メートルもの列をつくって、一人一人が有難う、さよなら、お元気で…と日本語で握手されたとき、カムサハムニダ…と固く手を握り合ったけど、思わず涙が出そうになっちゃった」。

――昨夜も同道のFチャプレンと楽しかった旅を回想しながら語り合ったものです。「韓国には我々が見失なっていた心があった。今の日本には悲しいかな金しかない。」と。

旅行中、私は各地で多くの方々からある時は肩を叩かれ、ある時は握手を求められ、こう言われたものです。「先生、余り過去のことにこだわりなさんな。確かに私たちは戦時中、つまり植民地時代はそれはもう口では言えたい苦労をしました。従って、四十才以上の人の中

にはきっと反日感情を持っている人もいるでしょうが、若い中学生諸君は全くそういった経験を持たないんだから、堂々と胸を張っておやりなさい。新しい両国間の交わりは彼らの手にゆだねられているんですぞ。」

つくづく有難いことだと思いました。私は「過去は過去として水に流して…という考えは、少なくとも我々日本人が抱いてはならない。韓国の方々の気持を十分考慮して、決して甘えてはならない」と指示してきました。

そして曲りなりにも韓国併合下三十余年の植民地政策、三一運動、関東大震災などを例に、帝国主義下の過去の日本が、植民地朝鮮をどのように見、そして接してきたか―悲惨と残酷の一語に尽きる歴史の一端を教えてきました。韓国の方々は「中学生になにもそこまで…」。とおっしゃって下さるかもしれません。確かに中学生には直接関係のないことですからその必要はなかったかもしれません。しかし、今日の日本の経済成長が朝鮮戦争を踏み台に不況を脱し、急速に発展してきた事実を考えるとき、その中でヌクヌクと育ってきた彼らも、あながち無関係とは言い切れぬ想いがしてくるのです。

過去を超越した韓国の方々の善意に包まれて心あたたまる旅を重ねながらも、私には何回となく一つの映像が眼前にちらついて離れませんでした。それは、数か月程前、日本でみたTVなのです。

八十才も過ぎたと思える老婆が、三・一運動で受けた傷痕を画面いっぱいに突き出し、怒りにふるえ、涙ながらに韓国語で激しく抗議している姿です。

私はつくづく、日本人は歴史の重みを背負っていかねばならない、事実は事実として生きているのだということを実感として感じています。日本人は果たして、ソウルの街頭にどっしり腰を据えた銅像――李舜臣、安重根、孫乗熙らが、自分たちとどんな関わりを持っているかを承知しているのでしょうか。

その点、生徒たちは不十分ながらも過ぎ去った過去の歴史を一応ふまえながら、彼らなりに精一杯、新しい交流を求めたところに意味があったと思います。

いつでしたか、私は親しい韓国人から、ふと聞かれたことがあります。「前大統領李承晩の名をご存じでしょうが…」と。私の頭には、独立以来特に李承晩ラインの名で知られる激しい反日政策が浮かびました。熱心なクリスチャンなのに…と訝る私も、彼の次の一言を聞いて

絶句したものです。「李承晩が戦時中、日本の官憲の拷問で、両手の指のツメをすべて引きはがされたことを御存知ですか。」

李承晩大統領といえば、彼の出身校培材中学の歓迎ぶりにも感激しました。九十年の伝統を誇るエリート校培材については、植民地時代から日本の統治に徹底的に反抗し、年配の先生方も決して日本語を口にしないと聞いていました。

事実、現校長は聖公会神学校や立教大学に学ばれた経歴をもちながらも、何回お会いしても打合せはすべて韓国語と英語で終始しておられました。それがどうでしょう――いざ本番となれば校長もチャプレンもみんな流暢な日本語の連続で、その鮮やかな変身ぶりに舌を巻きながらも、細かい心づかいに頭が下がる想いでした。そして校長自ら言ってくれました。「どうです。立教と兄弟校になりましようよ。」

そう言えば、韓国指折りの私立校延世大学でも、三十万坪という広大な構内を総長が先頭にバスで案内して下さり、更にお国ぶり豊かなお茶の会まで開いて下さいました。「今、この大学で六十名の日本人学生が勉強していますが、こんな可愛らしい中学生を迎えたのは初めてのことです。去年は、立教大学の佃総長がこられましたが、どうかこれを縁に立教大学と本学とが……。」と、ここでも友好の絆が強調されました。

一方、私たちの主催したささやかなレセプションには、文部大臣まで列席して下さいましたが、席上、韓国立教会の錚々たる方々から、昔の大学生活を懐かしむ声と共に、マンモス化に伴なって建学の精神が薄らいでいくのではないかという厳しい批判も受けねばなりませんでした。

さて、今でこそ話せますが、信一、培材両校の強豪ぶりは、東京韓国学園を通して、早くから耳にしておりましたし、「立教がソウルへ行っても、二桁の点を入れたら大したものだ。」とまで言われたものです。それだけにコーチ連中も、余りにも一方的な惨敗にたったらと心を痛めておりましたのに、培材とは34－33の一点差で敗れたものの、信一とは33－33で引き分け、済州島を含めて通算二勝一敗一引分けの戦績は大出来でした。

もちろん、今回の訪韓はあくまで友好親善を主体としたもので、勝敗そのものだけが中心ではありません。しかし勝敗

を度外視し、どうでもよいという気持でプレーすることは、かえって相手に対して非礼です。お互いのプレーに対して賞讃と尊敬があってこそ、国際親善の意が深められたと思います。千余名の観衆を収容したどのゲームでも、申し合わせたように「真剣にプレーしている中学生は実に美しい。」という声が高かったのは幸せでした。

――日本人がただ単に、日本のためにのみ生きてきた時代はもう終ったと思います。世界は紆余曲折の道をたどりながらも、国家中心から人類連帯の方向を歩んでいると思うのです。その中にあって、一人日本人だけがエコノミックアニマルを脱しないならば、人類の中にあって世界諸国から爪はじきされることは明白です。

聖書は「隣り人を愛せ」と教えています。

ところが、日本人はアジアの問題を語るとき、とかく朝鮮問題を素通りし、目をつぶりたがるのは何故たのでしょうか。日本人の過去の伝統的朝鮮観の中には、朝鮮は後進落伍の国であり、外国依存の国だとする考えが根強く、そのことが日本の朝鮮支配を肯定する大きな支柱になっていたと思うのです。私たちは、こうした朝鮮像を正し、その中から日本人の朝鮮観を改めていかねばなりますまい。

朝鮮を「近くて遠い国」という人がいますが、私たち日本人が「近いのに遠くしている」事実、今までの歴史は「日本のための朝鮮」に終始していたことを深く自省すべきだと思います。

韓国は確かに外国です。しかし同じ外国とはいえ、日本人にとって深く歴史の内面に喰い込んでいる韓国へ、中学生たちが初の外国旅行を経験したことに意味があると信じています。

――「韓国には心があった。」自由の学府立教なればこそ実現したこの「一粒の麦」の営みが、日韓両国を含めて彼ら中学生の上に「朽ちない冠」として生き続けてほしいと念願して止みません。

（立教中学校教諭）

日・韓のはざまに立ちて――

今村秀子

1991年3月17日、横浜聖アンデレ教会婦人会例会に招かれて講演された時の今村秀子さんの原稿をもとに、原文を尊重して、言い回しを修正したものです。

〈日本聖公会95宣教協議会報告から転載〉

皆様の勉強会で白分勝手にお話をさせていただきますが、在日韓国・朝鮮人の方々の側に身を置いて、日本で“差別”の中に生きている現状を分かっていただけたら、この“差別”の壁さえなかったら、全て解決される問題ばかりでございます。実は“聖公会”からお座敷がかかったのは、これが初めてでございます。今まではよそ様の教会ばかりで、いつも第三者の立場で、意見を申し上げて参りました。この度は内々の集まりですし、これが最初で最期かとも思われますので、誠におこがましく気が引けますが、“ありのままの体験”をお話させていただきたいと存じます。

さて、先頃、私が在籍している教会で“差別”についての勉強会のお誘いをいたしたところ、婦人会の方が、「うちの教会ではそういうことに関心がありませんので」と、電話はガチャンと切れました。当日は司祭様お一人だけご出席下さって、大変良いアドバイスをいただきましたが。最近はちょくちょくこういう勉強会が始められたようで、“時代の流れ”に明るい希望を感じております。先日、ある“差別問題”の集会に参加なさったお一人のオモニさん（お母さん）がちょっと不思議そうに、「“差別発言”をした特定の人ばかりを責めて、まるで自分たちには“差別”意識が無いような口ぶりなのはどうかと思う」とおっしやいました。私どもクリスチャンは、意識して“差別”する人はいませんけれど、無意識から、あるいは知らずに相手

にどれほど大きなショックを与えておりますことか。今も日本社会に根強く残っております“民族差別”の実態について述べさせていただき、共に考えたいと存じます。

「憎しみは人を傷つけるが、“差別”は人を殺す」というほど“差別”された側のショックは大きいものです。（足を）踏んだことはあっても踏まれた経験の無い私たちには、ピンと来ないかとも思われますが、現実に自殺者が後を絶たず、見えない所で様々な悲劇が繰り返されているのでございます。

全く運命的としか言いようのないことが次々に起こり、十七歳の時から八二歳の今日までの六五年間、実に思いがけない体験の連続でございました。そして、韓国の方々のお知り合いも初めのお一人から次々と紹介され、今では百人をはるかに越えました。その中でお隣の韓国・朝鮮の方々から“人間の真実のあり方”を大変に教えられ、また温められ支えられて参りました。今、何にも増してありがたく、感謝いたす次第でございます。

まず、老人を大切にすることでは、韓国はどの国にも引けを取らないと思います。また韓国には、“本音”と“建て前”というものがありません。いわば、“本音”だけですから、おおらかで、さっぱりしていて、日本人の“建て前”からの言葉には、よく不思議そうに首を傾けます。お世辞とか、社交辞令とかは皆無で、他者への思いやりの心からの何とも言えないユーモアがあり、これは生来のものかどうか…。「私たちは、長い歴史の中で余りにも苦労し詰めでしたから、せめてこういう所に慰めを見出したのでは」と。ですから、韓国の方々の生きがいは“他者との交わり”だけとも言われています。まずは、何を置いても“友情”が優先いたします。仕事や職場は、二の次、三の次で、身内や友達のためには、休みを取ってでも即座に駆けつけます。「だから、うちの国は発展が遅れたのです」と苦笑する方もいらっしゃいました。韓国の方のお宅を訪問いたしますと、必ずと言って良いほど、炊きたてのご飯のお膳が出て参りますので、「奥様は大変だな」といつも思います。また、お土産を一杯いただきますので、「どうして、こんなに持ちきれないほどに…」と少々困り果てて、親しい韓国の方に申しましたら、言下に「ただ上げたいから、上げるだけです」

とケロリと言ってのけられ、この何気ない言葉にハッと打たれ、何か私たちが忘れてしまった、“ 心の原点 ”に触れた思いがいたしました。

何年か前のこと。婦人たちだけの小さな集まりの席で、「皆さんは、韓国や朝鮮の方々について、どのようなイメージを持っていらっしゃいますか」とまず、問いかけてみました。とたんに全員黙ってうつ向いてしまい、しばらくして私の方から極自然に、「私は、尊敬しています」とありのままを申しましたら、「ウォー!」という驚きともつかない声が一斉に響きわたり、私の方がよほど驚いてしまいました。私は、ここで、韓国・朝鮮の歴史を語るつもりはございませんけれど…。戦前には“ 語れば、留置場行き ”“ 書けば、発禁（発売禁止）”と決まっておりましたから、日本人は何も分かりませんでした。今は知ろうと思えば、簡単に知ることができますが、それでもなお、お偉い方が“ とんでもない発言 ”をなさいますのは、やはり“ 無関心 ”“ 無意識の差別 ”からかと思われ、誠に“ 差別 ”の根深い恐ろしさを感じるのでございます。

ある本に「友情に欠かせない最も大切なものは、『敬』の心である。殊に、日韓関係には、これが無ければ…」と書かれているのを読み、とてもそれどころか“ 同等も難しいのに ”と、がっかりいたしました。

私は、女学校卒業の十七歳まで、（お隣り）朝鮮については、善かれ悪しかれ、全然知りませんでした。大正末期、私は田舎から東京の学校に出て参り、母の実家からの通学の予定でしたが、入学式も済んでから、誰もが嫌がる“ 学生寮 ”にふと入ってみたくなり、一人割り込みました。その寮は、一部屋に数人ずつで、お隣の部屋から“ たどたどしい日本語 ”が聞こえて参りました。後で廊下でお会いした時、“ チマ・チョゴリ ”姿の清楚な方と知りましたが、何か素朴な温かいものが伝わって来て大変好感を持ちました。また、別の寮にこの方のお友達がいらっしゃって、ちょっとユーモラスな“ 姐御肌 ”の方で、私たち三人はすっかり仲良しになりました。お二人とも名前は、李（イ）さんでした。ある日、この“ 姐御 ”の李さんが人気の無い校庭の片隅で、当時の日本と朝鮮との関係について淡々と語られたのです。今でこそ心ある人は知っていることですが、その頃は勿

論、一般の日本人には全く知らされていないことばかりで、本当にびっくりしてしまい思わず、「なぜ、あなた方はどうして“独立運動”しないの」といきまいて申しました。その時、友はしょんぼりと、「私たちは経済力が無いから…」と洩らしました。これはずっと後になって分かったことですが、この“日韓併合”は、世界史に類を見ない“完全＜永久＞併合”というもので、あらゆる権利を剥奪したものです。ですから、お金の無いのも無理ありません。

さて、お隣韓国・朝鮮について考えてみますと、太古の時代から既に日本列島に渡来していて、私たちは色々“物心両面”にわたって大陸文化のお蔭を被っております。近くは“朝鮮通信使”の来日。教えを乞うため遠路を厭わず、日本各地から多くの者が駆けつけたと言います。ところが、明治になると、急に日本は欧米に目を向けるようになりました。欧米列強は多くの植民地を持ち発展していて、日本も遅まきながら…という次第でしたから、“日韓併合条約”は急激なあせりの中で締結されました。その植民地政策・統治は、特にひどくて厳しいものとなったようです。こういう歴史の表向きの理由は、当時の清国、ロシアの圧力からの保護という名目で、韓国・朝鮮の国民を日本の天皇の臣民として「一視同仁」日本人と同等の地位を与えるというものですから、何も知らない多くの日本人は、良いことをしている位に思っていたはずでございます。

李さんと出会ってから数年後、全く思いがけずびっくりしましたが、父の朝鮮転勤をきっかけに、いよいよ実地体験することになりました。

下関から関釜連絡船に乗船する時のことでした。岸壁にぴったりと横付けされた大きな船体の船底に向かって、白衣の行列が延々と続いていました。そこに一人の日本人の男が太い棒を持って、一人一人をその棒で叩き込んでいるのでした。私たち日本人は、悠々と高いデッキを昇りましたが、ふと下を見ると、背中に大きな包みを背負った一人のおばあさんが叩き込まれ、丸くなって転んでいるところでございました。思わず「アッ!」と小さな叫び声を上げました。駆け寄って、起こして上げたくてもどうすることもできませんでした。その時、咄嗟に出たのは「李さん、ごめんなさい」とただそれだけが精一杯の

言葉でした。この時から、私のたった一人の“日韓巡礼の旅”が始まるのですが、この関釜連絡船だけは、三十六年間の“日帝時代”の悲劇の全てを乗せて、黙々と玄界灘を走り続けていたのでした。

また、子供の頃（父の転勤で）日本全国をぐるぐると歩きましたが、今思い出すと、日本のあちらこちらで朝鮮の風俗、習慣が見受けられ、言葉や服装などきりがありませんでした。中でもこれが“民族差別”の原因の一つになったのでは…と思えることですが、昔“よいとまけ”という＜土木・建築のための地均し＞を、大勢輪になって“土”や“杭”を打っていました。この時の工事の作業員たちは、顔つきは日本人と変わりませんでしたが、言葉や服装が違っていました。ダブダブの大いズボンを裾の所でくくり、言葉は“濁音”が日本人のように発音できないからでしょう…。道行く人々は、「朝鮮人！」とからかっては、面白がっていました。恐らく、顔付の違う外国人なら別でしょうが、ほとんど同じということで、（私たち日本人は）かえって優越感を感じたのでしょう。賃金は日本人の半分ということでしたから、生活の苦しさ、貧しさが思いやられました。現在でも、在日韓国・朝鮮人のオモニさんが、一番（最初）におっしやることは、

「私たちは、日本人から何と蔑まれても我慢できますが、『朝鮮人！』という言葉だけは無くして欲しい。私たちの子供の時代には、『絶対に無くして欲しい』」と涙を溜めて哀願なさいます。自分の民族を“差別”されるのは、（自己の）全人格を否定されることと変わりありません。これは、何よりも辛いことです。この“民族差別”は、学校、就職、結婚…・と否応なしに付いて廻り、様々な悲劇を生んでいます。しかし、何と言っても心痛むのは、“小さな子供たち”のことです。先頃も、十やそこいらのお子さんが二人も、飛び降り自殺をしています。子供は子供なりに、どれほど思いあぐねての最期の「解決策」かと、申す言葉もないことでございます。

また、夜中に「殺される。殺される」と泣きわめくお子さんのことで、担任の先生と話し合ったこともありましたが。私の知る限り、「子供は、決して外で“差別”されていることを親には話しません」。このいじらしい子供の気持ちを、皆様分かっていただけますね。

「うちの学校では、皆“同じ”にして

います」「“ 差別 ”なんかしていません」と誇らしげにおっしやいます。しかし、その「“ 同じ ” が困るので…」と、まあこういうことがちょくちょくございます。ある在日韓国人のお子さんが、“ 差別 ”のひどい学校から転校して来た時、新しい学校では、ある先生が生徒全員に向かって、「いよいよこの学校も国際的になりました。今度韓国の友達が、皆さんの仲間になります」と紹介し、韓国の歴史などのお話をされたと言います。こういうことで、このお子さんは今までとうって変わって、嬉々として通学しているようです。また、最近の立教中学では、特にこの点、実に行き届いた教育がなされていると聞いております。

“ 差別 ” されても健気に立ち向かっているこんなお子さんもいます。在日韓国人の典型的なクリスチャン・ホームの三人姉弟の末っ子の坊やで、三人とも優等生です。

ある時、私がお宅を訪ねたところ、その坊やが目に涙を溜めて、一人しょんぼり座っていました。そこで、理由を尋ねますと、「学校で、『朝鮮人、帰れ!』から始まって、散々からかわれたの。もし、僕が泣けば、もっと『朝鮮人は良くない』と思われるから一生懸命我慢して、家に帰ってから泣いていたら、ちょうど教会のおばさんが来た。おばさんは泣きながら、“ お祈り ”してくれたの」と言うのでした。「お父さんやお母さんがいたら、心配するから泣かなかった」と恥ずかしそうに言いました。これがわずか九歳の坊やなのです。この“ いじめ ”は、毎日とのことでした。

ところが、それからまたある時のこと。その坊やに「大きくなったら、何になるの」と聞いたら、恥ずかしそうに「牧師になるかも…」と答えるのでした。私は以前のこともあり、すっかり嬉しくなって、韓国の至る所に燦然と輝く十字架を思い浮かべながら、「ボクは韓国に帰って、伝道するのよね」と至極当然のように言ったところ、すかさずその坊やは、「僕は、韓国に帰らない。日本にいて、日本をもっと良くするんだ」と。この時ほど私は頭を“ ガン ”と鉄槌で打たれたような思いのしたことはありませんでした。

関東地方で最も在日韓国・朝鮮人の方々の多い、川崎のプロテスタントの教会在日大韓基督教川崎教会に、私が初めて参りましたのは、実はこれも不思議なことからそうなりまして…二十年

以上も前ですが、それからずっと大きな“差別”問題に対する様々な取り組みの連続と。毎主日の李仁夏（イインハ）牧師様のお説教には涙ばかりでございました。また、週一回の信徒宅を廻るバイブルクラスでは、その都度オモニさんたちの打ち明け話をお伺いして、日本人であることの恥ずかしさや日本社会への憤り、またその中で生き抜くことの感動…と、ただただ涙を流しておりました。

こんなこともありました。小さなお嬢ちやんが、私の膝に乗っていたのですが。話の内容から私が日本人と分かったらしく、「おばちやん、日本人」と怯えたように私の顔を見上げて、オモニさんのところに行ってしがみついたのです。私はからだ中の力が抜ける思いでした。

また、デモにも時々参加しました。背中と胸に“差別反対”と書かれたゼッケンを付けて、ある時は大きい十字架を先頭に“讃美歌”を歌いながら、日比谷、霞が関、銀座あたりを粛々と歩きました。こうして、川崎教会で始まった“差別反対運動”は、「公営住宅の入居はダメ」「銀行ローンの借入れはダメ」「（クレジット・カードの加入、）月賦での買い物はダメ」…と、“税金”だけは“日本人並み”に取られて、何もかも“ダメ”ばかりでした。しかし、これらの国籍条項撤廃のために一つ一つ全力投球した結果、それぞれ全部獲得できました。

中でも最も大きな“差別”事件は、「日立製作所ソフトウェア不当解雇事件」就職“差別”事件でした。（いわゆる日立訴訟。1974年6月19日、横浜地方裁判所は、在日朝鮮人朴鐘碩（パク・チョンソク）氏の「解雇不当」の訴えを全面的に受け入れ、日立製作所ソフトウェアに対して、「解雇無効」「賃金及び慰謝料の支払い」を命ずる判決を言い渡した。）採用、入社が決まってから、朴氏の国籍が分かると、突然の“解雇”という次第でした。裁判所に持ち込まれ五年以上の闘いの末、何と日本の歴史始まって以来の完全勝利に終わりました。私も裁判の傍聴や様々な集会に参加しましたが、会社側は、何処までも、何処までも“差別”を否定し続けました。

何と言っても、この二十年余りの李牧師様のご苦労は、とても筆舌には尽くせません。地域の子供たちのために“差別”に負けないようにと、幼児には

“ 保育園 ”を、学童には“ 年齢に応じたグループ ”を作り、小さな教会は年中ごった返していました。信徒の方々には先ず各々の＜アイデンティティ＞を問いかける“ 勉強会 ”をと。しかし、自分を取り戻すために、今までの日本名から“ 本名 ”を名乗ることの難しさは名乗れば仕事も来なくなりますから、“ 家庭争議 ”が起こり、ついにあるオモニさんのように四人のお子さんを置いて“ 家出 ”までするという…、何とも出口の無い所で模索し続けなければなりません。

このように、在日韓国・朝鮮人の方々が、日本で“ 差別 ”を乗り越えて生きて行くためのご苦労は、私ども日本人には想像もつかないほどでございます。

また、“ 民族差別 ”ということでは、こんなこともありました。日本で大変ご苦労されながらご夫妻とも医学博士号をお取りになり、今はアメリカでご活躍です。日本にいらっしやった頃のこと。近所でたまたま火事があり、すると、このご主人は（有無を言わされずに）逮捕され、留置場に入れられました。私は不審に思い、担当の検事さんに面会してみると、ご主人の“ 無実 ”を確信いたしました。その後、奥様とご一緒に差し入れにお伺いし、つい、ご主人の“ 日本名 ”を申告したところ、刑事さんは早速「住民台帳」を調べ始めて、「何だ!『朝鮮人』じゃないか」と、はき捨てるように言って、荒々しくペンと紙を奥様に渡し、“ 住所・氏名 ”を記入するように机のそばに立たせました。ところが、奥様は血の気が失せ手もブルブル震えて、どうしても字を書くことができないのです。驚いて駆け寄り、一緒にペンを持ちましたが、この時ほど悲しかったことはありませんでした。

さて、ここでちょっと“ 聖公会 ”の日韓親善について触れてみたいと存じます。もう二十年以前になりますが、“ 韓国聖公会 ”で韓国人として、初めて主教様になられた李天換（イ チョンファン）主教様から、（日本語の分かる人々のいる間に、）“ 日韓親善 ”の手が差し延べられました。ところが、“ 韓国聖公会 ”全員大反対、「何もわざわざ日本と“ 親善 ”などしなくても…」と。喧々囂々の中、主教様自ら一人一人説得なさって、何とか実現に槽ぎ着ける事ができたそうです。1967 年のことでした。

ちょっと話は脇にそれますが、李主教

様のお兄様は、戦前から音楽の勉強のために来日なさっていて、戦時中のこと、たまたま待っていた楽譜が見つかり、「この戦時下に音楽とは、何だ!」と留置場に入れられたり、教会の中でもひどい“ 差別 ”を受け、それ以来教会を敬遠していらっしゃっていたのですが…。ある時、私に「（韓国にいる）弟が今度主教になって来日するので、会って欲しい」とおっしゃいました。私も突然の申し出で驚き、「そんなお偉い方に、私などの出る幕はございません」と、後藤主教様にご連絡いたしました。この時から、具体的に「聖公会の“ 日韓親善交流 ”」が始まりました。しかし、1965年当時の“ 偏見 ”や“ 差別 ”によって引き起こされる出来事は…びっくりの連続でございました。お兄様はあまりの心痛からまだ五十そこそこのお歳で急逝なさる、という何とも痛ましい現実の中で、李主教様もまた、生涯に二度と無いほどの苦汁をなめられました。けれども、李主教様は常に辞を低くして、ひたすら隠忍目重なさいました。今も日本聖公会で尊敬の的になっていらっしゃいます。ことに横浜教区は、韓国聖公会や李主教様と良い交わりを行っていらっしゃいます。

この交流が始まって間もなく、李主教様からのお招きがあり、日本聖公会では「韓国訪問使節団」を結成し、1967年に私も婦人会代表として参加することになりました。「訪韓団」は韓国に着くとすぐに（韓国聖公会の）婦人会の方々のご奉仕で、李王家の離宮の庭園でのお茶会がスケジュールに入っていて、一同三々五々、楽しく語り合いながら歩いて参りました。やかんやお菓子の包みを下げたご婦人たちは、道の片隅に寄って黙々と歩き続け、ちょっとおかしいなと思いました。東洋婦人の“ 控え目さ ”のせいかと考え、「“ 婦人会 ” はどこも同じ」と思い切ってサッと駆け寄り、一緒に荷物を持とうと手をかけました。でもやはり笑顔一つ見せず黙々のままなのです。

この後、私一人だけ、テレビのモーニングショーの録画にかり出されました。スタジオの眩しいライトの中で、韓国の方々からの色々な質問に、それこそ身の縮む思いで答え…この番組は翌朝放送されました。放送直後に（韓国聖公会の）婦人会長という方から電話があり、「是非会いたい」と。「日本側の主催する“ お礼のためのレセプション ”の

会場で」と申しましたら、「自分は申し込んでいませんから」と。会長さんがどうして…。いよいよその夜、一抹の不安の中で、私は会場の隅に座っていました。間もなく会長さんがお見えになりましたが、いさなり私に抱きついて、「赦して下さい」「赦して下さい」と激しく泣くのです。私はあまりにも思いがけないことなので、いよいよもって“びっくり”としか言いようもなく、「赦していただきたいのは、こちらの方です」と私も泣きながら一生懸命申しました。会長さんは、「私の父は、私の目の前で日本人に殺されました。それからは、日本人が憎くて、憎くて、今まで憎み続けて来ました。でも、もうこれからは決して憎みません。どうか今まで日本人を憎み続けたことを赦して下さい」とただ泣くばかりなのです。私はもうどうして良いのか…、本当に消え入りたい思いで、会長さんの手を固く握りしめることしかできませんでした。

翌日、急に「訪韓団」のスケジュールから私一人はずされ、婦人会の歓迎会に出席することになりました。お茶会のあの暗さに較べて、楓爽とした色とりどりの美しい“チマ・チョゴリ”姿に息を呑む思いでございました。“レセプション”の後、帰宅された会長さんは、遅くまで婦人会の方々に連絡をとられ、銘々持ち寄りのご馳走で、温かく和やかなおもてなしをして下さいました。この席で、日帝時代“歌えば、留置場行き”という美しいメロディーの「鳳仙花」の歌を静かに合唱して聞かせて下さいました。私は嗚咽が止まらず、泣きっ放しという次第でございました。

五泊六日の滞在中の李主教様のこうしたご配慮は、とても言葉に言い尽くせないほど行き屈いた最高のおもてなしでしたので、「訪韓団」一同すっかり良い気分で、「今度は日本に、是非どうぞ、どうぞ」と。意気洋々引き上げて参りました。

その後、韓国聖公会からの訪日をいつかいつかと待っておりました。あちらでも、日本からの招待を楽しみにしていましたが…、それにしても、あまりにも時間が経つので、私のところに問い合わせがありました。日本聖公会にお伺いをたてたところすっかり忘れていて、二年後の1969年に韓国聖公会の訪日使節団をお迎えいたしました。この訪日団に私どもがお返しできたのは、恥ずかしいことの数々で、本当に“ひやひや”の連続でございました。勿論、悪

意はないのでしょうが、日本の社会に染みついているものと思われ、中には「『朝鮮人』なんかにそんなに親切にすることはありませんよ!」とはっきり言う聖職様もいらっしゃいました。“無知”“無理解”ということは、何とも致し方の無いものでございます。“歓迎レセプション”で教会の若者たちがマナーも何のそのドンドン食べてしまい、「いざ、お客様に…」という時にはほとんど料理が残っておりませんでした。訪日団の方々がかえって恥ずかしそうに形ばかり食べて、一同解散いたしましたが。翌日、李主教様にお詫び申したところ、「いや、ちょうど“うどん屋”が一軒開いていて、皆腹一杯食べることができましたから、ご安心下さい」とユーモアたっぷりの呵々大笑に、私は顔から火の出る思いでございました。

少し前のこと、韓国の駐日大使の奥様をお訪ねしたことがありました。

奥様は言い難そうに、しかし、目に涙を溜めて、私にこうおっしゃいました。「私は初めて日本に来て、同胞がひどい“差別”を受けているのに驚きました。今村さん、私たちがあなたのお国に対して、どんな悪いことをしたというのでしょうか」と。それでも、温かい人参茶を入れてもてなして下さるのでした。

また、元駐韓大使の奥様は、「私は世界中を歩きましたが、韓国だけは他の国と違いました。何か心に温かいものを感じるので、私も主人も韓国が一番好きです」とおっしゃりこれには大いに共鳴いたしました。このように多分皆様方には、想像もつかない世界が存在していることを、そして、韓国の方々のことを知っていただけたらと、限られた時間に大雑把に申し上げましたが、最後に大切なことは、「お助けや同情は自分たちが一番嫌うところです。同じ所に立って、共に語り合いたい」と必ずおっしゃいます。ところが、韓国に好意を持たれる方でも、つい無意識に“同情”になり易く、ある大きな“差別問題”のための集会が曖昧なまま終ったことがありました。その集会の終了後、参加していたオモニさんたちから、「あなたが聖公会（の信徒）なら、大いに言いたいことがある。“差別”とは、頭で幾ら考え、勉強したからといって分かるものではありません」と散々諭され、「それでは、もう怖くてお付き合いできない…・」ということにもなりかねませんが。やはり、憲法の前文にあるように諸国民

への“ 信頼（と尊敬）”しかございません。 自分の正体を深く見つめますと、“ 他者への尊敬の念 ” が自然に湧いて来るような気がいたします。 ことに、韓国の方々にはお詫びの気持ちで一杯になります。

二人の李さんたちのその後でございますが、先の“ 親善旅行 ”でソウル金浦空港に到着した時、四十年ぶりに李さんと再会いたしました。“ 姐御 ”の李さんは既に亡く、私たち二人は時間を見て、人里離れた“ 姐御 ” のお墓参りをいたしました。 抜けるような青空のコスモスの花が咲く墓前に、私は身を投げ出して、「李さん！あなたのお国は独立しましたよ。 あなたがあんなに待っていた独立が実現しましたよ。 今こうして私が来たというのに、どうしてあなたは待っていて下さらなかったの」と私は大きな土饅頭に頬をすり寄せて、ありったけの涙を流したのでございました。 また、教会で“ お母さん ” と慕われていたもう一人の李さんも、先頃、バスに礫かれてお亡りになりましたが。 これも深い絆と申しましょう、私宛の手紙を投函した直後の事故だったとのことでした。 その時のお手紙は、今までで一番明るく、深い信仰に満ち溢れたものでした。 もう、私はメソメソ泣いてばかりではいられません。 私は、パスポートを握りしめて海を渡り、山深い友の終焉の地に一人佇みました。

私がお会いした在日韓国・朝鮮人の一世の方々は、炭鉱、ダム、屑買い…などと働き詰めで、中には日本人に蹴られて亡くなった方もありましたが、今は二世、三世、四世の時代になりましたが、それでも、若いオモニさんたちから昔と変わらない不安の声が聞こえて参ります。 人の弱みにつけ込んでお金をだまし取られたり…と。

びっくりしては泣くことしかできなかった私ですが、「『いつの日にか…あこや貝の涙が一粒の真珠になる日』を待ち臨みつつ、『日・韓のはざまの“ 巡礼の旅 ”』をなお続け参らねば…」と存じております。

今村秀子…日本聖公会東京教区聖アンデレ教会信徒。在日大韓基督教川崎教会客員。

新しい和解の文化の創造　―インタビュー―

主教　李天煥

李天煥主教は1922年4月5日生まれ、大韓聖公会の初代韓国人主教としてソウル教区を統括し、その間KCC（韓国キリスト教協議会）議長などの超教派の役職も多数こなされ、また教区主教を退かれた後も、韓国の名門、延世大学の財団理事長の要職を長年努めてこられた。日韓条約締結以前から、日韓の教会の交流の重要性を認識され、戦後途絶えていた両聖公会の関係回復に努められた。

聖公会の日韓交流をふりかえるうえで李主教のお話をうかかがえたことは大変貴重であった。お話の内容は初期の交流から、韓国教会の成長、東アジアの教会の共通の課題、南北統一の問題、今後の日韓交流の在り方等、多岐に及んだ。インタビューが行われたのは歴史的な南北首脳会談の直後だったので、その話から始まった。

（2000年6月19日　コリアナ・ホテルにて　聞き手：司祭長谷川正昭）

〔1〕交流の始めと個人的回想

▽ 最初の頃のお話から伺いたいのですが、どのような経緯で教会の交流が始まったのでしょうか。

日韓条約が調印されたのは1965年ですが、それまでは日本人を招待したくてもなかなか出られないのですよ。日韓関係が正常化してない時ですから。それで私はその時期を窺っていたのですが、67年に正式に訪問団を要請したわけです。その前に後藤主教さんが東大門教会のために献金して頂いたことがありました。それが次第に日韓交流の機運として高まっていったのです。勿論、訪問団を招待する時も色々問題がありま

したよ。しかし、すべてを信仰的に考えて、神の愛の実現のためにお互いが謙遜になって事に当たる必要があるということを私は常に考えていました。それに私はあまり物事を悲観的に考えない方です。気にしない質ですからなんとかやってこれたと思います。個人的感情に捉われたら果てしがない。何も出来なかったと思います。

▽ 丁度、北朝鮮との交流を長い間暖めていた金大中大統領のように日本との交わりを待ち望んでおられたわけですね。

非常に時期的によかったと私も思っています。金大中さんは北朝鮮にすごく関心を持っておられたし、北朝鮮も金大中大統領以外の人だったら、交渉相手にしなかったでしょう。強く願っていればいつか実現するということをあらためて思いました。

▽ 願いは必ず結実するということですね。ところで、崔主教さんも日本における人脈があって、つながりがお出来になっていたということがあり、それから東京教区も後藤主教さんが日韓交流に関心が深くて、御病気になられた後も竹内先生が後藤主教さんの意を受けてやっていらしたと思いますね。そのあたりで、BTプロジェクトが実現したということがあると思いますが、BTプロジェクトについてどのように評価されていますか。

竹内司祭がよくお働きになったことについてはとても感謝しています。やはりこれはワシントン教区との関係があって始めて出来たと思います。

▽ いわゆるMDF資金ですね。

そうです。それがなかったら不可能なプロジェクトだったですね。日本人司祭たちは言葉のわからない国でよく頑張ったと思います。

▽ ちょっと話が変わりますが、日韓条約締結の前から、神戸の八代斌助主教が韓国をよく訪問されたという話を聞いております。八代主教は恐らく韓国に対する贖罪の意識をもって戦後、度々韓国を訪問されていたのではないかと推測していますが、李主教さんは如何お考えですか。

それはどうか、私はわかりませんが、あの方には二回ほどお会いしています。戦争中ですけどね。その頃、私は日本人の教会に通うようになっていました。最初は仏教の僧侶になるつもりだったの

です。それで、現在の金剛山（北朝鮮）に行きました。二十歳の頃でした。太平洋戦争が始まる頃でしたから、若い私の気持ちは深い山に入って宗教的な救いを求めたい一心でした。しかし、私の父母はなかなか許してくれなかったのです。それで、ともかく金剛山に行ってみたら、日本の軍隊はほとんどいなかった。代わりにドイツのヒットラー・ユーゲントという若いグループがいたんです。日本とドイツは同盟を結んでいましたから、金剛山にもドイツの軍人たちが観光のためにやって来ていました。寺の中でよく観察していましたら、この人たちと話をする人は誰もいなかったけれど、歳とった僧侶がドイツ語で応対していました。私はびっくりしましたね。お坊さんが何時ドイツ語を学んだのかと思いました。戦争が終わってからよく調べてみると金剛山に隠れていた知識人のお坊さんとか大学教授が結構多かったのです。僧侶になりたいと相談したら「仏教の僧になるために山にこもらなくてもよい」と言われ、若者たちは軍隊に徴用されていく時代でしたから、私も山にじっとしていることは出来なくなったんです。その頃、教会というものに始めて出会ったのです。小さな家のような教会でした。それまで私は教会に行ったことがなかったのです。山から帰ってこれから身の振り方をどのように考えようかという時に私も大分苦しんだのですが、丁度そんな時に教会が見つかったのです。教会はしかし、私を歓迎してくれなかったですね。戦争中でしたから。警察に来られると大変な事になりますからね。その時、日本人の信徒は十数名位いました。

ともかくその教会に通うようになりました。それで、八代という日本人がどこか田舎の隊に所属していたらしいのですが、その教会に来ていたのです。私が韓国人だと言うと「いま僕は戦争の一番激しいところにいるんだ」と言っていましたが、リュックサックには沢山本を詰めていました。この人はその頃からよく本を読む人だったようです。確かにこの人は聖公会の主教だと言っていましたから主教が何故、戦争に出ていかなければならないのかと思いました。それから二度程お会いしました。最後は8月15日の戦争が終わる十日位前に急な用事で東京の本部に行くと言っていました。私は教会の日本人信徒の方々と一緒に駅までお見送りしました。ともかく忙しい方でした。その十日後に戦争が終わったのです。それから八代主教とは音信が途

絶えていました。

私が主教になった時の按手式に東南アジアの各主教が全部来たんです。その時、八代主教も来てくれました。私はその翌年、神戸に行ったのです。その時、終戦直前にお別れしましたが、それからどうなさっていたかとお尋ねしました。主教になれば難しいことが経済的にも色々多いとか、御自分の翻訳された本の話とか、色々な話をしました。

それから沖縄に68年にブラウニング主教が誕生して、その当時はまだアメリカの占領下でしたから、ブラウニング主教が私に招待状を送ったのです。その時、八代主教も招待されました。私は喜んでアメリカ大使館で沖縄行きのビザを貰いました。そのコースがまず東京に行って東京で一晩泊まって、それから沖縄に行ったのです。翌朝、空港に行ったらアメリカの主教が何人かいました。後藤主教もいたし、その他にも聖公会の人が何人かいました。沖縄に到着したら歓迎のために沖縄教区の人々が空港のすぐ下まで集まっていました。私は主教になってから三年目だったので、どのように振る舞ったらよいか心配しました。アメリカの主教たちは皆夫婦連れです。飛行機から降りる時は沖縄の信徒の代表者十二、三名が花のレイの飾り物を持って待っていました。私が一番後れて最後に降りたんですよ。そうしたらハイビスカスのレイを或る美しい婦人が私にかけてくれました。その方がブラウニング主教の奥さんでした。それから、ブラウニング主教が私のところに来て「李主教さん、私のワイフが一番若い人にレイをかけると約束していたが、アメリカ人には誰もかけないで、韓国の若い主教が来たらレイをかけた」と冗談を言っていました。（笑い）そういう思い出があります。

〔2〕 韓国のキリスト教の成長

▽ 韓国のキリスト教は今や総人口の25%がキリスト教徒と言われるように急成長しましたが、これは日本のキリスト教が1%以下であることを考えると大変な違いです。この原因は何処にあるのでしょうか。

これはよく日本の方々から質問を受けるのですが、色々な要因があると思います。韓国独特のシャーマニズムの影響を指摘する人もありますし、韓国が歴史的に被抑圧的な立場にいつも置かれて来たことも見逃せないと思います。民族性の中に解放と救いを求める霊性を

強く持っていたということが原因でしょう。特に解放後（注、日本の終戦記念日は韓国では光復節と呼ばれ、解放の日とされている。）に韓国教会、特にプロテスタントが急激に成長しました。南北分断によって迫害を逃れた北のクリスチャンが南に避難して来たのです。朝鮮動乱の社会的混乱が教会の求心力を高めると同時に反共の砦にしたという事情があります。戦前は反日、朝鮮戦争以降は反共という名分が教会に多くの人々を集めたのです。それから、60年代から70年代にかけて韓国社会に急速な工業化と都市化がもたらされたことが決定的であったと思います。

▽ それはどういうことでしょうか。日本もほぼ同じ時期に同じような社会の変動を経験して来たのですが。

そこには勿論、韓国の特殊事情があります。急速な産業化によって農村から多くの人々がソウルや釜山等の都市に流れ込んで来ました。そうなると必ず都市にスラムが形成されます。貧富の格差の増大や経済的な不安、政治的な緊張が絡まって所謂アノミー状態（真空）が出て来ます。教会がその受皿になったということです。

▽ 日本は工業化、都市化による経済成長が貧富の差の拡大ではなく、国民意識の総中流化という方向に行きました。

そうです。そこが日本との違いです。韓国では帰属意識の喪失に伴う不安感を教会が吸収したのです。社会不安から自分を見失った人々が人生の意味を捜し求めて教会の門を叩いたのです。

▽ 日本でもかつては若者がそういう理由で教会の門を叩いたのですが、現在ではほとんどなくなりました。豊かさが神を求める気持ちを失わせたのだと思います。

そこは民族性、国民性の問題もあるでしょう。

▽ ところで聖公会は日本も韓国もあまり成長していません。

全般的に東アジアの教会は他の教派に比べて成長が遅れています。これは私たちが大いに反省しなければならない点です。土着化の神学が形だけで実践されていないところに原因があります。具体的に言うと欧米の宣教師のマネをして、そこから脱皮できないというのが韓国と日本の聖公会に共通した問題としてあるように思います。

▽ その現状を打ち破っていくためにはどういうことが必要だとお考えですか

それにはやはり私たちの教会が開かれた教会になると言うか、目を外に向けて具体的な実践を一つ一つ積み重ねていくしかないでしょうね。日韓の教会交流もそのためですが、たんにお互いの親しさを増すためだけではなく、神学的な交流も必要だし、東南アジアの貧しい教会や中国に対しても目を向けていかなければなりません。南北の統一も政治的な課題としてではなく、教会の発展のためという宗教者の見方が必要です。

〔3〕東アジアの土着化の問題

▽ 李主教さんは竹田主教さんの按手式に説教されて『東アジアの神学を』というお話をされました。非常に示唆的と言うか、印象に残る説教でした。

韓国人も日本人も心の深いところでは仏陀や孔子等の東洋の諸宗教の影響を受けています。これは東アジアの精神文化の伝統と言ってよいものです。私たちが想像する以上に深いところまで根を下ろしていると思いますね。西洋の人たちにはない遺産を私たちは共有しているのです。近年、ヨーロッパやアメリカの学生たちがアジアの大学に留学して来る例が多いのですが、西欧の合理主義、科学主義に失望した知識人たちがアジアの神秘と倫理的な考え方に学ぼうという動きだと思います。キリスト教自体が西欧ではもう根を失っているように思えますから。

▽ 西欧文明のバックボーンには今でもキリスト教がしっかりと根づいているのではないかと思いますが。

かつてはそうでした。しかし、世俗化と科学的合理主義が行き着くところまで進んで、キリスト教そのものが西欧文化の中で疎外されるようになったのです。今や、西欧のキリスト教は他人の土地で田植えするのをやめただけではなく、自らの土地においても地質の変化のために仕事が難しくなっているのです。西欧のキリスト教は自らの根を下ろすべき新しい土地を捜すと共に、自らの品種改良をしなければならないところまで来ています。

▽ 東アジアの教会が新しい土地にならなければならないということですね。

そうです。韓国と日本は昔から深い文化的交流がありました。近代には不

幸な歴史がありましたが、それ以前は通信使の交流が何百年も続いたのです。このような交流がこれからもっと活発に行われて、東アジアの神学を確立するために韓日の教会が協力していく必要があると考えています。

〔4〕これからの日韓交流

▽ 来年からは新しい世紀に入りますが、これからの時代に対して何かヴィジョンのようなものを示して頂けるとありがたいのですが。

私は退職主教ですから、そんな大それた考えはありません。ただ、これからの時代はコミュニケーションの手段の発達とか情報革命などが益々加速され、私たちの生活を左右するようになると思います。コンピューターとか携帯電話の普及は韓国でもすごいものです。しかし、私はいつも不思議に思うのですが、通信手段が発達すればするほど人と人の心はかえって遠く隔たるようになっているのではないかと思います。

▽ それは仰るとおりだと思います。

南北問題がまさにそうです。歴史的な和解へと動き始めましたが、これまではお互いに敵視し、憎しみ合う関係が何十年も続いて来ました。幸い、金大中大統領の北朝鮮訪問で長い間の敵対関係が緩和されようとしています。地域間、政治思想、イデオロギーの違いで対立しなければならない時代は過ぎ去ろうとしています。平和共存と言うか、平和的に共生するということがこれからはもっと重要になると思います。

▽ 韓国と日本の関係もそうですね。

そうです。韓国人と日本人の関係はこれまで決してよくありませんでした。地理的に一番近い韓国であるにもかかわらず、日本人の中には韓国人に対して偏見を持っている人が少なくありません。韓国人も反日感情が根強く残っています。これは政治家だけに任せておく問題ではありません。偏見とか差別というのは社会的、文化的な要因が非常に大きく影響しています。ということは私たち宗教者の役割がきわめて重いと言うか、重要だということになります。

▽ とくに日本の教会は頑張らないといけませんね。

これはすごく時間のかかることです。

平和的努力というのはすぐに実を結ぶものではありません。すこし前進したかと思うとすぐに後戻りします。そして、平和というのは犠牲が伴います。必ずそれは必要になります。キリストの十字架がそれをよく物語っています。受難と苦しみがつきまとうのです。しかし、それは強いられてする犠牲ではなく喜びにつながるものではないかと思います。

▽ 喜びにつながるというのは具体的にどういうことでしょうか。

聖書が言っているように一粒の麦としての犠牲です。多くの実を結ぶための産みの苦しみです。そこに私たち宗教者の栄光があると思います。韓日の教会がそのような目的に向かって、受難や苦しみを厭わずに進んでいけたらと思います。そうすれば必ず良い関係が築けるようになるはずです。

▽ 韓国では長い間、日本文化が入ってくるのを禁止していましたが、最近それが緩やかになりつつあるようですね。

遅きに失したという人もいますが、いままではやむを得ない面もありました。南北の関係と同じように、機が熟したということでしょう。これからはお互いにもっと胸を開いて、こだわりを捨て、新しい和解の文化の創造に協力し合っていくことが必要だろうと思います。そこに宗教者に課せられた使命もあると考えています。

▽「新しい和解の文化の創造」ですか。良い言葉ですね。文化交流はこれからの日韓関係をもっと豊かにする鍵になるかもしれませんね。今日は長い時間どうもありがとうございました。

東アジアの神学を　―竹田主教按手式説教―

主教　李天煥

本日、東京教区第七代主教就任と按手式に出席できましたことを身に余る光栄と存じております。また私如き者を按手式の説教者としてお招き下さったことを、この度主教に選ばれた竹田眞校長とそして皆様に感謝する次第です。私は韓国聖公会の一退職主教として、また一人の友人として、竹田司祭の主教就任と按手を心よりお祝い申し上げます。

竹田眞主教は、私と長い間友情を分かちあってきた尊敬する友人であります。主教は日本聖公会の聖職候補者達を教育して来られた神学教育者であられるばかりか、私達韓国聖公会のためにも多くの関心を寄せられ、助けて下さった方であり、私達は感謝している次第です。

私は本日この意味深い席で「東アジア聖公会の神学的課題」という題目をもってお話ししようと思います。

主教として聖職がもつ重要性とこの使命の内容を申し上げる代わりに、同じ東アジアの友人として新任主教と共に私達聖公会の運命を展望し、堅実な教会発展を模索したいからであります。

私達キリスト教徒は、今日教会史上他のどの時代よりも神学に対して多くの関心を真摯に傾けています。これは、どの時代よりも、それ自体と現実が究極的意味と原理を求めているということであり、また過去のものではない新しい内容を求めている証拠であります。言い代えますと、今日のキリスト信者は、意味深く力のある新しい内容の説教を聞くことを願っている訳です。

この要請は、そのまま健全な新しい神学に対する渇望の現れでもあります。ところで、私達の東アジアの教会は、全般的に神学が貧困であるか神学不在の教会でありました。私達が学び知っている神学は、大部分西欧の神学でした。西欧の神学は、彼らの歴史と文化を基礎にして形成された神学でありますから、西欧人の信仰と表現としては当

然であり、また意味があります。しかし、その西欧伝統の神学が、土台と表現が異なる東アジアの地に直輸入される時に問題が生じます。

東アジアの歴史と文化は西欧人のものとは異なっています。私達の哲学思想と宗教も西欧人のものとは同じではありません。孔子と孟子の教えを受け、仏教と道教の影響を受けてきた私達東洋人が、どうしてギリシア哲学とその西欧的宗教の表現をそのまま受け入れることが出来るでしょうか。それにも拘らず、過去の東アジア諸教会は西欧の神学を無批判的に模倣踏襲してきました。これは、神学の貧困ないしは神学不在を意味します。神学という用語自体が学問的批判を前提にしています。真の正しい、そして健全な神学とは、それだけ批判的知性を道具として使用しなければなりません。ところで、私達の過去はそうではありませんでした。

私は、この問題を私達の聖公会に適用して語ってみたいと思います。「聖公会」という名は、その内容と表現において極めて神学的であります。御存知のようにこの単語は、Holy Catholic Churchという、教会に対する神学的告白を語っています。Anglican Churchが英国的伝統を意味し、Episcopal Churchが監督者としてのBishopの機能を表現するのに比べて、「聖公会」という表現は、一層神学的であります。しかし、これより更に重要なことは、この「聖公会」という語彙がもつ否定的意味であります。「聖公会」という特異な漢字の名前は、それが西欧的な、Anglicanismではないということであります。聖公会といえば、英国教会の伝統を引き継いだAnglican-Communion、東アジアの教会だと人々は考えがちです。即ちAnglican Theologyといえば、それがそのまま聖公会であると信じています。しかし、Anglican TheologyまたはAnglicanismと聖公会神学は一致する筈がなく、一致してはならないのです。聖公会は、どこまでも東アジアの教会が、自分の歴史と文化、即ち、伝統文化を受容、変容するなかで成り立つ教会でなくてはならたいのです。しかし、私達の東アジアの教会、即ち、聖公会は、名前は極めて神学的であるにも拘らず、実際は神学不在の状況の中で維持されてきました。この問題を解決することが、今日私達の当面する課題であります。

私達の先輩学者たちが付けてくれた

すばらしい神学的名称「聖公会」を、神学的に解釈して発展させる責任が私達にあります。それでは、この神学的課題を具体的にどのように遂行したらよいのでしょうか。私は、次に述べるように三つに分けて考えてみたいと思います。

三つの神学的課題

第一は、私達東アジアの共通した宗教であり文化である、仏教と儒教に対する神学的研究と適用であります。釈迦如来の信仰、孔子、孟子、荘子の教えを、私達聖公会神学者達が先頭に立って研究し、その宗教的価値を私達のキリスト信仰と神学に変容させなければならないということです。今日まで、私達は、私達自身の長い間引き継がれてきた宗教的概念と生き方を無視するか、見てみない振りをして生きてきました。自分自身の精神的土台を必要以上に放棄し、外来の神学にのみ関心を傾けてきました。

しかし、このような思考方式や態度をもってしては、私達の真の神学を形成することができないことを今になってやっと悟り始めたのです。

私達の「神」概念、来世親、宗教的献身は、決して西欧的なものと一致することはありません。私達の「聖」概念も、西欧的な、”Holy ”とは同じではありません。私達聖公会の神学者達は、この東アジア的神と、宗教的聖の価値を深く堀り下げて解釈しなければなりません。これは、新しい解釈学の課題です。この解釈学は普遍的意味としては、Incarnation の神学を更に質的に発展させるものになるでしょう。私達聖公会の神学は Incarnation の神学的意味を強調します。御言葉が肉体になったという表現は、神の人間化であり、永遠の歴史化であります。ここには真理の時間的、空間的表現があります。私達東アジアの聖公会はまさにその具体的な表現であります。

私達は、神の子、すなわち永遠のロゴスが漢字文化の中にも来られ、仏にも、また孔子、孟子を通しても御自身を表されたと信じます。私は十九歳の青年の頃、仏教の僧になるつもりで金剛山のある高僧を尋ねたことがありました。その時にはキリスト教を知りませんでした。その僧侶は、私に次のように勧めてくれました。「仏教の僧になるために山にこもらなくてもよい。家に帰って父母を大切にし、真面目に生きなさい」

と。結局私は自分自身でキリスト教を探すことが出来、教会の聖職者になりましたが、私の宿題は、東洋の宗教とキリスト教を神学的に接近させることにあるのではないかと思います。

私は、西欧的伝統と慣習に従って、西欧的カラーと紫色の主教のチョッキを着てきましたが、私の考えと生き方はどこまでも東洋的であります。この考えと生き方、そして、その表現を東アジア的神学、すなわち聖公会神学に発展させなければならないと信じます。約二千年前、使徒パウロは幻を見て、ヨーロッパの入口、マケドニアに渡って行き、それが西欧キリスト教の始まりになりました。私達東アジアの教会はその西方伝道の歴史の末尾に当たっています。二千年の歴史は、引き続いて西方伝道と西方神学の歴史でした。これからは、それとは反対の道が展開されるだろうと信じ、またそのようにならねばならないと考えます。東アジア神学、特に聖公会の神学を形成し、東の方向に向かってゆかねばなりません,事実、今日、西欧の人達は、東アジアの宗教と哲学を渇望しつつあります。誰がこの第二の使徒パウロになるのでしょうか。東アジアのこの場で、新しい内容を吸収して東に向かってゆく神学を誰が形成してゆくのでしょうか。私はこの責任が、私達の聖公会にあると考えます。

◇

第二に、教会一致神学、すなわちエキュメニカル神学に対する課題です。今日教会エキュメニカル運動は、世界的な運動として発展しています。この運動に Anglican Church も Episcopal Church も先頭に立っていますが、私達の東アジアの聖公会も、この地域で私達なりの重要な役割を果たしております。しかし聖公会は、この教会一致運動において、一層新しく力ある神学的転機をつくらねばなりません。聖公会は、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の中間的位置にあるために、新旧教会を連結する橋渡し的役割をすることが出来ると人々は考えがちです。勿論、そのような面もあることは事実ですが、それを神学的に正当化することは出来ません。神学は、歴史的または、ある空間的理由があるからといって有利な立場を確保することは出来ません。言い代えると、イギリスの宗教改革がそのような立場、そのような性格になったと言っても、Anglicanism が正しいと主張することは出来ないということです。神

学は、とどまることなく形成発展してゆく過程的なものでなければならないのです。

神学は、絶えざる自己反省と批判を通して形成されています。これは一つの運動であり、総合であります。動きながら整わないものを補い、取り入れてゆきます。エキュメニカル運動は、聖公会が単純に空間的に中間にあるということを越えて、弁証的運動へと発展してゆく時にのみ、成功するでしょう。それは、停止した中間点にあって、両端を結ぶ空間的意味の一致運動ではなく、これから前進運動をなし、両端を対角線的に総合してゆく一致運動であります。

私達の東アジアの聖公会神学はこの弁証的運動の神学を求めて発展させなければなりません。過去の聖公会の教会一致運動は、大体一般エキュメニカル運動の一環として、西欧的方法にならったものでした。これから、私達の運動はアジア的思想と生き方そのものを吸収しつつ、前進する姿勢をもち、他の兄弟教会と和合し、一致してゆく運動にならねばなりません。前にも申したように、私達東アジアの諸教会には、共通した伝統文化と思想があります。私達は、ある特定の教団に属する前にすでに共通の基盤をもっているということです。この基盤を聖公会的エキュメニカル神学へと発展させねばなりません。この作業が成功する時、世界的教会一致運動にも貢献することを信じます。分裂の苦痛を治す薬は、西欧製の薬だけではありません。私達アジア人の処方も、強いききめを発揮することができます。

私達の聖公会は、このアジア的治療方法を研究して、実践する教会にならなければなりません。聖公会という名の中にある文字、すなわち「公」という字は、私達にその意味と使命を果たすことを強調しているといえましょう。

◇

最後に、聖公会神学は、ケノーシスKenosisの神学へと発展せねばなりません。主は、御自身を空しくして、僕の形をとってこの世に来られました。私達キリスト者もこの僕の姿をとって、僕の使命を全うしなければなりません。言葉を代えていえば、水に溶けてなくなってしまう塩のようにならねばなりません。塩の存在様式は、そのみかけや量にあるのでなく、眼にみえない、からい味にあります。教会は、その名前や看板の大きさにあるのではなく、教会としてのその

内面的、質的力量にあります。この世の中には、有名無実の機関や人々が多くあります。それらの存在は教会や社会に有益になるどころか、害毒を多く与えます。

塩がそのからさを失う時、それは外に捨てられることで片付きますが、教会は、そのからい味を失う時、社会とその教会自体にまで害毒を及ぼします。今日、教会は、その機関として、団体として余りにも肥大してしまいました。主教を始めとして教会の高位聖職者達の名は、マスコミを通して、更にその権威と勢力を発揮します。主イエス・キリストは、御自身を空しくして僕の形でしたが、それに従う教会と教会の指導者達は、自分の名前を一層表し、また強化する結果をもたらしています。このような状況では、私達が主の使命を果たすことは出来ません。福音は先ず、貧しい者、苦難を受ける者に伝えられねばなりません。そのためには、自分自身が、貧しい僕の姿にならねばならないのです。

今日、伝統神学に激しく挑戦してくる神学は、貧しく弱い人々のための解放の神学であります。これは、権力者、有名な人々の横暴から苦難をうける人間と社会を解放することが、真の神の御心であり、宣教であると信じる神学であります。楽で安定した既成秩序の中で、イエス・キリストをその安定構造の保護者、また祝福者と信じたく思う教会は、実は、主の身体である教会ではありません。私達の主は、御自身を空しくして僕の形をとってこられたばかりでなく、神の御心のためには十字架に御自身を捧げて、徹底した犠牲の姿をみせてくれました。

私達東アジアには、全般的に苦難を受ける人々が多くいます。政治的理由により、経済的原因で、またはその他の事情で、受難する例が多くあります。このような状況下にある教会として、またこのような苦難の中の神学として、自分を空しくして仕える僕にならなくては、主の道を行くことは出来ません。言い代えますと、Kenosis の神学を強調したいのです。東アジア的 context（状況）の中で表現されるケノーシスの神学を形成し、また実践してゆかねばなりません。

結論として、聖公会はその名前からして、極めて神学的な教会であります。その内容や表現がすべて神学的課題を強調する名であります。それにも拘らず、私達はこの聖公会という言葉の意

味と価値を深く研究し発展させることが出来ませんでした。この問題を解決することが、私達の緊急の課題であります。誰がこの課題を先頭に立って導き開発して発展させることが出来ましょうか。私はこの重大な課題を竹田主教が、立派に成し遂げられるものと期待したく思います。

東京教区は、日本の中だけでなく世界との連絡が多く、早い場所であります。文化の交流や世界神学の指導者達が、しばしば行き来するところであります。そのような要地の教区を受け持たれ、また竹田主教御自身が、神学者として長い間神学教育を担当なさってきましたから、東アジア聖公会神学形成のために、大きな貢献がお出来になると信じます。聖公会の神学、すなわち東アジアの神学が研究され、発表され、世界教会に新しい指導指針をもって貢献されることを望みます。竹田主教とその御家族、そして新しい主教を迎える東京教区と日本聖公会の教会員の皆様に、神の限りない恵みと祝福が豊かにありますように祈ります。

（前大韓聖公会ソウル教区主教）

年　表——

1866	米国シャーマン号事件。 仏艦隊、江華島に侵攻。
1871	米艦隊、江華島侵攻。
1873	大院君政権倒れ閔氏政権成立。
1876	江華条約（日朝修好条規）調印。 釜山開港。
1880	元山開港。
1882	壬午軍乱。 米、英、独などと通商条約締結。
1883	仁川開港。 大極旗使用。
1884	甲申政変
1885	英艦隊、巨文島占領。
1894	甲申農民戦争始まる。 清軍、牙山、上陸。 日本軍、王宮占領。 日清戦争始まる。
1895	王妃閔妃殺害事件（乙未事変）
1897	国号を大韓帝国に改める。
1899	大韓帝国国制公布。
1903	YMCA発足。
1904	日露戦争時の局外中立を宣言。 日露戦争始まる。 日韓議定書調印。 第一次日韓協約調印。
1905	日露ポーツマス条約。 第二次日韓協約（乙巳保護条約）調印。 義兵戦争激化。
1906	日本、韓国統監府設置。
1907	高宗退位。 韓国軍解散。
1909	日本、韓国併合の方針を閣議決定。 安重根（アンジュングン）が伊藤博文をハルピン駅頭で射殺。
1910	日韓「韓国併合ニ関スル条約」調印。 朝鮮総督府設置。
1911	土地収用法公布。 朝鮮教育令公布。 同化教育開始。
1912	土地調査令公布。
1919	3/1 ソウル・パゴダ公園から示威運動、独立宣言書発表。 3,1 運動ひろがる。 日本軍、水原堤岩里で住民を教会に監禁し、銃殺、放火（堤岩里事件）。上海仏租界で亡命政権、大韓民国臨時政府を樹立。
1923	関東大震災。 朝鮮人暴動のデマが広まり、数千人の朝鮮人虐殺される。
1926	6・10万歳運動起こる。
1928	上海で李東寧、金九ら韓国独立党結成。
1929	世界恐慌。 元山労働者ゼネスト。 日本に反対する光州学生運動起こる。
1930	満州事変勃発。
1932	桜田門事件（愛国団員李奉昌、天皇暗殺未遂）。 満州建国宣言。 愛国団員尹奉吉上海の天長節式場で白川大将らを殺傷。
1936	孫基禎、ベルリンオリンピックのマラソン優

	勝。 東亜日報など日章旗抹消事件起こる。
1938	朝鮮教育令改正。 ハングル教育を廃止。
1939	国民徴用令実施。 強制連行始まる。 総督府、朝鮮人の氏名に関する件公布。
1940	創氏改名実施。 皇民化教育強化。 臨時政府、重慶に韓国光復軍総司令部設置。
1941	日本、対米英宣戦布告。 臨時政府、対日宣戦布告。
1942	朝鮮での徴兵制実施。 朝鮮語学会事件。
1944	全面徴用実施。 女子挺身隊勤務令公布。
1945	日本、ポツダム宣言受諾。 朝鮮解放(8.15民族光復)。呂運亨ら建国準備委員会結成。 マッカーサー、米ソ両軍による朝鮮分割占領政策を発表。 朝鮮人民共和国樹立宣言。
1947	国連総会、国連監視下の朝鮮総選挙案採択。
1948	南部で単独選挙、大韓民国樹立。 北部で朝鮮民主主義人民共和国樹立。
1950	6.25動乱(朝鮮戦争)起こる。 北の人民軍ソウル制圧。 国連軍、仁川に上陸。 中国人民志願軍の参戦。
1951	人民軍ソウル再制圧。 国連軍ソウル奪回。 休戦会議始まる。
1953	休戦協定調印(米・朝中・ソが板門店で)李承晩大統領は調印を拒否。
1960	4.19学生反政府デモ広がり李承晩大統退陣。
1961	軍事クーデター。 朴正熙将軍ら政権掌握。

1962	・今村秀子姉がイ・チョンファン(李天煥)ソウル教区主教と個人的な親交を持ち、援助を続けられていた。
1965	(今井正道司祭)*MRI委員長 ・東京教区は11月23日開催の第46(定期)教区会で「相互責任・相互依存委員会」の設置を決議。従来のワシントン・東京教区姉妹関係委員会を解散し、役割を本委員会に吸収した。これをMRI委員会と呼称。委員長今井正道司祭　*Mutual Responsibility & Interdependence in the Body of Christ 日韓会談「金・大平メモ」で財産請求権問題で合意。 朴正熙大統領当選。 第三次共和国発足。 ベトナム派兵を閣議決定。 日韓条約調印。

1967	・9月16日から23日まで後藤教区主教他12名が大韓聖公会の招待により渡韓、各教会を訪問、教区礼拝当日の献金4万円を寄贈された。	朴正熙大統領再選。
1968	（竹田眞司祭） ・ソウル教区からの李主教の「学生伝道」に関する要請に基づき、日本聖公会にこれを訴え東京教区としては大斎始日（教区礼拝）の信施をこれに捧げた。 ・10月、韓国聖公会キム・ソンス（金成洙）司祭、東京に約一ヶ月滞在。 ・山田襄教務院長、和気清一、今村秀子その他の方々がソウルを訪問した。	米情報収集船プロブエ号、北朝鮮に拿捕される。
1969	（竹田眞司祭） ・ワシントン教区活動の一部である Missionary Development Fund（MDF）について同教区より申出があった。（後に日韓交流・協働のための資金として用いられることとなる。）	
1970	（竹内謙太郎司祭） ・ソウルの永松かず姉の孤児救済のためのチャリティショーをMRI ・社会両委員会とが共同で援助した。 ・8月1日～5日ソウル教区キム・ジンマン（金鎮萬）教授来日。 ・ソウル教区の要請により8月、今井烝治司祭、坂口順治氏を派遣。 ・ソウル教区チェ・チョルヒ（崔哲熙）神父が8月18日来日、2年間の予定で東京に滞在、立教大学、神学院で学びかつ教区に奉仕される。	セマウル運動始まる。 京釜高速道路開通。
1971	（竹内謙太郎司祭） ・6年間続いたワシントン教区との姉妹関係終了により、この協働による他への奉仕活動の対象としてソウル教区との関係を深める動きが出てきた。（中央協議会報告） ・9月30日～10月8日、ソウル教区親善使節団として李主教以下9名来日。都内巡回、教区歓迎晩餐会（八芳園）、協議会、主日礼拝参加、ホームスティなどを行った。教区礼拝の信施をソウル新伝道のため捧げた。（53,151円）	総選挙で朴正熙大統領、金大中野党候補に辛勝再選。 南北赤十字予備会談。

	・ソウル教区から立教大学大学院留学中のチェ・チョルヒ（崔哲熙）司祭の住居、奨学金についてMRIで協議	
1972	（竹内謙太郎司祭） ・ワシントン教区との三教区合同宣教活動の一環として、ソウル―東京―ワシントンの協働作業を推進していく。（ワシントン教区からのMDF資金（Missionary Development Fund）を用いて） ・7月、ソウル教区キム・ヨングル（金容杰）司祭来日 ・9月、ソウル教区イ・チョンファン（李天煥）主教来日。キム・ヨングル（金容杰）司祭と共に後藤主教、竹内司祭を訪問、協議。その結果、ソウル教区ベダ教会の活動のため20万円、聖職信徒協議会のため20万円を援助することとなった。これらはワシントン教区からの援助資金が用いられた。 ・ワシントン―東京―沖縄・韓国の三教区関係プロジェクト強化が進められる。ワシントン教区クレイトン主教の代理の資格でロミング司祭来日、沖縄、韓国を訪問。7月10日～13日のの韓国訪問時には、後藤主教の代理の資格で竹内委員長がロミング司祭に同行してソウル教区を訪問、協議を行った。 ・日本人司祭をソウル宣教師として派遣の要請あり、これについて教務院に実施の具体化を委嘱した。 ・ソウル教区から要請のあったオーガニスト留学について、ソウルよりジョン・ヨンジン（鄭連鎭）姉を推薦手続中。期間1年間で立教大、教区礼拝音楽委員会で世話をする予定。（1973年に本人結婚のため中止となる）	南北共同声明発表。 朴正熙大統領四選。 第四次共和国発足。
1973	（佐々木厚司祭） ・チェ・チョルヒ（崔哲熙）司祭帰国によりアンチャンナム（安昌南）神父の一年間実習の留学申し入れがあり了承したが、ソウル教区の事情により延期となった。 ・8月、立教大BSA第16支部がソウル教区の要請でヤンピョン（楊平）でワークキャンプ実施。（MDF30万円） ・塚田司祭をソウル教区教役者会に講師として派遣予定があったが、ソウル教区の都合で延期された。 ・東京教区とソウル教区との関係が大韓聖公会全体として	浦項製鉄所完成。 東京で、金大中拉致事件発生。

	とらえがちであったが、大田教区とも考える場がほしいと、教務院渉外局に進言した。（MRI報告）	
1974	（佐々木厚司祭） ・ イ・チョンファン（李天煥）主教よりアンチャンナム（安昌南）神父に代えてチョン・ヨンウ（鄭淵優）神父を派遣したいとの要請があり、検討の結果これを了承した。 ・ 韓国聖架修女会の招請により、ナザレ修女会2名、神愛修女会1名の修女が同修女会を訪問し、派遣費20万円をMDFから支出した。 ・ 懸案のソウル教区に邦人司祭を長期に派遣する件は政情不安もあり、イ・チョンファン（李天煥）主教に照会する。 ・ ソウル教区との関係について、東京教区の基本方針確認のため宣教委員会から常置委員会にあてて、「ソウル教区との関係についての意見書」が提出された。 ・ 6月、釜山教区が大田教区から独立して成立。 ・ 7月、内田、大木両司祭韓国訪問。（7月2日～5日、第1回日韓教会協議会出席）、8月7日、両司祭から社会委員会に対し詳細な報告があった。	文世光によって朴正熙大統領狙撃、大統領夫人陸英修死亡。 ソウル地下鉄開通。
1975	（竹内謙太郎司祭） ・ 2月、釜山教区チェ・チョルフェ（崔哲熙）主教が来日、同教区に日本人司祭を派遣してほしいとの要請があった。 ・ 6月、ソウル教区からチョン・ヨンウ（鄭淵優）神父が1年の予定で来日。当初、聖アンデレ教会、後に聖パウロ教会を宿舎として東京教区内各教会を訪問、研修を行う（MDFからの援助資金）。 ・ 7月、竹内MRI委員長訪韓、チェ・チョルヒ（崔哲熙）主教と会いBT計画に就いて具体的な協議を行った。 ・ 9月、BTプロジェクト発足。MDFを用いて人的に釜山教区の援助を決定。（3ケ月ずつ4人の東京教区の司祭が蔚山の教会で牧会に当たることとなった。） ＊9月29日～12月11日　河野裕道司祭 （当時、浅草聖ヨハネ教会） ＊12月8日～76年3月8日　長谷川正昭司祭 （当時、神愛教会）	
1976	（竹内謙太郎司祭）	米韓合同軍事演習「チームスピ

	＊4月14日～5月31日佐藤徹司祭（当時、聖十字教会） ＊6月17日～9月1日大木弘行司祭（当時、千住教会） ・ BTプロジェクトのプログラムは8月末で終了したが、釜山教区主教よりさらに延長の要請があった。東京教区では竹内MRI委員長を派遣し今後について協議、その結果、第2期BTプロジェクトを明年から実施することとした。 ・ 11月23日の定期教区会で次の2議案がMRI委員会から提出され議決された。（1）釜山教区蔚山教会援助募金の件募金目標350万円（500万ウオン）（2）大韓聖公会釜山教区代表招請の件主教以下数名の聖職信徒を招待する。予算60万円。 ・ 5月29日、チョン・ヨンウ（鄭淵優）神父1年の研修を終え帰国。	リット76」実施。 板門店でポプラを伐採しようとした米兵2名、北朝鮮兵に襲撃され死亡。
1977	（竹内謙太郎司祭） ・ 第2期BTプロジェクト開始。 ＊1977年2月から78年4月までの予定で長谷川正昭司祭（神愛教会、当時）を蔚山聖公会に派遣。 ・ 1972年以来のソウル教区との親善関係は、近年不幸な行き違い、誤解のためスムーズでなかった。 ・ 6月13日～20日、竹内MRI委員長訪韓、釜山教区主教に蔚山聖公会土地取得代金300万円を手渡した。次いで大田教区ベエ・ドゥファン（斐斗煥）主教を表敬訪問後、ソウル教区イ・チョンファン（李天煥）主教を訪問、来日を要請した。同主教はこれを承諾され、9月23日のフェスティバルに出席、説教をされた。これらを通じて、東京ーソウルの関係改善の兆しが見られるようになった。 ・ 10月21日～24日　東京教区有志訪韓（団長　保坂功氏）実施。一方、釜山からの訪日団は韓国政府により不許可。 ・ 11月7日～13,後藤主教、竹内MRI委員長、大韓聖公会訪問。（釜山教区問安、蔚山教会、長谷川司祭問安激励、大田教区表敬、ソウル教区表敬、イ・チョンファン（李天煥）主教に対し答礼表敬）	カーター大統領在韓米軍段階的撤退表明。 「チームスピリット77」実施。
1978	（竹内謙太郎司祭） ・ 3月、昨年2月に蔚山へ出向していた長谷川司祭帰国。	

	引き続き佐藤徹司祭が4月25日～7月15日の間出向。6月25日、田光信幸司祭1年間の予定で家族同伴で赴任。 ・ 田光司祭の出向中、在韓原爆被災者救済計画の話が出て、5か年にわたって年50人ずつ治療の援助をした。また、東京教区としてこのための献金を始め現在に至っている。 ・ 釜山教区の要請により大韓聖公会訪問団を教区主催で計画、10月13日～17日、後藤主教以下15名が訪韓し各地で親交の実をあげた。（MRI委員会報告で、従来ソウル教区が中心であった交流を釜山教区へも広げてきたが、今後さらに大韓聖公会全体に対する関わりとして展開することを目指すとの考えが示された）	
1979	（高畠靖司祭） ・ 1月29日～2月2日、高畠MRI委員長、竹内司祭と訪韓、3主教（ソウル教区イ・チョンファン（李天煥）主教、大田教区ベェ・ドゥファン（斐斗煥）主教、釜山教区チェ・チョルヒ（崔哲熙）主教と懇談。釜山教区崔主教とイ・ミョンヒ（李明熙）信徒会長を60定期教区会にかけて東京に招待する手続きをとった。（来日の記録なし） ・ 3月5日、大田教区ベェ・ドゥファン（裴斗煥）主教来訪 ・ 3月22日、ソウル教区、チャ（車）神父来訪 ・ 4月16～23日、釜山教区チェ・チョルヒ（崔哲熙）主教東京教区訪問、4月11日～24日、蔚山聖バルナバ教会信徒長イ・ミョンヒ（李明熙）氏東京教区訪問。東京教区の招待で来日、BTプロジェクト推進その他について協議した。 ・ 6月24日、田光司祭蔚山聖公会から家族と共に帰任。 ・ 10月8～12日の間、後藤主教を初め20名の訪問団が釜山教区蔚山聖バルナバ教会献堂式（10日）出席のため訪韓、その後ソウル教区を訪問、歓迎を受けた。 ・ 10月18～30日、釜山教区婦人会チャプレンキム・ジェホン（金在憲）神父、婦人会長他を東京教区に招待した。 ・ 11月25日、ソウル教区イ・チョンファン（李天煥）主教来訪 ・ 11月22日、大田教区ウオン（元）神父来訪	カーター大統領在韓米軍撤退中止表明。 野党、学生ら朴政権打倒運動広がる。 朴正熙大統領、金載圭中央情報部長によって射殺される。 全斗煥ら軍内部のクーデター

	・ 11月23日、釜山教区チャン（張）神父来訪 ・ 12月31日をもって後藤真主教定年退職。（本期間、日ー韓交流活発）	
1980	（高畠靖司祭） ・ 3月6日、釜山教区チェ・チョルヒ（崔哲熙）主教東京教区訪問（BT関連） ・ 7月15～22日PIM委員長ムン・サンユン（文相）神父東京訪問（BT評価） ・ 4月22日、ソウル教区キム・ジンマン（金鎭萬）教授来日（BT評価） ・ 5月18日、イ・チョンファン（李天煥）主教来日。 ・ 6月2～13日ホン・チュンナム（洪忠男）、パク・ユンギュ（朴潤圭）両神父来日 ・ 9月10日キム・ソンス（金成洙）神父来日 ・ 9月25日～29日大韓聖公会宣教90周年記念式典（ソウル教区）に東京教区から井原常置委員、竹内MRI委員、塩田広報委員長、山田宣教委員長出席、途中蔚山聖公会を訪問。 ・ ソウル教区から聖職2名の東京訪問計画でる。 ・ 11月、釜山教区のキム・ヨンチョル（金栄哲）、ジョン・マンドク（鄭満得）両神父、東京教区訪問、15日間の研修。（この間、ソウル、釜山両教区との人的交流頻繁）	1980　光州で市民・学生と戒厳軍衝突、死傷者多数。（光州事件）。 全斗煥大統領に選出。 第五共和国発足。
1981	（高畠靖司祭） ・ ソウルの聖ペテロ学校基金募金に協力。 ・ 9月23日の教区フェスティバルに説教者として韓国聖ペテロ学校長キム・ソンス（金成洙）神父を招聘。 ・ BTについてチェ・チョルヒ（崔哲熙）主教から提案。東京教区から返信。（教区主教不在時でもあり消極的な内容） ・ ソウル教区大聖堂主任司祭　キム・ジェヨル（金在烈）神父ほか1名東京訪問、諸教会、学校等を視察。 ・ 東京教区で訪韓団を計画。8月に竹内司祭がソウル、釜山両教区と打ち合わせを行う。10月8～12日、東京教区訪韓団、釜山、ソウル各地を訪問した。	
1982	（高畠靖司祭）	日韓で教科書問題起こる。

	・6月18～24日、釜山教区キム・ヨンチョル（金栄哲）神父他4名の信徒の研修を受け入れた。 ・大韓聖公会聖職と日本聖公会の聖職との合同セミナーを開く方向を検討。これについては日本聖公会協働委員会が主となってすすめMRI委員会はこれに協力することとした。 ・上記セミナーについて竹内司祭が訪韓し、打ち合わせた。 ・ソウルのペテロ学校のための募金を継続実施した。	
1983	（佐藤徹司祭） ・MRI委員長が高畠司祭から佐藤徹司祭に交代。 ・4月11～16日、委員長の新任に伴い大韓聖公会を訪問、各教区主教、聖ペテロ学校、蔚山教会を訪問した。この際、ソウルにおいて山田教区主教から聖ペテロ学校理事長の李天煥主教に募金の100万円を手渡した。 ・6月1～2日、山田教区主教、竹内、佐藤両司祭がソウルで行われた日韓合同セミナー第1回準備会に出席、下地作りを行った。 ・10月8～12日、第4次訪韓団（団長竹内司祭、参加10名）が釜山教区、蔚山バルナバ教会を訪問交流、ソウルで聖ペテロ学校等を訪問した。	「離散家族さがし」運動始まる。 大韓航空機、サハリン上空で撃墜される。 ラングーン（現ヤンゴン）で爆弾テロ事件。
1984	（佐藤徹司祭） ・10月6～10日、日韓宣教セミナーがソウルで開催され、日本から30名参加、内東京から山口、五十嵐、河野、竹内、佐藤の各司祭が出席した。 ・10月26日、山田主教からキム・ソンス（金成洙）主教に聖ペテロ学校募金の残額を手渡し、これをもって募金活動を終了した。聖ペテロ学校にの奉献額は10,251,120円であった。	南北統一問題提案応酬。 全斗煥大統領訪日。 南北赤十字実務者会談。
1985	（五十嵐正司司祭） ・MRI委員長が五十嵐正司司祭に交代した。 ・11月11～19日、第2回日韓聖公会宣教セミナーが大阪で開催、東京教区から前田司祭（社会委員長）、長谷川司祭、キム・スンイ（金順伊）、五十嵐司祭、佐藤信康司祭が参加した。終了後、参加者による合同報告書が作成さ	南北赤十字会談。 南北間故郷訪問団ソウル・平壌を訪問。

	れた。	
1986	（五十嵐正司司祭） ・ 8月18日～24日、ソウル・東京青年交流を韓国で開催。宣教・社会 ・ MRI委員会協働企画で現地での日本側責任者は前田社会委員長。参加者は前田司祭のほか、井田泉司祭、近藤幸平執事、高瀬祐二伝道師、加藤博道、加藤俊彦、下条裕章各神学生、香山洋人、菊田かおり、波多野あき子、宮谷尚美、石川高明の12名（韓国側も12名）。参加者から116頁に及ぶ交流記録出され各教会にも配布された。	第10回アジア競技大会ソウルで開催。
1987	（五十嵐正司司祭） ・ 6月に2週間にわたってソウル教区からユー・ジェー・ホー（劉裁鎬）、キム・ヨングク（金容国）の2神父が東京教区を訪問、研修。 ・ 12月、第2回ソウル―東京青年セミナーを目指し第1回準備会。	盧泰愚民正党代表委員6.29宣言（民主化宣言）。 大韓航空機、ビルマ上空で爆破。 大統領直接選挙で盧泰愚当選。
1988	（木村直樹司祭） ・ 1月6日、竹田主教着座 ・ 按手式でソウル教区イ・チョンファン（李天煥）前主教が説教。 ・ 1月13、15日、ソウル教区キム・ソンス（金成洙）主教、キム・グンサン（金根祥）神父とセミナーの内容について意見交換。 ・ 3月、前田司祭、香山洋人神学生が訪韓し内容を決定。 ・ 5月、第3回日韓聖公会宣教セミナーが、釜山教区研修院で開催。（管区）五十嵐正司司祭（日韓協働委員）、東京教区から藤井慶一執事を派遣。 ・ 東京教区では第2回青年セミナーをソウルで開催すべく準備したが、ソウルオリンピック開催に伴う種々の状況から今年度開催は不可能となった。このため、聖公会神学院を会場に8月22日から4日間、日韓青年交流研修会を行った。ソウル教区からチュ・ソンシュク（朱成植）伝道師、キム・ソンオク（金善玉）姉が参加した ・ 9月、ソウル教区聖職研修としてソウルからホン・ヨンソン	第24回オリンピック、ソウルで開催。 政治犯7000人釈放。 野党圧勝。

	（洪永善）、イ・ジョング（李定九）2神父を東京教区で受入れ、3週間の研修を行った。（フェスティバル参加、北関東、大阪訪問など）	
1989	（神崎雄二司祭） ・ 東京―ソウル青年交流協議会を「相互訪問形式」による新たな交流として位置づけた。8月、ソウル教区から青年4名を招待し、東京、大阪（生野）で研修会を行なった。また、9月には東京から4名の青年がソウル教区を訪問した。 ・ 10月、ソウル教区聖職、キム・ヨンイル（金栄一）、チェ・スンチョル（崔勝哲）両神父が来日、2週間にわたって研修を受けた。（福田聖公会、大阪聖ガブリエル教会訪問等）なお、ソウルでの東京教区の聖職研修についてキム・ソンス（金成洙）主教から度々要請されている。	全斗煥前大統領、国民に謝罪宣言、国会で証言。
1990	（前田良彦司祭） ・ ソウル教区からの東京への教役者訪問は諸般の事情により本年は実施されなかった。 ・ 東京―ソウル青年交流は7月にソウルで行われ、伊藤葉子、大井和明の2名が10日間にわたって主として農村活動を体験した。また、第2回目の生野研修は8月に実施され、東京から7名、大阪教区から2名、ソウルから2名他が参加して行われた。 ・ 9月、ソウルで行われた大韓聖公会宣教百年記念式典に、公式訪問団として前田MRI委員長のほか竹内、五十嵐両司祭、香山伝道師が参加した。	盧泰愚大統領、訪日。 国会で韓国首脳として初演説。 韓国、ソ連と国交樹立。 ソウル・平壌で南北高位級会談開催続く。
1991	（前田良彦司祭） ・ 本年度からMRI委員会は小委員会制度を設け、韓国関係は日韓小委員会が担当することとなった。 ・ 9月、教役者人事交流として、キム・チュンペ（金俊培）、チェ・ウンシク（崔銀植）両神父が2週間、東京教区で研修した。（含む京都、大阪） ・ 懸案の東京教区からの司祭の韓国訪問が実現した。第1回として、前田MRI、中村宣教両委員長がソウル訪問を行った。 ・ 東京―ソウル青年交流は91年度は「相互訪問」の第3回	大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国、国連に同時加入。

	としてソウルに東京教区から3名が参加した	
1992	（前田良彦司祭） ・ 10月、92年度の聖職交流として、ソウルからイ・チョルウ（李哲雨）、キム・ヨンフェ（金栄会）両神父が来日、2週間の研修をされた。（関西訪問を含む） ・ 東京教区からのソウル訪問は、笹森聖職候補生と高橋宏幸司祭が参加、3週間にわたって研修を行った。 ・ 青年交流は一時休止することが確認された。	韓国、中華人民共和国と国交樹立。
1993	（前田良彦司祭） ・ 10月25日～11月6日、93年度の聖職交流として、ソウル教区からカン・グアンファ（姜光夏）、ジョン・ソクダル（全碩達）両神父が2週間にわたる研修をされた。一方、東京教区からは、宮崎光執事、香山洋人聖職候補生が選ばれ、ソウルにおいて研修をうけられた。 ・ 青年交流は、教区としての具体的動きはなかったが、聖三一教会が蔚山の聖バルナバ教会、練馬聖ガブリエル教会が仁川のカンソク教会とそれぞれ姉妹関係を結び青年を含む交流が行われた。	金泳三大統領就任。 文民政権誕生。 大田万国博覧会開催。
1994	・ 1994年3月の教区会で東京教区機構改革が行われ、MRI委員会が解散、日韓小委員会は（前田良彦司祭）「日韓プロジェクト」と改称された。 ・ 94年の聖職交流は次の通り行われた。 ＊11月8日～21日、東京教区から下条裕章司祭、杣取賢一執事をソウル教区に派遣、約2週間にわたって研修を受けた。 ＊11月21日～12月1日、ソウル教区からイ・ギョンホ（李京浩）、ジョン・キルソプ（鄭吉樊）両神父が来日、東京教区内の教会訪問、日本聖公会の状況、女性司祭についての情報交換その他の研修をされた。	金泳三大統領、日本公式訪問。 金日成主席死亡。 ソウル漢江の聖水大橋崩壊事故。
1995	（前田良彦司祭） ・3月の教区会で宣教委員会から「日韓プロジェクト」を「日韓・在日問題」と「日韓交流」の2つのプロジェクトに分けて設置する議案を提出し承認された。以後、大韓聖公会との交流に関しては「日韓交流プロジェクト」が担当することとなった。リーダーは前田良彦司祭が任命された。	ソウル、三豊百貨店崩壊事故。 旧朝鮮総督府建物解体始まる。 盧泰愚前大統領、収賄容疑。 全斗煥前大統領、反乱罪容疑で逮捕される。

（日韓・在日問題Pは香山洋人執事）

・ 6月8日～12日、韓国語学習者のソウルでの研修に協力した。（8名参加）

・ 11月1日、ソウル教区のジョン・チョルボム（丁哲範）師の主教按手式にプロジェクトから前田、長谷川司祭ほかが出席した。

・ 11月8日～10日、ソウル教区において東京―ソウル両教区協議会を実施、東京教区から前田、長谷川両司祭、香山執事ほかプロジェクトメンバーなど6名が参加、ソウル教区側と今後の交流と協働の在り方について協議し確認した。

・ 95年度の聖職の交流研修について次の通り実施した。

＊11月17日～12月1日、高橋顕司祭と八木正言執事がソウル教区を訪問研修。プリジェクトでは、そのためのソウル教区との調整を行った。

＊12月5日～14日、ソウル教区からアン・チョルヒョク（安哲赫）神父とジョ・ヨンジュン（曹永俊）神父の2名が来日、東京教区を中心に研修を行った。

1996　（前田良彦司祭）

・ 2月11日～20日、聖公会大学社会福祉学科の教員、学生一行10数名来日、研修を行なったが、滞日中の通訳者の紹介、主日礼拝案内、歓迎会などを有志の協力を得て実施した。

・ 1995年11月に日韓交流プロジェクトとソウル教区国際交流委員会がソウルで協議したが、その際「1997年を目標に両教区聖職者の合同研修会を検討する」ことに合意した。この実現のため、7月14日～16日、ソウル教区からバン・スンヒ（方承憙）氏（国際交流委員長）およびホン・ヨンソン（洪永善）、ソク・クァンフン（石光勲）二神父を東京に迎え協議した。その後、日韓交流Pではこのプログラムを教区全体のものにするため、教役者会、聖職養成委員会に呼び掛け実行委員会を組織し、宣教委員会のワーキンググループに位置付け準備を進めた。

・ 10月9日、BTプロジェクト20周年記念礼拝が釜山教区で行われた、河野裕道司祭に参加していただいた。

クリントン米大統領、韓国訪問。
北朝鮮北部深刻な洪水被害。
2002年サッカーワルドカップ、日韓共同開催決定。
金日成主席の喪明け宣言。
金正日労働党総書記就任。
北朝鮮、干ばつ被害報道。
韓国、IMF支援受け入れ。（IMF危機）

・ 96年度の東京教区・ソウル教区聖職者の短期交換研修を次の通り行なった。

＊10月17日～30日、ソウル教区からイ・ヒョンウ（李賢宇）神父とカン・グァンソク（姜寛錫）神父が来日。

＊11月11日～22日、東京教区より佐々木庸司祭と吉村庄司司祭がソウル教区を訪問。

1997　（長谷川正昭司祭）

・ 1月20日～22日、東京・ソウル聖職合同研修会の準備のため大畑司祭、高橋顕司祭、佐々木庸司祭、長谷川司祭、長谷川順伊の5名がソウルを訪問、ソウル教区の国際交流委員会と協議した。この結果、本研修会の概要について合意した。

名称　「ソウル・東京21世紀宣教大会」
副題　―教会・未来・挑戦―
会期　97年6月16日～19日
場所　ソウル郊外
参加者　聖職だけでなく信徒も含む。

・ 2月9日～19日、昨年に引き続きソウルの聖公会大学社会福祉学科学生18名、スタッフ2名が来日、葛飾学園、滝乃川学園その他で実習した。東京では聖公会神学院、日韓交流Pが協力して受け入れた。

・ 2月25日～28日、ソウル大聖堂オモニ会（婦人会）連合聖歌隊が来日、26日聖アンデレ主教座聖堂にて公演を行なった。チャプレン　キム・グンサン（金根祥）神父ほかメンバー46名で、東京教区が毎年行なっている在韓被爆者救援献金に対する感謝のために行われた。この公演のため日韓交流Pが中心となって受入れを進めた。

・ 3月20日開催の東京教区第82（定期）教区会で、宣教委員会から提出の議案、「ソウル・東京21世紀宣教大会」プロジェクト設置の件は賛否同数となり議長裁決で可決された。リーダーは長谷川司祭。

・ 6月16日～19日、ソウル郊外　ヤンピョン（楊平）韓化コンドミアを会場に「ソウル・東京21世紀宣教大会」（教会・未来・挑戦）を開催。東京教区からは竹田眞主教以下聖職16名、信徒11名、通訳3名の合計30名が参加、一方ソ

	ウル教区からは丁哲範主教以下聖職27名、修道女3名、信徒12名、スタッフ3名の合計45名で、双方合わせて75名によって2泊3日の研修会が行なわれた。最終日に採択された共同報告書は大会の成果と今後の両教区の協働課題を明確化した。この内容は東京教区に於いて報告書にまとめられ、教区内に報告されてこのプロジェクトを終了した。 ・97年度の東京・ソウル両教区聖職者短期交換研修は、6月の大会の実績を踏まえ、宣教大会で「教会成長」の主題について発題した、ジュ・ソンシク（朱成植）神父とコウ・ヨンドン（高英敦）神父を10月15日～23日東京に招待し、研修していただいた。21日午後から夜にかけてお二人による講演会を教役者と一般向けの2回に分けて、教区会館で開催した。	
1998	（長谷川正昭司祭） ・7月8日～10日、ソウル教区のソク・グアンファン（石光勲）教務局長、イ・ギョンホ（李京浩）宣教教育主事の2名が東京教区を訪問、東京教区の状況、女性司祭問題についての懇談などを行なった。 ・9月21日～25日、21世紀宣教大会での共同報告書に基づく、外国人労働者問題の具体的展開として、ソウル教区で外国人労働者問題に取り組んでいる南楊州教会のイ・ジョンホ）李貞浩神父と同教会信徒、イ・ユンジェ（李充載）兄を招待しカパテラン・スタッフとの意見交換、横浜での活動諸団体訪問などを行った。途中23日の教区フェステバルにも参加された。 ・1998年度の東京・ソウル聖職者短期交換研修は、10月1日～16日、中川英樹聖職候補生を派遣した。今回はソウル教区と姉妹関係にある中部教区との合同プログラムという新しい形をとった。中部教区からは野村潔司祭が参加した。	金大中大統領就任。 テポドン事件。 金大中大統領、訪日。
1999	（長谷川正昭司祭） ・1月6日、東京教区主教座聖堂で行なわれた二人の女性司祭按手式にソウル教区からソウル大聖堂キム・グンサン（金根祥）主任司祭ほか数名が参加された。	

	・ 3月1日、釜山教区李大庸主教の按手式に日韓交流プロジェクトを代表して前田、長谷川両司祭が出席した。 ・ 10月、聖職者短期研修としてソウル教区からユ・キシュ、チョウ・ヒビンの2神父が来日、東京教区の各教会、神学院その他を訪問した。 ・ ソウル教区大聖堂主任牧師のキム・グンサン（金根祥）神父から、5月を目標に主教座聖堂同士の交流をしたいとの申し入れがあったが、本年は諸般の事情で実現に至らなかった。そのため、明年実施を目指し、11月にキム神父を東京に招き準備のための打ち合わせ会を行った。	
2000	（長谷川正昭司祭） ・ 3月28日から5日間、ソウル大聖堂からキム・グンサン（金根祥）神父の引率で信徒16名が来京、東京教区主教座聖堂を中心に講演、信徒間の交流などをおこなった。	南北首脳会談。 金大中大統領、平壌に金正日労働党総書記を訪問。

『あとがき』にあるように
＊1962年以降の日本聖公会東京教区と大韓聖公会との交流経過は東京教区教区会記録ほかによる。
＊1866年～2000年の歴史年表は
「図説　韓国の歴史」　姜徳相、鄭早苗、中山清編　金両基監修　河出書房新社,1998年
机上版「世界史年表」　歴史学研究会編　岩波書店,1995年
「韓国ほど大切な国はない」　重村智計著　東洋経済新報社,1998年
を参照させていただきました。

あとがき

岡野　峻

今回刊行される日韓交流史「もう一つの半月(パンダル)の詩」の企画は、昨年初めの日韓交流プロジェクトの定例会合の中で、今までの東京教区と大韓聖公会の長い交流の活動を振り返ってみて、これを整理し何らかの記録に残したらどうだろうかという話からはじまった。

折しも韓国聖公会大学大学院で学ばれていた、ソウル教区の前韓日協働委員長の方承熹(パンスン ヒ)氏の修士論文「韓日聖公会交流史に関する考察」が我々の手許に届き、これに触発されたこともある。

取りあえず過去の東京教区の教区会記録から日韓交流に関する部分を抜粋してこれを年表にする作業から始められた。巻末の年表がそれであるが、教区会に報告された、いわば公式な記録である。もっとも、報告者によって記述に精粗があり、すべての出来事が網羅されているかどうかは分からないが、東京教区と大韓聖公会との交流の概略を捉えることができるのではないかと思う。

この年表をプロジェクトのメンバーで検討していく内に、この中に出てくる人物や出来事についてもう少し掘り下げて見よう、日韓の交流にかかわった人の話も聞いてみたいと夢が膨らんでいった。

その内容については、プロジェクトリーダーの長谷川正昭司祭が冒頭の概説「ナショナリズムを越える視点を求めて」で述べられている通りである。

なお、年表は歴史的事実を記録したものであるだけに正確を期した積もりであるが、お名前を初め記述の内容に誤りや不正確な点を発見された場合は、ご遠慮なくプロジェクトあてご教示いただければ幸いである。

▽

記録によれば東京教区が正式に大韓聖公会との交流を始めたのは、1967年であるから、2000年が終わろうとしている現在の時点で僅か30年余りを経過したに過ぎない。

しかしその間に、実に沢山の方々が、様々な形で聖公会を通じて日韓両国に

またがる問題について熱心に取り組まれた。そして、多くの困難を乗り越え課題を一つ一つ解決しながら、21世紀に向かって期待の持てる新しい関係の構築に力を尽くされてきた。その努力は今後も続けられなければならない。この小冊子がそのために幾らかでもお役にたてるならば幸いである。

本誌刊行に当たって、ご多忙の中インタービューに応じて下さった李天煥（イ チョンファン）主教、竹内謙太郎司祭をはじめ、快く原稿をご提供下さった方々、テープ起こしや版づくりにご尽力いただいた方々に心からの感謝を申し述べたい。

（宣教主事）

2000年度日韓交流プロジェクトメンバー

	保坂　功	（大森聖アグネス教会）
	長谷川ジェンマ	（大森聖アグネス教会）
	森　晃一	（浅草聖ヨハネ教会）
	大川　延敏	（聖アンデレ教会）
司祭	前田　良彦	（浅草聖ヨハネ教会）
司祭	佐々木庸	（練馬聖ガブリエル教会）
司祭	長谷川正昭	（大森聖アグネス教会）

日韓教会交流史
「もう一つの半月(パンダル)の詩(うた)」

発行　2001年3月20日　（600部）
発行者　日本聖公会東京教区宣教委員会
　　日韓交流プロジェクト
編集　日韓交流プロジェクト

印刷　（有）ギンショー